

辰元 忠先生 追悼誌

追悼誌

目 次

はじめに	医療法人社団高信会・社会福祉法人信愛会理事長	辰元 信	p2
------	------------------------	------	----

アルバム	辰元忠 一生の写真と年譜		p4
-------------	---------------------	--	----

家族・親戚より

追想		辰元 昭夫	p10
前理事長を偲んで	鹿児島信愛施設長	宮内 俊明	p13
『マイウェイ』の歌のように我が道を行く		宮内 薫	p15
シンプル・イズ・ベスト—故辰元忠理事長の一周忌に寄せて—	長寿園園長	閨野 耕二	p20
“ひとつべ”の人生	元『光辰』女将	閨野 恵美子	p23
お父さん		小松 裕子	p25

政治家・地域の方々より

もみじが丘と辰元忠先生	宮崎県芸術文化協会会長	渡邊 綱纜	p30
辰元忠先生の思い出	元衆議院議員	米沢 隆	p32
辰元先輩のご逝去を悼みます	前・宮崎市長	津村 重光	p34
4コマ漫画 『市営バス“合併号”物語』	(原案:辰元忠 画:本部美穂子)		p36
畏敬する辰元先輩	衆議院議員	川村 秀三郎	p37
故辰元忠先生追悼文	参議院議員	松下 新平	p39
辰元先生と私	宮崎県議会議員	権藤 梅義	p42
辰元忠先生を偲んで	宮崎市議会議員	宮永 征昭	p44
辰元先生の心	元高岡町議会議員	岩見 進一	p45
『きんかん』を地域にプレゼント	地域住民代表	松浦 純子	p46

関係業者の方々より

対談 『信長のような人』	(有)セグチメディカル代表	瀬口 賢策	p48
	つねむら代表	鎌田 国吉	
辰元先生との出会い	(有)高岡プロパン商会会長	川野 重利	p56
思い出	元『やまほ』経営	松浦 保	p59
辰元先生に教えられたこと	(有)ドラッグストアアーモット代表取締役	森元 直正	p61
辰元忠先生を偲んで	上川路会計事務所所長・公認会計士	上川路 長生	p64
いつも圧倒された辰元先生	九州東邦㈱	日高 和良	p66
辰元先生へ	(有)グリーンハウス宮崎代表取締役	野中 勉	p68
辰元忠理事長との出会い	株式会社内山組代表取締役	内山 吉二	p70
大地に絵を描いたフロンティア人	アーバンアメティ設計(有)代表取締役	赤澤 文義	p71
忘れられない先生	宮崎千果株式会社営業部長	上林 サダ子	p73

アルバム	折々の写真		p75
-------------	--------------	--	-----

アルバム	設計が好きだった辰元忠理事長の手掛けた病院・施設群(一部)		p78
-------------	--------------------------------------	--	-----

座談会 『多面的で大きな存在だった先生』	山下真智子、渡邊静、松元由美子、橋口勝彦、 楠元剛志、川越淳、柏田沙代		p80
-----------------------------	--	--	-----

医療法人社団高信会職員より

時代を先取りした事業家であった辰元先生	辰元病院院長	川崎 渉一郎	p98
辰元理事長の思い出	辰元病院副院長	木下 泰行	p101
辰元忠先生の思い出	辰元病院副院長	岩切 徹	p104

思い出	辰元病院事務長	有山 恵子	p106
理事長先生との思い出	辰元病院外来主任	山下 真智子	p108
厳しさの裏にある心の優しさ	辰元病院介護課長	渡邊 静	p111
秘書として身近に接して	信愛ホームデイケア長・相談員	橋口 勝彦	p113
院長と共に歩んだ日々	辰元病院介護部長	平田 時子	p117
辰元忠前理事長を偲んで	辰元病院看護師長	小畑 初美	p124
すべてに熱心だった理事長	辰元病院病棟主任	山口 好子	p129
大きな存在	辰元病院放射線科技師	原口 正人	p131
理事長先生を悼む	信愛ホーム介護主任	山本 邦子	p132
追悼文	辰元病院介護主任	矢野 房子	p133
ここが一番いいヨ	辰元病院介護主任	杉尾 町子	p135
前理事長とは	信愛ホーム看護主任	駒山 道生	p136
先生との思い出	辰元病院営繕副主任	高橋 英敏	p138

社会福祉法人信愛会職員より

前理事長先生を偲んで	ケアハウスシャトル生活相談員	宮田 トク子	p142
辰元忠前理事長を偲んで	たかおか居宅介護支援事業所管理者	楠元 剛志	p144
男のロマン	長寿園医務主任	北堀 志美子	p146
食事に対する想いを伝えたい	裕生園管理栄養士	松浦 玉子	p148
生き続ける理事長の精神	裕生園副園長	川越 淳	p151
理事長が教えてくださったもの	高岡地区地域包括支援センター主任ケアマネジャー	西菌 脩子	p155
偉大なドクター	元裕生園医務主任	入船 三代子	p156
『大好きなおとうさん』(ナナ子・ミミ・シロちゃんより)	グループホームたちばな管理者	長友 美紀	p158
感謝	裕生園事務主任	柏田 沙代	p161
前辰元理事長を偲んで	ケアハウスシャトル事務長	中岩 哲也	p163
『きんかん』命名に立ち会う	裕生園介護主任	甲斐 ミツ子	p165

グジブランド職員より

辰元忠前理事長との思い出	アルテンハイム・グジブランド施設長	後藤 秀臣	p168
辰元忠先生へ	アルテンハイム・グジブランド事務長	松元 由美子	p171
真剣に向き合って下さった先生へ	アルテンハイム・グジブランドケアマネジャー	松浦 暉子	p174
辰元忠前理事長のカリスマ性	アルテンハイム・グジブランド相談員	松村 為史	p175
辰元理事長を思う	アルテンハイム・グジブランド医務主任	広若 キクミ	p177
辰元忠理事長との思い出	アルテンハイム・グジブランド統括課長	河野 哲史	p179
理事長先生の思い出	アルテンハイム・グジブランド介護主任	西菌 幸子	p181

漢詩 『新屋竣成を賀すに題す』 (グジブランド利用者 村岡柳次) p184

辰元忠 世界旅行マップ p186

アルバム 世界を旅する p188

本人の言葉より

第一部 仕事のこと	p194
第二部 自分のこと、社会のこと	p201

おわりに 裕生園園長 辰元 圭子 p212

編集後記 p218

はじめに

医療法人社団高信会
社会福祉法人信愛会 理事長 辰元 信

昨年六月に前理事長であり私の父である 辰元 忠 が亡くなりました。それにつきまして皆様から、多くの励ましやお気づかいをいただき誠にありがとうございました。急だったねというお言葉も多数いただきましたが、数年前に脳卒中をきたしたこともあり足腰は大分弱っている状態ではありませんでした。

「自分は足腰が弱くなったり、食べれなくなったら終わりだ」「自分はしたいことは、がまんせずやってきた。だからいつ死んでも悔いはない」これまで老人医療に関わるものとして多数の人間の終末を看取った父が常々言っていた言葉でした。それらの言葉通り、私がこの辰元病院で働き始めてちょうど一年たった時に亡くなったことになりました。そういう所は、父らしい最後ではなかったかと思っています。

足腰が悪くなり、同時に以前からのわがままぶりがさらに多くなってきた前理事長を、多くの方々が親身になって相手をしていただき、職員の方々も身内である私達以上にやさしい対応や介護、看護をしていただと思っと思っています。

父が亡くなった後、グラントリノという映画を見ました。父の好きだったゲーティーハリシーリーズのクリントイーストウッド主演の映画です。車が好きで、口が悪く、頑固者で周りからうとまれている老人の役でした。なんとなく父とだぶる所がありました。

前理事長が亡くなった後、多くの方々から悼むお言葉をいただいた時に、前理事長が職員の方々をはじめ多くの方々に愛されていたということに気付きました。私の父は、これまでたくさん施設を作ることと一生懸命だったと考えていました。しかし皆様から多くの言葉をいただいた時に、素晴らしい人と人とのつながりを作ったことが、なにより父の大きな財産だったと感じました。そういう意味で父はとても恵まれており、幸せだったと家族としては思います。

私達の行っている老人医療は、人間の終末を見届ける医療でもあります。足腰が弱ったり、食べられなくなったり、認知症などでわがままを言ったりする方々をみさせていただいています。時にはわがままにカチンときたり、できない事にいらだつこともあるかと思えます。しかし前理事長にしていたように相手の身になった、やさしい対応、介護や看護をこれからも目指していきたいと考えますし、皆様にもこれからも宜しくお願いしたいと思います。

みなさま本当にありがとうございました。

辰元忠 一生の写真と年譜



父、継母(おば)、妹と



父、祖母、兄と(昭和11年、1歳)



妹と



初宮参り(昭和10年)



実母キク(3歳の時に世界)



母、兄と(昭和10年、生後3ヶ月)

昭和37年 3月	26歳	鹿児島大学医学部卒業
昭和39年 4月	28歳	鹿児島大学附属病院第二内科入局
昭和42年 2月	31歳	日本生命本社医務部に入社 宮内圭子と結婚
昭和43年 2月	32歳	長男信誕生
昭和44年 9月	34歳	長女裕子誕生
昭和46年12月	36歳	父 久奉没す
昭和47年 3月	36歳	日本生命宮崎支社勤務後退社
昭和48年 4月	37歳	宮崎市大塚町に『辰元医院』(内科・小児科)を開業
昭和51年 5月	40歳	社会福祉法人信愛会を設立 理事長となる

辰元 忠 略歴

昭和10年 6月14日	今の韓国の慶尚北道で、父 久奉、母 キクの次男として生まれる
昭和11年	1歳 鹿児島市に帰る
昭和14年 3月	3歳 母 キク没す
昭和17年 4月	6歳 鹿児島県女子師範附属小学校入学
昭和23年 4月	12歳 鹿児島市立長田中学校入学
昭和26年 4月	15歳 ラ・サール高校入学
昭和29年 4月	18歳 九州大学農学部入学
昭和31年 4月	20歳 鹿児島大学医学部へ編入

家族そろって、えびの高原の池の前で。
宮崎市大塚に医院を開業した頃。
圭子園長はこの頃はまだ専業主婦だった。
(昭和48年、38歳)



日光・中禅寺湖に行った時のもの
(昭和55年頃、45歳頃)



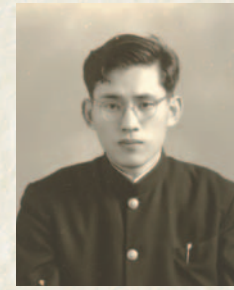
義弟の宮内恭雄氏と。
鹿児島県の城山観光ホテルにて
(昭和62年頃、52歳)



圭子園長の監授褒賞受賞のお祝いの席で。
『光辰』にて
(平成12年、理事長64歳、園長58歳)



鹿大医学部の正門前にて



鹿大の医学生頃の頃



継母と
(昭和29年、18歳。下駄は当時のラ・サールの校風)



右から3番目理事長
中央に座っているのが
父親の久奉氏
翌年の12月に亡くなる。
左から2番目園長
抱っこしているのは裕子さん
前列中央の男の子が信さん
(昭和45年正月、34歳)

平成8年	8月	61歳	『ケアハウス・シャトル』開設
平成11年	1月	63歳	『辰元病院』新館竣工
	4月		『天ヶ城訪問看護ステーション』開設
平成12年	4月	64歳	『ケアハウス・シャトル』新館竣工
	10月	65歳	『グループホームたちばな』竣工
平成14年	8月	67歳	『グループホームたちばな』新館竣工
平成17年	11月	70歳	『セントラルキッチンたつもと』開設
平成18年	1月		高岡町が宮崎市と合併
平成18年	7月	71歳	『アルテンハイム・グジブランド』(宮崎市郡司分)開設
平成21年	3月	73歳	『きんかん小規模多機能ホーム』(宮崎市浮田)開設
平成21年	6月26日	74歳	永眠

昭和52年	4月	41歳	『特別養護老人ホーム裕生園』を東諸県郡高岡町(現在宮崎市高岡町)に開設
昭和53年	10月	43歳	『高岡クリニック』開設
昭和55年	1月	44歳	『高岡病院』に名称を変更
昭和58年	10月	48歳	有料老人マンション『信愛園』開設
昭和62年		52歳	割烹『光辰』オープン
昭和63年	1月	52歳	『シニアマンション鹿児島信愛』(鹿児島県始良町)開設
			宮崎市大塚から高岡町に居を移す
平成6年	1月	58歳	医療法人社団高信会設立 理事長となる
	2月		『辰元病院』に名称を変更
平成8年	6月	61歳	『辰元病院』本館竣工
	6月		老人保健施設『信愛ホーム』開設

家族・親戚より

- 辰元 昭夫 氏
- 宮内 俊明 氏
- 宮内 薫 氏
- 閨野 耕二 氏
- 閨野 恵美子 氏
- 小松 裕子 氏



子どもや孫に囲まれて
(『光辰』にて 平成 20 年、73 歳)



複合施設完成の頃
(平成 12 年、65 歳)



屋久島で義弟の宮内薫氏と。
屋久島には、亡くなる一週間前まで
通い続けた。
(平成 20 年、73 歳)



平成 21 年 6 月 26 日永眠。享年 74 歳。
告別式が宮崎市高岡町の葬儀場で行われた。



追想

辰元 昭夫

辰元忠元理事長が故人となり早や一周忌となります。御存知の通り、医者としての技量技術は勿論のこと、それにもまして起業家精神、経営手腕、先見性は、他の追隨を許さないものがありました。

いつも何かをやるうと云う時の気力、口角あわを飛ばして話し始めると止まるところがなく、その熱意や論理性には非の打ち所が無く、我ながらなるほどと感心することしばしばでした。「果たして結果は？」と思っていると、話した通りの結論となっていくのには驚きもので、敬意を払うのみでした。

なかなかのロマン家でもありました。一旦云い出すと、どんなに他人に言われても己れの道を行く不退転の決意、推進力、ぶれのない言行一致の姿勢を貫く人は少なく、実に貴重な人材でありました。良き妻、家族、親族、友人、知人、職員等の温かい協力と援助に恵まれたことは、一親族としても厚く感

謝申し上げる次第です。

顧みますと、私が鹿児島にいた頃、亡くなられた忠さんの母さんのお墓を掘り上げることになり、偶然にもその手伝いをしました。その時、黒く焼かれたもみながらに絹の着物が朽ちずにそのままの状態が発掘されたのには驚きでした。数ある親族の中で奇しくも私がこの様な出来事に巡り合えたのも、今思うと、忠さんとの因縁の深さを改めて強く感じております。

又、父子お揃いで市内から田舎に来た時は、必ず私の自宅に立ち寄っていました。その時の忠さんの面影が未だに忘れることが出来ません。制服制帽で実にカッコイイ出で立ち、立ち居振舞いは立派なものでした。父さんはいつも忠は優秀な子供だと褒めており、恐らくその成長を楽しみにしていたものでしょう。確かに子供の頃から、大人になってからの

一脈を示すものがあつた様な思いもします。

母親を早く亡くされたためか、母恋の一片の話を聞かされたことがあります。父母が東京見物に行くのに今は亡くなられた妹の美代子さんだけを連れて自分だけが取り残された。あの時、母が連れていけば良かったのに、と悲しげに語ってくれたこともありました。母親の最も恋しい時期であつただけに余計に身にしみていたのだと思います。

忠さんも私も子供の頃は多少の顔合わせはあつたものの社会人となりすっかり会う機会もなく、それぞれの道を歩いていました。奇しくも二人共宮崎への転勤となり、再会となったのも不思議な縁だつたと思います。それ以降お互いに「忠さん」「昭夫さん」呼ばわりで、数々の好意に甘えて参りました。

数年して私は宮崎を去り、千葉に住居を構えることになりました。そんなある日、宮崎に遊びに来いと電話があり、伺うと、一緒に働こうと誘われました。当時ある企業に在籍しており、一年間待つて欲しいという、「いや、半年後は必ず来るように」とのこと。その場では空返事をして帰宅しました。その後、手紙や電話で「来月から来い」というものの、私も

身辺、会社への義理等でやっと三ヶ月延ばして縁のある忠さんの元にお世話になるべく馳せ参じた次第です。兎に角、思い立ったら即座に実現していく熱意対応はきらりと光るダイヤの如しである。

ある夜、十一時半頃、床に就きうとうとしてみると、「昭夫さん、問題が発生しているので一緒に考えてくれ」といわれ、解決に向けて対応したことがあります。雨や嵐何のその。真昼は勿論、真夜中であるうが一緒にいる以上は常在戦場で、全てをやり抜く精神、これは誠に立派で学ぶべき点、大なるものがありました。時についていけないと思う時もありましたが、他人は尚更と思います。それはそれ、妥協しないのは先刻御承知の通りです。

大胆なる発想、繊細なる精神を備えた人材であつただけに辰元家にとつても又社会的にもこの逸材の死は余りにも早すぎて残念でなりません。

これからも園長を始め、信理理事長家族親族のために、皆様方の御指導御協力を切にお願いする次第です。

忠さん、あなたは常に世間の人よりも数万歩先を自信に充ちて歩いていました。あなたのなされた仕

事は社会的に実に貢献大なるものであったと誰しもが認めるどころです。残された業績を全力で引き継いでいかねばなりません。天国から見守ってください。安らかにやすみください。御冥福を心からお祈り申し上げます。



追悼文

前理事長を偲んで

昭和六十三年、今から二十一年前、鹿児島県始良町に鹿児島県内第1号の健康型有料老人ホーム鹿児島信愛が開設された。当時、このような施設は珍しく、県民の大きな関心事となった。その後、わが国の介護保険制度導入に伴い、平成十七年から住宅型及び介護付有料老人ホームと内容・名称を変更し現在に至っている。

このように、前理事長は、将来の日本の高齢者社会を予見し、「高齢化社会の到来にいかに対処すべきか」を若い頃から研究し、宮崎県高岡町を中心に、次々と老人福祉施設等の複合施設を開設され、その先見性と行動力は驚くばかりであった。

前理事長室に、高齢者社会に関する蔵書と同時にドクター【製図版】が置かれ、将来の辰元グループの構想を常日頃から練られていた姿を思い出している。

鹿児島信愛施設長 宮内 俊明

その思いは、年を重ねても変わることなく継続し、次々に新しい発想で物事に当たり研究熱心であった。前理事長は、机上の設計だけでなく、現地に出向き事前のリサーチも入念であり、即断即決の所があり周囲は驚かされたが、前理事長の十分な計画性や決断力の早さには敬服するのみであった。

また、前理事長は、見聞を広めるために国内外を旅行されるのが好きで、前理事長室には、世界地図が置いてあり、これまで旅行した場所には赤いマークが打たれ、その数もおびただしいものであった。

前理事長にとって、最後の海外旅行となった南米3カ国（ブラジル・アルゼンチン・ペルー）の旅は、特に思いが強かったように思われる。それは、南米3カ国の旅行計画を自分自身で作成し、十三日間で3カ国を回るといふ計画は、旅行者に言わせると無謀なプランであったが、それでも何が何でもやり

遂げるといふ意志の下、この計画を実現させたいという喜びと満足感にあった。

高校時代から、大きな夢の一つであったアルゼンチンのパンパ（大草原）で寝転びたいとの想いが、六十数年振りに実現し、パンパで子供のようにはしゃいでいられた前理事長の童心に帰った姿が、印象的であった。また、ペルーでの世界遺産・マチュピチュでは、ガイド同然、同行した我々に文化的歴史や背景など、詳細に説明され、そばにいたガイドも前理事長の博識ぶりに驚かされていた。

前理事長は、高校時代好きな教科や得意な教科は「地理」であったと聞いていたが、確かに一緒に同行した我々に、歴史的背景など随所で解説していただけでなく、その博識ぶりに敬服した。（南米3カ国の旅等については、『いっちゃん』に、十六ページにわたり掲載されている）

経営者としての前理事長は一本筋が通っており、決してぶれない人物であった。したがって、「俺について来い」式のやり方で、それまで経営に当たってこられたが、その計画が、ことごとく計画通り実現し、成功するのに驚いた人も多かったに違いない。

前理事長が急逝された折、葬儀の弔花・弔問客の多さからして、前理事長の偉大さを十分に感じた。人はやがていつかは死ぬ運命にあるものの、人生八十年の時代、もう少し長生きをして欲しかったというのが大方の気持ちであろう。前理事長のご冥福を祈りたい。

追悼文

『マイウェイ』の歌のように我が道を行く

宮内 薫

辰元病院、開業時の話だ。その頃、私は故辰元理事長と一緒に仕事をする機会があり、次のような話を聞かされた時には驚き、冗談が好きな先生だと思った。当時の理事長は宮崎市内で開業して間もない頃だったが、「高岡町のはずれに老人のための病院を作る」と言い出した。当時の私達は、「今、ようやく宮崎市内で病院を開業したところ。次の計画を考えている暇などないはずだ」と思い、耳を疑った。しかも、当時は介護施設に親を預ける人は殆んどなく、人生の最後は自分の故郷で人生を終える。つまり、姥捨おばすてて山に子供が親を預けるはずがない、と言うのが常識だった。だが、今現在、どの町にも介護福祉の施設がたくさんある。当時、介護職員は、殆んど近くの農家の主婦や役場の職員の妻等であったが、現在は介護職員の年齢は若返り、二十代、三十代の若い介護職員で専門職に代わった。当時理事長は介護

職員を集めるのに必死であった。

理事長は、子供から老人まで誰と話しても耳を傾け、理解し、それを糧かきに勉強しアイデアを出して行った。理事長と話をすると、「一石二鳥、三鳥」という言葉を昔から耳にする事が多かった。ある時、タイヤボイラーを購入した。それは古タイヤを燃やしお湯を沸かすという機械で、それだけでもかなりのコスト削減につながったが、介護施設、病院側にたくさんゴミが出る、それもついでに燃やす、ということろまで考えていた。職員は古タイヤ集めに大変苦労したそうだ。現在はエコ時代で廃止となった。

辰元忠は医師であり実業家でもあると思う。自分の言い出した事については、他人が意見を言おうとしても全てを聞かない。逆に怒る。建築についても常に他人とは考えが違う。家も外側全てがタイルで



カウボーイ達に馬に乗せてもらう

昼夜の温度差があり、夜はホテルに踊り手が遠方から来て民族のいろいろな踊りをし、食事の後は私達日本人全員が行った事のない大草原で、馬を使ったカウボーイスタイルのいろいろなショーをしてもらった。その夜、理事長は「大草原に自分の墓を作る」と言い出して、それから一年以上我がままが続いたこともある。

あるだけでなく、家の内側もタイルである。設計士や建設会社が首をひねる。理事長の考えは、ペイントは五年十年経つと塗り替えをしなければならぬ。その為に十年二十年先の事を考えて仕事をして行く。そう言えば、今国が考えているインドネシア、フィリピンの介護士の事は、理事長は七年前に考え、フィリピンの人材を自分の病院に受け入れる為、フィリピンの病院、学校に理事長と園長が準備の為現地に赴いた。福祉については自ら国政より前に考え先に行動したが、その時は政府や他の人達は夢のような話だと聞き流していた。今考えれば、五年、十年先の事を見て仕事をして行く人で、元気な頃は、ゴルフをしても自分が打つたらすぐ先に歩き出す。「前に行くに危ない」と言うと、怒って「早く打て！」全て先に進む。同行者は、ルールがあり迷惑であるがゆえ、仕方なく同行しなければならぬ。我が道を行く人生だった。

南米に兄弟揃って旅をした。理事長は古稀、私は還暦、全てスケジュールは理事長の案でスタートした。理事長は本が好きで、全ての国の事を細かく調

べている。現地のガイドもびっくり。パンパ草原では日本人を見掛けるのも初めてではないかと思う。



アルゼンチンの広大なパンパと抜けるような青空をバックに

その頃、有料老人ホーム「グジブランド」の設計をしていた事もあって、建築基準法などあるのに、部屋の間取りなども自分の思うがまま。その時もブラジルまで設計図を持って行き、園長が部屋の間取りや使い勝手の話をして聞かない。すべて我が道を行く。

自分の話の中に出てくる数字には強い。自分で言った事は小さな事でも大きな事でも記憶が良い。設計についても安全を重視。建築基準法にかかわる偽装事件が社会問題となった時、「病院は壁の厚み20cm、天井の高さ270cmで全て問題ない」と言っていた。自分の考えを頭に入れていたので、役所に出してある図面が自分の考えと違っていることがわかり、それに関係した設計屋は出入り禁止。グジブランド完成まで、理事長のいない所を見て厳しい打ち合わせが続いた。建築業者の職人達に理事長が毎月焼肉、ビール、魚の味噌汁、うどん等何回もご馳走をした事があるが、その設計士一人だけ食事は禁止。それは理事長自身による設計の数字と違っていたから。担当者は朝怒られ、昼には理事長は忘れて焼肉

でも食べられるかと設計士は思っていたら、一人君は駄目と言われ、食べさせてもらえなかった事もあった。職人達を前にしてマイクを使って「間違いでした」と設計士が話し、やっと焼肉大会に参加する事が出来ました。

「孫・ひ孫ハウス」については設計、図面、仮の基礎まで進み、病院の職員が資材まで集めたが、「いつ完成するか」と理事長にせきたてられ、全員が理事長の我がままにびくびくしていたが、建築基準に合わない建物を「すぐ作れ！」と言われて：諦めさせるのに全員で考えた事もあった。

一つの事を考えたら、即実行。小規模多機能型施設の建設予定地である浮田へも雨の日も風の日も毎日行き、隣接の西田池を見る。自分の頭の中には設計プランがあり、名前も『きんかん』とすぐ決めた。三月になると桜の美しい場所で、完成し落成式に参加。ここが最後の仕事となった。

犬の好きな理事長はペット霊園をグジブランドに作ると言い出し、職員で時間のある人は、犬の墓作

雨が降り欠航になれば、と何回も考えた。でも不思議と予定通りに行く。一回だけ小雨が降った。

「自分は屋久島に住む」と言い出した。その時、大川原で石を三個拾って来て、滝の前で水戸黄門一行に扮した。助さん、格さん、付添い人の三人が付いて、石を重ねて写真を撮る。屋久島に別荘を買うと言い出し、土地、家探しに共に行動しました。最後には、自分の墓を屋久島に作ると言い出した。その時ぐらいいから、自分の体が悪いと思ったのか。屋久島のホテルで食事の時、涙を流し、「自分は一番幸せだ」と、「全ての人に感謝している」と言い出した。今考えれば、自分の最後が近いと予感していたのだろう。

故辰元忠の一生は自分の思い通りの一生だったと思う。

りに生コンを入れ、毎日出来具合をチェックするという大変な作業です。これは皆の反対で完成せずに終わった。

亡くなる前年の一月頃、屋久島へ五名で行った。フェリーの所要時間四時間。屋久島を一周してみても何も無い。一泊二日の予定で行った。屋久島でも我がままが始まった。あと一泊すると言い出した。仕事を持つ人は、明日仕事があるから先に帰る事になった。すると、早く帰るのが悪いと言いだした。理事長を気づかい無理に同行している事は考えない。仕方なく朝になって二人は帰った。

それから半年経った時、理事長はテレビで世界遺産の放映を見、ゴミの無い屋久島を目指すことにした。見物客が多くなればゴミ、落書きが多くなる。山、海、環境を守る為には子供の時から教えなければならぬ。屋久島の小学校にゴミ箱を作ってあげる。それが一番大事な事である、と。その後、五回屋久島に行き、行く度にゴミ箱の話。ただ今製材中とか材料が来ないと言って話をそらし、理事長は満足して、高速船トッピーで帰る。一週間するとまた行くが、理事長は晴れ男である。雨にあった事がない。



理事長が亡くなって約一ヶ月後に、理事長の写真を持って屋久島を訪れる。最晩年、理事長は屋久島を非常に愛した。

シンプル・イズ・ベスト

―故辰元忠理事長の一周忌に寄せて―

長寿園園長 閨野 耕二

標題の言葉は、故辰元忠理事長がもしかしたら自身の「座右の銘」として、持ち続けておられたのではなかったかと思う格言です。いや、「座右の銘」とはいかなくても、自身の信念の中の一つではなかったのか？と書いています。

私が、辰元病院にお世話になる事になったのが、昭和五十七年十二月中端でした。时期的に、辰元グループの一員として初めて参加した行事は、合同忘年会だったのです。

入職以来、毎年の様に病棟の増築や改築が繰り返されました。増改築の申請から、約一年後の完成検査や、諸々の申請の為に県の窓口に通い続けました。係の人とも顔見知りになってしまっただけで、「又、何かされるんですか？」とからかわれる程になったのです。その事を理事長に報告すると、苦笑いを

されたものでした。現在の一八三床までに、少しずつ、少しずつ拡大をされて行ったのも、理事長が確固たる計画を持っていた故の、経営上の方針だったのだらうと今になり思う事です。これらの出来事が、ついこの前だった様な気がします。

病院のほかにも、『むかさ診療所』や『たかおかクリニック』の新設など、次から次に事業を拡大されました。当然の事ながら、自身で基本設計を作成されていたので、建築上の規則をクリヤーする必要最小限の面積の建物でした。「ちょっと窮屈な感じですね」とでも言おうものなら、「事務長！建物は金を生まないヨ、質素にそして使い易く」シンプル・イズ・ベストだよ！と、返されたものでした。確かにそのとおりでした。経営者からすれば余計な造りに資金を費やしてはいけません。

理事長は、県外を含めて話題性を持つ建物が完成すると必ずと言って良い程見学に行きました。特に病院や、福祉施設などは入念に見て、見学終了後には必ず建物の部分で、「あ、いう所は必要ないな」「あそこは私ならこう造る」などと、自分の考えを私達に聞かせていました。良い所は余り口にされない方でしたが、多分に密かに自分の胸にしまっただけから、設計の参考にされていたのではなかったか、と思う事です。

理事長と会話していると、体調が優れている時は、その表情だけでも判断出来るくらいでしたので、機嫌良く、止まる事を知らない程に話は次から次へと出て来たものです。話が最高潮に達すると、身ぶり、手ぶり良く、外国人が両手を大きく動かしながら話す動きに似ていました。そして時には、胸の中央部分を両手こぶしでポコポコと叩く動作も混じったのです。たとえば悪いですが、大きなボスのゴリラが、自己顕示をする時に、良く胸を叩いて太鼓の様な音を出すあの動作に似て（ゴメンナサイ）まるで「この病院のボスは、俺なんだ！」と表現されている様な姿でした。それが余りにも白熱すると話の内容よ

りも「理事長、そんなに叩いて身体は大丈夫ですか？」と心配する程に、そちらに気が行ってしまいう事も有ったものです。

理事長との会話では、途中で必ず「君はどう思うか？」と意見を求められたものです。つい理事長の意見に合わせてしまいう事が多かったのですが、たまに私の答えが理事長の考えと違くと「君は、〇〇か！」と一喝されたものでした。

理事長は、食べる事にも人一倍強い信念を持っておられたと思います。例えば特に味や食べ物の形状、色彩など、昼食と一緒に検査する事が多かったのですが、食事中であっても、栄養士を呼んで、食べながら色々意見を出されていました。これもひとえに、入院患者さんにはせめておいしい物を食べさせてあげたい一心から来るものではなかったか、と思う事です。

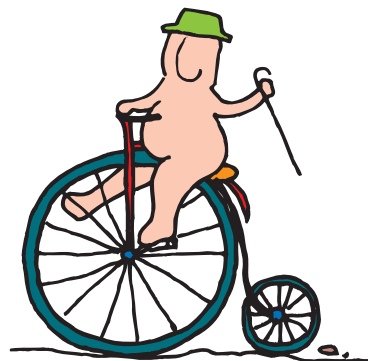
仕事を離れば、夜のニシタチにも良く連れて行って下さいました。飲んで、食べて満腹の状態でも、最後のしめは釜揚げうどんだったのです。「ごちそう様でした。もう腹一杯いただきました」と断わっても、「まあ、そう言うな」と誘われましたが、こうして飲

み会の時でも最後まで気を使われていた一面が、かい間見られたものです。

理事長との想い出は、公的なこと、私的なこと、次から次へと走馬燈のごとく尽きる事はありません。出会いから約三十年近くを過ごさせてもらいました。その間にいただいた多くの辰元忠語録は、今私の胸中深くしまっておりあります。

私も齢を重ねるごとに、少しずつその意味をかみしめる事が出来るのではないかと思っています。その時に、天上の冥土から「な！そうだろう」「やっとな分かったか？」と声をかけられる様な気がするのです。本当に色々と有難うございました。

—合掌



追悼文

びっぴの人生

昭和五十年秋、夕日がまさに沈もうとする静まりかえった夕暮れ時、私と今は亡き父、そして義理の兄（理事長）は高岡のみかん山のふもとに立っていました。周辺は田んぼが広がる淋しいところで、薄暗い電灯があぜ道を照らしているだけでした。

兄が父に向かって「お父さん、この山のふもとに、老人の癒される施設を作りますよ！都会に出て行く子ども達が多い中、田舎に取り残されるのは老人だけ。親は都会の生活にはついていけませんよ！自然の香りのする住み慣れたところで老後を過ごすのが最高ですね！」

二人の会話を聞きながら、何にもない、とつても淋しい所にどうしてかな？と思っただけです。当時、兄はよく色々な本を読みあさっていたので、また夢の様な話だな〜と思っていたのです。

昭和から平成へと時代の変遷と共に時が過ぎ…私

はあの数十年前の夢物語の話が現実となつて、今となつては想像以上の施設ができ、施設の前を通るたびに、今でも亡き父と亡き兄の姿が走馬燈の様に蘇るのを覚えるのです。

何事も夢は叶うんだな〜、夢いっぱい追いかけて実現させて、走り去った兄はいろんな建物と多くの職員や患者さん達に囲まれて満足し、幸せな人生だったなと思うのです。

平成二十一年亡くなる直前まで、屋久島に行き、山や海からたくさんの【氣】を頂いて、建物だけでなく、自然の恵みを心にいっぱい享け、周りの人に感謝の言葉をかけたと聞いています。

薫兄も忙しい姉に代わって、橋口さんと共によき話し相手になり、兄の最後の屋久島への旅にも付き合ひ、自分の親の様にやさしい心を持って手厚い介護をし、兄弟としてとても感謝しています。

元『光辰』女将 閨野 恵美子

追悼文

お父さん

お父さんが亡くなって早や二年が過ぎました。ずつとずつと会いたがっていた、三歳の頃に死に別れたお母さんと、やっと一緒にいれますね。

父は厳しい経営者であり、医者であり強烈な個性の持ち主だった。

思えば父と私はあまり言葉を交わすことは少なかった。

父は家庭でも我がままで、私が物心ついたところからの記憶では、台所の水道の蛇口をひねったのを見たことがない。目の前にあるものもとらず、横で電話がなっているもとらない。いつも「おい！」といって周りを使う。

母は私に、「お父さんは親がないから、しつけがなっていないから治らない。あんた達が変わりなさい」と言った。

四十九日法要が終わって、屋久島へ散骨に行き、青い海と天と地に散骨したとの事でした。兄はいつまでも辰元グループを見守り続けている事と思いません。

ここまで、兄が自分の思うままに夢を追いかけたのも、内助の功があればこそ、篤姫の「女の道は一本道でございます」この言葉どおりに投げ出すことなく、ひつとべの人生の兄に付き合った姉の見事な手綱捌きには敬服するばかりで妹として誇りに思うことです。姉夫婦からはたくさんの事を学ばせてもらいました。

朝には「希望」昼には「努力」夜には「感謝」の気持ち忘れず、も姉夫婦からもらった教えであります。

合掌



小松 裕子

兄は要領が良かったからあまり怒られることもなかった。諦めがいいのは母譲り？残念ながら私の気性は父親譲り、私の強い同志なので反発する。大人になってからも父の事業の中で働いたが、二度三度クビにされ、勘当されている。こっちが悪くなくても父には逆らえない。理不尽である。

数年前から私は料理屋の『光辰』の仕事をしているが、父は毎日、夕方四時頃に店にやってきた。なにをするわけでもないが、とにかく毎日同じ時間にやってきて、五分位カウンターに座ってスタッフに一言二言声をかけてお茶を一杯飲む。意味がないけど、わざわざ何しに来るんだろう？邪魔だなあと思う。

最初は駐車場から徒歩一分くらいだから、スタスタ歩いてきていたが、だんだん足腰が弱くなって歩

くのもやっと、途中ベンチで休み休み、それでも毎日やってきた。

そのうちだんだん歩けなくなって、店の前に車を止め、スタッフに担がれ支えられやっと店に入る。最後のほうでは何も話せず、お茶も飲まなくなってお地藏さんのようにカウンターに座っていた。

昔は大きくたくましく思えた父の背中、小さく丸くなり手足も細くなった。我がままで暴君だと思っていた父は、すっかり弱々しく力を無くしていた。それでも物言わぬ父の背中はいろんなことを語ってくれたように思う。

不器用で照れ屋な父は娘とはあまり話さなかったが、その生き様で示してくれた。父は仕事をしている私を静かに見守り心配して応援していたのだ。仕事をしている、人には言えない悩みや葛藤がたくさんある。

父は自分の事業をただ箱をつくるだけじゃなく、そこが活きた場所であることを望んでいた。だから自分の足で最後の最後まで、うまく回っているか確かめた。私は経営者としての父を誇りに思う。

今年二月、私は「孝図」という男の子を出産した。亡くなった父にどことなく似ている。

父は男の孫が生まれたら自宅の庭に鯉のぼりをたてると言っていたので、母が孝図のためにたててくれた。

私は孫の顔を見ることができなかつたし親不孝だなど思うが、父が亡くなって孫が二人生まれて賑やかになり、こうやって命が紡がれていくのが自然の摂理なのだなあと思う。

鯉のぼりが空になびくのを見て、父が晩年好きだった『千の風になって』という曲の歌詞を思い出した。

「千の風になって

あの大きな空をふきわたっています」

亡くなった後もきつと魂は残るはず。

風になっていつまでもみんなを見守ってください。

人生は謎だ。その時不幸だと思っても、結果オライのことはたくさんある。父は生前、スタッフに無理難題を押し付けて決して楽をさせなかった。それについてきた周りは大変だったと思う。

しかしハードな状況にこそ真実がある。今まで回りに無理難題を押し付けて決して楽をさせなかった。結果、父の周りに本当に素晴らしい人たちがいる。諦めにかげられたというか、修行させられたというか、とにかく素晴らしいスタッフが育っている。

母にいたっては悟りの境地である。

私は最期まで父の老後の面倒を見ることがなかった。周りがみんなで見ってくれたように思う。父は医療介護の仕事に生涯を捧げたといっても過言ではないと思うが、気付けば父は幸せな老後を送れた。生涯現役で引退することなく、長年の顔なじみのスタッフに囲まれ、亡くなる寸前までお供を連れて旅行に行き、最期の最期まで我がままだった。

父は周りの皆様のおかげでも幸せな人生を送れた。本当に本当にみなさんに感謝である。



政治家・地域の方々より

- 渡邊 綱纜 氏
- 米沢 隆 氏
- 津村 重光 氏
- 川村 秀三郎 氏
- 松下 新平 氏
- 権藤 梅義 氏
- 宮永 征昭 氏
- 岩見 進一 氏
- 松浦 純子 氏



もみじが丘と辰元忠先生

宮崎県芸術文化協会会長

渡邊 綱纜

私は、「もみじが丘」という小さな団地に住んでいる。市街からまっすぐに宮崎大橋を渡って、最初の大きな四つ角を右に折れ、バス路線に従って進み、権現昔ごんげんじまというバス停に着くと、その上の小高い丘一帯が、すなわちもみじが丘である。三十戸あまりの可愛い団地である。

バス停の前に、名越内科なごしという病院がある。この病院が、そもそも辰元忠先生の病院の発祥の地である。

私が、この団地の一番上の眺めのよい場所が気に入って、ナショナル住宅「方形の家」の第一号を建築したのが、ちょうど四十年前である。わずか十八坪あまりの小さな家だった。

それからしばらくして、団地入口の角地に、当時としては大きな二階建ての家が建ち始めた。誰の家だろうと表示を見たら、建築主辰元忠と書いてある。

止めて、しばらくおとなしくしていたら、少し元気になったので、入院しなかった。

数日後、バス停に立っていたところを先生に見つかって、どうした。ボクの言うことを聞かないと、死んでしまうぞと、厳しく怒られた。

結局、それから二度もアルコールが原因の急性肝炎で入院（名越内科）する破目になったが、あの時、もし先生に怒られなかったら、そのまま無茶を続けて、私はもうこの世にいなかったらと思う。本当に先生は私の命の恩人だった。

もみじが丘は、仲よし団地で有名である。何かあるとよく集まっては、楽しい飲み方をする。春の花見、秋の月見、それだけではない。時々バスを貸切って、綾の酒泉の杜に鮎食へに出かける。

正月の恵美須講は、もう三十年も続いていて、宮崎観光ホテルの料亭山吹に夫婦同伴で出かけて、飲んだり、歌ったり、踊ったりしている。

そんな時、どんなに多忙でも、遅くなっても、いつもニコニコと駆けつけて下さったのが辰元先生だった。

私の家を五年前に建て替えた時にも、美味しいワ

ああ、院長先生の自宅なんだと、すぐ分かった。病院が目の前にあって、しかも、その院長先生が近所に住む：こんなうれしいことはない。団地の人達は大喜びだった。

小学六年の男の子を頭に、私には三人の子供がいるが、風邪を引いた、お腹をこわした、といったは、すぐ辰元病院に飛び込んだ。お蔭で、子供達は元気ですくすくと育った。

子供だけではない。私も妻も、老母もずいぶんとお世話になった。

ある時、毎晩毎晩、宴会が続いて、体がフラフラするので先生に診てもらったら、すぐ血液検査をされた。翌日行ったら、肝臓がイカれている。入院して点滴をしないとタイヘンなことになると言われた。

びっくりしたが、会社が忙しかったので、酒を即

インを持って、若先生といっしょにわざわざ来て下さった。近所の人達と遅くまで語り明かしたが、あんなに元気だった忠先生が、もういらっしやらないと思うと、たまらなくさびしい。

でも、その代わりに、若先生とその家族の皆さんが、今もずっともみじが丘に住んで、集まりには必ず来て、何かと細かい心使いをしていただく。明るい一家で、みな喜んでいる。

もみじが丘も、だんだんと若い世代に様変わりをしているが、近所づきあいを大切にされた忠先生の仲よし精神は、これからも団地の心として引き継がれて行くだろう。

辰元忠先生、本当にありがとうございます。どうぞ、もみじが丘をいつまでも見守って下さい。心から御冥福をお祈り致します。

辰元忠先生の思い出

元衆議院議員 米沢 隆

辰元忠先生と知遇を得ることになったご縁は、宮崎ラ・サール高校同窓会である。

小生が宮崎に移り住んだのは、昭和三十九年四月に旭化成工業(株)に入社してからである。先生の宮崎入りは早く、宮崎市大塚町に医院を開業されていたので、同窓会ではすでに重鎮的存在であった。我々にとってはいわば兄貴分的存在でもあった。(先生はラ・サール三期生、小生は七期生)従って何かある度に毎に何かと相談に乗っていたのだ。

小生が宮崎県議会議員(延岡)から国会議員に転身する際も、高岡の病院に先生を訪ねて助言を求めたものである。

「国会議員になるなら、いや、なつてからでも一生懸命勉強して下さい。当選しさえすればいいという議員にはなつて欲しくない。それに『あれは俺がした』『これも俺が予算を持って来てやつた』などという有

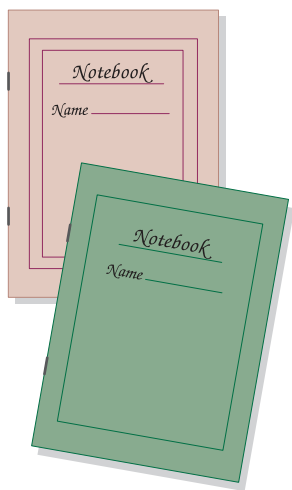
権者を騙すような利益誘導型の田舎代議士にはなつて欲しくない。そうでなければ及ばずながら応援します」との言葉が私の背中を押しした。お蔭でその時の選挙は見事当選の栄をいただいた。

其の後も国会が終わる度毎にご挨拶に伺つたが、興に乗れば何時間でも相手になつていただいた。専門の福祉医療論にはじまり、国、地方自治体の経営論、行政改革、財政論。外国の例を引きながら数字を交えての高齢化社会政策への立論は見事と言つていいほど迫力があった。博識、合理主義者、鋭い経営者の感覚、曖昧さを許さぬ批判眼を持つたお医者さんというより経済人という印象が強い先輩だった。

生前、最後にお目にかかったのは今年(平成二十一年)の衆院選で見事当選された川村秀三郎氏の激励会に先生の奥様と車椅子で出席されていたお姿であった。

六月、先生のご逝去の報を江南病院の病床で人づてに聞いた。お葬式に行くにも行けず、お見送り出来なかつたことが返す返すも心残りで、いまだに私の心中に澱おぼのように重く溜たまっている。

先生、申し訳ありません。生前のお姿を偲びつつ生前のご厚情に感謝し、改めてご冥福をお祈りさせていただきます。合掌



辰元先輩のご逝去を悼みます

前・宮崎市長 津村 重光

辰元先輩の急逝には本当に驚きました。病院にお見舞いに伺った際も、重大な事態を予感させる病状には見えませんでした。それに、まだ七十四歳ですから、十分に回復されるものと考えておりましたので、信じがたい事でした。まことに残念です。

先輩とは高校の同窓会の際も、和氣藹々の楽しい会話で弾み、ひょうひょうとした語り口に、先輩のやさしく飾らない人柄がにじみ出ていました。ご逝去後、奥様にお聞きしましたら、先輩はご自分の病状にクヨクヨされたりすることなく、泰然としておられたそうです。従容として事態を受け止めておられたのは、確固とした死生観をお持ちだったからでしょうが、私にはとても真似の出来ないことです。改めて、先輩の氣宇の大きさに敬服した次第です。

それから、高岡町の合併問題では、ご自身はもとより、病院を挙げて献身的な取り組みを頂きました。

高岡の将来を真剣に考えてのご判断で、自ら賛成のチラシを作成、印刷し、配布されました。また、多くの町会議員さんにも働きかけを熱心にされました。高岡町内では合併の是非をめぐる議論が沸騰して当時の町長さんのリコールまでに発展し、合併期限ぎりぎりの平成十七年三月三十日に、宮崎県知事に対し、「宮崎市と高岡町の合併の認可申請」を出すことが出来ました。

市長である私自身は、前述の町内の状況から高岡町との合併は半ばあきらめていましたので、思わぬ結果に驚き、喜んだところでした。先輩の氣迫と粘りがなかったら、あの合併話は夢物語に終わっていたのではないかと、と今も考えることがあります。

ひょうひょうとした先輩のどこに、あのように敢然と立ち上がり行動される情熱が潜んでいたのかと不思議に思います。しかし、考えてみると、先輩に

はやはり薩摩の氣骨が脈々と流れておられたということでしょう。そう言えば、先輩から頂いたご本のタイトルは『ひつとべ！』だったと思います。「ひつとべ」の意味を調べてみますと、『跳べ』の強調型。古来、薩摩では「泣こかい、跳ほかい？泣こよっかんひつとべ！」というように、困難に当たっては勇猛こそが美德とされてきた」と書いてありました。

そんな勇猛にして心やさしい薩摩男児、辰元さんも今は彼岸の人となりました。でも、あの世から下界の我々に、「どげんしちよるかあ」とニコニコしながら声をかけておられるような気がします。

最後に、敬愛する辰元先輩に心からの感謝を申し上げ、哀悼の意を捧げて筆を置きます。今後は奥様、息子さん、そして職員の皆さんが故辰元忠さんのご遺志を引き継がれ、医療法人高信会と社会福祉法人信愛会が力をあわせ地域に貢献するグループとして、今後も成長発展されるよう期待しています。



ある時のラサール同窓会にて



ラサール同窓会の石峯勝氏による画

追悼文

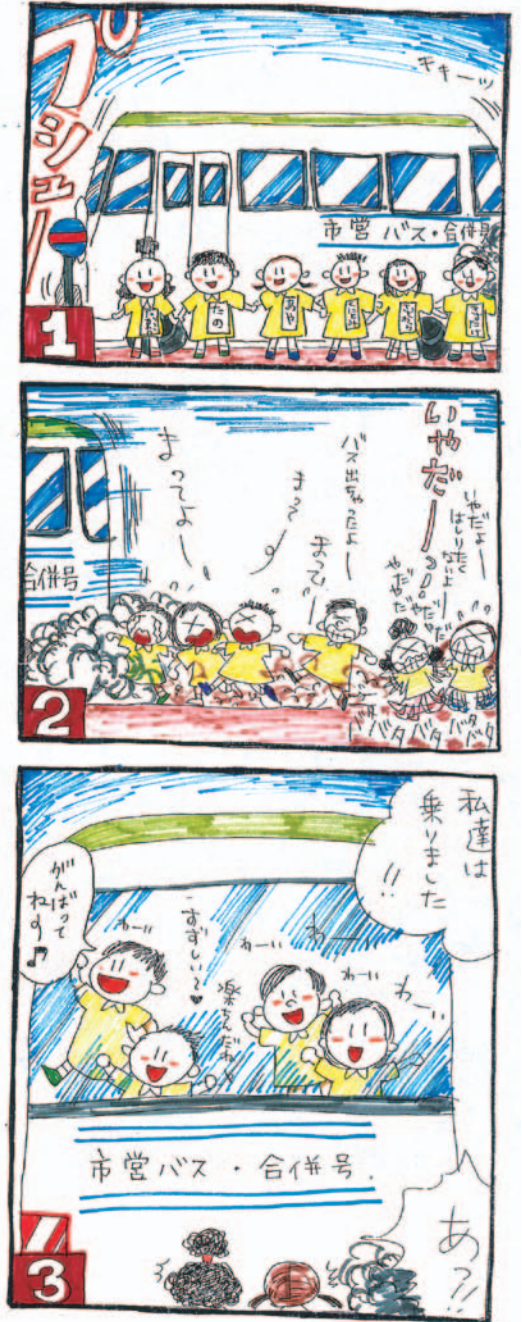
畏敬する辰元先輩

辰元忠先生は鹿児島ラサール高校の十三期上の大先輩です。十三年離れていきますから同じ時期に在学したこともなく、また私は卒業後もつばら東京在住でしたので、最近まで存じ上げませんでした。

最初に辰元先生にお会いしたのは、平成十九年一月の私が宮崎県知事選に出馬した時です。出馬表明から投票まで三週間という慌ただしい選挙で、その時も応援に駆けつけていただいたとの記憶があるだけで、ゆつくりお話しする機会もありませんでした。

ご厚誼をいただいたのは、知事選後、私が宮崎に移り住んで、なんとか宮崎のためにお役に立ちたいと活動を始めてからです。宮崎ラサール会の会合などでお会いするようになりました。

私は宮崎市内出来島にアパートを借りて住んでいますが、十九年の四月か五月だったと思います。このアパートに訪ねてこられて、その年七月の参議



このマンガは、高岡町と宮崎市の合併を熱心に推進していた辰元忠理事長が職員の本部美穂子さんに頼んで描いてもらったもの。筋の展開や細部にまで理事長が案を出した。

衆議院議員 川村 秀三郎

院選挙に出ないかと強く勧められました。応援するから、当選したら八月には一緒に南米旅行に行こうとのことでした。辰元先生は旅行がお好きで海外国内を問わず出かけておられるのをこの時知りました。

この後も「今回がチャンス」「出れば勝つから」と何度も勧められましたし、周りにも相談されているようでした。南米旅行も大変魅力的でしたが、また他からも参院選のお話がなかつたわけではないのですが、私自身知事選後まだ時間も浅く、気持ちの整理もできない状況でしたので、申し訳なかつたのですが、お断りをしました。その時の先生の残念そうなお顔を今も覚えています。しかし「これからも政治家を目指してしっかりがんばりなさい」と励まされていたきました。

堀川町に事務所を借り、衆議院議員を目指して本格的な活動を始めた時も喜んで頂いて何回も事務所

にも来ていただきました。いつも私のことを気にかけていただきましたし、また、私を多くの方に知ってもらおうと、辰元グループの様々なイベントに招待していただきました。裕生園三〇周年のお祝い、夏祭り、運動会、小規模多機能介護施設の『きんかん』の開所式などなど、心から応援していただいたというのを改めて思います。

このように思い出をたどっていると先生が毎日のように通われ、完成を待ち望んでおられた、そして先生自ら命名された『きんかん』の開所式の日も先生の満足げで嬉しそうなお顔が目には浮かびます。先生の最後の事業になってしまいました。もともとと頑張っていたかったです。

辰元先生は、高齢化時代の到来を早くから見据え、高岡の現在の地に病院を構えられ、老人医療、介護、福祉の分野で先駆的に取り組まれてきました。今ですら周りが田んぼですから、最初スタートされたころは、本当に大英断だったことと思います。先見の明と実行力がないと今の辰元グループの姿はないでしょう。政治家になっておられても立派な政治家になっておられたのではないのでしょうか。高岡と宮崎

市の合併にも尽力されたと伺いましたし、「大宮崎市」構想を熱く語っておられました。

先生の思いを私に託していただいたのかもしれない。当選を直接報告し、一緒に喜んでいただきましたのですが、ご存命であつたらと残念でありません。先生と旅行に行くことも叶わなくなりました。

奥様の圭子園長、信さん、裕子さんをはじめ辰元グループの皆さんが、先生のご遺志をついでしっかりと頑張っていただけだと思います。

どうぞ辰元先生、安らかにお見守りください。

合掌

追悼文

故辰元 忠先生追悼文

故辰元先生に、私が最初にお逢い出来ましたのは、私が政治家としてスタートしました平成十一年四月の宮崎県議会議員選挙の約一年前でした。私は、当時、選挙に出馬する決断をし、大志と不安が交錯する中、東京から故郷高岡に戻ったばかりの頃でした。そこで、まず地元高岡の大先輩であられた故辰元先生にご挨拶にお伺いしましたのが最初でした。

その後、故辰元先生が代表を務められた「高岡天ヶ城ライオンズクラブ」に私も入会し直接ご指導いただいたのはじめ、地元の様々な会合で一緒にし、お逢いする度に、若い政治家としての駆け出しの私に対して、いつもいつも温かいご激励をいただいております。

故辰元先生から私が享受させていただきました沢山の中から、特にご著書『ひとつとべ』と、こよなく愛された世界遺産の屋久島について触れさせていた

できます。

私も、早いもので、県議会議員として五年間、参議院議員として五年半、本年で、十一年目の政治活動になりました。この間の私の政治活動の節目、節目には、必ず、故辰元先生から、有難い、的確なご示唆をいただきました。

特に、平成十六年の参議院議員選挙に挑戦する際には、ちょうど出版された自著の『ひとつとべ』を持参くださり、背中を押してくださいました。薩摩出身の故辰元忠先生が、生涯を通じて実践して来られたご経験からのお導きでした。

以来、私が、困難に直面した際には、いつも「泣こかい 飛ぼかい 泣こよか ひっ飛べ（泣こよか、飛ぼよか、泣くぐらいなら飛んでしまえ）」の呪文を唱えています。

故辰元先生が晩年、こよなく愛された屋久島に、

先生の足跡をたどるべく私も昨年、家族で訪問いたしました。屋久島は、人生の大きな転機に不思議と呼ばれるようにして行く、とお聴きしておりました。故辰元先生もそうだったのでしょいか。奥地の樹齢7200年の縄文杉のとてつもない姿を想い起こし、改めて、自然の摂理の不思議さに畏敬の念を抱いています。

台風や落雷や山火事もない森林は、枯れた葉や枝が堆積したまま固まって新しい芽が出てくるのを阻み、結果的に荒廃に向かっているという話を聞いたことがあります。そのような森林を再び活性化させるのは、自然の災害なのだそうです。台風は大木を倒すこともあります。堆積している枯れ葉などを吹き飛ばし、新しい芽が出てくるために重要な役割を果たします。また落雷や山火事によって周りの木々が倒れると、その機会を逃さず、とたんに芽を出す植物もあるそうです。

私たちにとっては多くの被害をもたらす自然の猛威が、森林にとってはプラスに作用する場合があります。ということを知り、なんと自然の摂理というものは、多くの示唆に富んでいることかと感心します。

リーダーが生き方の範を示す、そういうことが当たり前に行われていたのです。しかし、今、自分の生き方をもって範を示すことのできるリーダーがこの国にどれくらいいますでしょうか。

正に、薩摩ご出身の故辰元先生は、幾多の困難を乗り越えられ、このことを実践されて来られました。故辰元先生のお教えに改めて敬意を表し、一期一会に感謝します。後は、我々が研鑽を重ね引き継いで参ります。

ありがとうございました。安らかにお眠りください。合掌

平成二十二年一月

ひるがえって、現在の日本はさしずめ荒廃に向かっている森林のような状態に感じます。地表が硬直し、新しい芽が出ようとしても分厚い堆積物で阻んでいる、そんな森林です。荒廃した森林に自然の摂理が働くことはあっても、日本社会が自然によって救われることも他国が導いてくれることもありませぬ。国を立て直すには、国民自身が目覚め、リーダーは立場を自覚し、具体的な対策を講じて行動を起こすことしか解決の方法はありません。

故辰元先生は、「自分さえよければ」「今さえよければ」このような精神の劣化、荒廃は、国家の衰退、日本の危機と、警鐘を鳴らされて来られました。

元々、日本人は世界で最も規範意識の強い国民でした。しかし、今や規範意識は低くなる一方で、なんでも法律に頼らざるをえない状況になってしまいました。

薩摩の偉人、西郷南州先生は私学校をつくる時、校長の篠原国幹から「校則は？」と尋ねられ、「校則はいけんしもんそかい。校則はおはんがなりやんせ」と答えています。まさにそれが日本人の規範意識だったのです。文章に書かれた法律やルールではなく、



屋久島の紀元杉

辰元先生と私

宮崎県議会議員 権藤 梅義

辰元忠先生と最初にお会いしたのは、大塚町に開院しておられた昭和五十年ごろでした。当時、県議会議員だった米沢隆氏が衆議院選挙に出馬する準備をしていたころ、ラ・サール高校の先輩としてお訪ねし、私は、米沢衆議院議員の地元の秘書ということで何かと行事等では声をかけてもらい、三十有余年かわいがついていたきました。

最初の印象は、度の強い眼鏡の奥から次々と繰り出される面白い発想の話題とそのテンポの速さに、私などは、受け応えに窮する場面もあったことを思い出します。

大塚町の病院は、先生の先見性により逸早く高岡町に移設されることとなり、当初は、医師会等との折り合いにも相当心を砕いておられたようです。その後間もなく自宅も高岡町に移し、定住されることとなりました。思い出しますのは、米沢衆議院議員

の代理として新築のお祝いに招かれ、酔った勢いで米沢先生の持ち唄の『相撲甚句』を歌ったことも思い出します。そして事業も病院だけでなく、高齢者の福祉にも着目され、施設を拡充されて来られました。そんな中、「権藤さん、温泉が出てナア」と言われ、びっくりしたこともありました。

最初お会いした頃は、飲み会の機会も多かったと記憶していますが、その中で先生は、「いつでも気の合った人が会員制で気楽に語れるバーを創りたいね!」と言っておられました。しばらくして気が付くと、『光辰』が誕生していました。有言実行、先生が語られることは夢でなく、計画だったのか、と後で気が付きました。私達凡人は、夢が夢で終わるのが常であります。辰元先生は、判断と行動が俊敏でありました。

辰元先生も鹿児島から宮崎市に移って来られ、高

岡町に拠点を定めて色々な夢を追って活躍されました。失礼ながら私の察するところ、先生は、ゴルフで言えば多少の障害物とリスクは認識しながらも真直ぐボールを出すタイプ（私自身もそうだと思います）かな、と思つて来ました。今日までのご功績の裏には、奥様のフォローや支えが多々あったことだろうと思います。

今、辰元先生も奥様に対して、「永い間ありがとうございます」と感謝しておられる姿が想像できます。本当に辰元先生、奥様、永い間ありがとうございます。本当に今後ともよろしくお願い致します。



辰元忠先生を偲んで

宮崎市議会議員 宮永 征昭

先代理事長辰元先生はまさに、「ひっ飛べ」を地で行くような昭和と平成を駆けた、悔いのない人生を送られたのではないのでしょうか。強烈な個性の中に無邪気な面を合わせ持つ愛すべき先生でありました。三十三年前、高岡に病院を移された時、辰元グループの今の隆盛を予想した人はあまりいなかったと思います。先生の先見性と決断力が、奥様の支えと従業員の努力により結実したものであります。

その先見性は宮崎市との合併においても大きな力でありました。私が、十三年前合併運動を起こしたとき、逸早く賛同され応援して頂いたのが先生ですが、先生と辰元グループの支援が無ければ、今でも東諸県郡高岡町であったと思います。この紙面を借りて、改めて深く感謝申し上げます。

先生との思い出は数多くありますが、霧島の別荘で、ナナちゃんを連れて一緒に散歩した時の先生の

姿が今でも目に浮かびます。天国にひっ飛んで行かれた先生、今でも「我が道を」？

辰元先生の心

元高岡町議会議員 岩見 進一

それは、先生の最後のお見送りを終えた時のことでした。友人のM君が声を掛けて来て次の様な話をしてくれました。「君が、もう少し先生の身近にいて、先生の心により深く触れる事が出来ていたら、君の人生は大きく変わっていたと思うよ」わたしは、その時、先生との会話を思い出しました。「きみは、政治家の道を歩くのか？それとも事業家の道を歩くのか？」私は、即座に答えました。「政治の道を進みたい」その後、先生と十分に相談する事もなく、その折の答えにはそぐわない中途半端な生き方を続ける中で、十分な検討をしないまま事業の規模拡大を行い、経済環境の変化などもあり結局失敗に終わりました。このことは、取りも直さず政治の道の足場をも失うこととなりました。M君によると、先生は常に私のことを心配して彼に話をされていたとの事です。

確かに先生の個性の強さに圧倒されて、一時期、

私の方で先生との距離を置いたことがありました。今にして思えば、あの時こそ先生により近づいて、その奥にある心を見取らなければならぬのだと残念でなりません。人生をより有意義に、そして価値あるものにするには、自分の努力は勿論の事ですが、素晴らしい心の持ち主の力をお借りすることも大事です。

この貴重な体験を大事にしつつ頑張って生きたいと思っています。

先生の心、そして先生との出会いは一生私の心に生き続けて行きます。

『きんかん』を地域にプレゼント

地域住民代表

松浦 純子

故理事長との出会いは平成十九年の秋でした。ボランティア活動をして、施設等が必要としている人が近くにいると話を聞いて、私を尋ねてみえました。私が描く福祉像を理事長は真剣に目を輝かせ、耳を傾けられました。

ボランティア「癒し」（花）の活動で、様々な施設が必要で、常に身近に感じ話題にしている事をよく伝えました。同時に理事長が各地に注ぐ福祉への情熱を知る事ができました。

『きんかん』設立までの日々を振り返りますと、いつの日も池の高台で、寒い冬、暑い夏、真つ黒に日焼けされ健康な姿で、毎日瞑想にふけっていらつしゃる状況が思い浮かびます。

理事長は、高齢者が人とのつながりを持ち住み慣れた場所で地域の人と寄り添い安心して生活が出来る場所として、『きんかん』を、十本の桜の咲く高台に、

平成二十一年三月吉日に生目地域にプレゼントして下さいました。私達地域住民として老後が安心して過せる施設が出来た事を感謝しています。

天国で各地域に、『セレクトきんかん』をプレゼントトに、走り廻っていらつしゃる事でしょう。

感謝しきれません。本当にありがとうございました。



平成21年3月、桜の季節にオープンした『きんかん』

関係業者の方々より

対談

- 瀬口 賢策 氏
- 鎌田 国吉 氏

- 川野 重利 氏
- 松浦 保 氏
- 森元 直正 氏
- 上川路 長生 氏
- 日高 和良 氏
- 野中 勉 氏
- 内山 吉二 氏
- 赤澤 文義 氏
- 上林 サダ子 氏



『信長のような人』

■ 瀬口 賢策（有セグチメデイカル代表）
 ■ 鎌田 国吉（つねむら代表）

（司会 裕生園副園長 川越 淳）

司会 今日裕生園にセグチメデイカルの瀬口さんと、つねむらの鎌田さんにおいでいただいたいます。お二人とも亡くなった辰元理事長とは長い付き合いがあり、理事長の思い出を、いい思い出もそうでない思い出も、今日はざっくりばらにお話ししていただきたいと思います。

瀬口 あの人がどういう人だったかなあ、と考えてみると、確かに先見の明のある方だった。どっちかと言うと実業家タイプ。

鎌田 自分でも、医者であるよりも実業家という方が好き、と言っていた。

最初、宮崎市内の桜ヶ丘で三十年以上前に会った時、高岡に特養を作るということで地元業者

としてあいさつに行った。最初、奥様の圭子さんが出て来て、あとから理事長が出て来た。第一印象は、ドクターだと思った。白衣ではなく、吊りバンドをして、眼鏡をしていて、一目見て、「医者だ」と思った。

瀬口 私の方は、大塚で開業された時に自動現像機を購入していただいたのだが、その時は初対面だったから優しかった。初対面の人にはものすごく優しい。そして、慣れて来てお互いわかって来たら激しくなる。

鎌田 ぼくは、怒られたのは三十年のうちで二回しかない。その代わり、強烈だった。

一回目は、あれは勘違いだと思うが、理事長

が「あいつは俺を遠ざけている」と言い出した。家内と二人で、そんな事はない、と大塚の自宅に言いに行った。夜中の2時まで話をした。まだゴルフを一緒に始める前のこと。でももうその頃はどんな人かわかっていたから、「すみません、すみません」と謝った。帰ったのが、朝の3時頃だった。

二回目に怒られたのは『光辰』で。辰元に入する業者で集まる高心会の席だった。あの時は面と向かって「お前は帰れ！」と言われた。あれは意味がわからなかった。何か気に障ったんでしょね。でも三十分ぐらいしたらおさまった。この二回。

瀬口 私の一番の大騒動はO氏問題。先生は下からおだてられたらその気になられる。先生が私に「瀬口君、O君オという人が来るけどどう思うか」と聞かれたので、あんまり色よい返事をしなかった。そしたらそれを先生がO氏に「瀬口君が君のことを悪く言った」と言ったものだから、O氏が腹を立てた。それからO氏による私への攻撃が始まった。あの時は、ある事ない事、本当

に悔しかった。大騒動になったが、最後は先生が、「瀬口君、ぼくが人を見る目がなくて、君に迷惑をかけた」と言って私に謝った。その時は、何ヶ月も思いが積もっていたので、先生の前だったのが、一気に涙が出た。

鎌田 あの人は、言葉は悪いけど、だまされ易いと思う。信じ込んだら徹底的。一瞬のうちに変わる。逆もある。

司会 それは、人間だけじゃなくて、物に対してもそうでしたね。泥鰌どじょうがいいとなれば泥鰌ばかり、ラーメンがいいとなればラーメンばかり、アラレがいいとなるとアラレばかり。飽きるまで。

瀬口 自分の頭の中で数字を決めたら、それよりも多くても少なくてもいけない。うどんを食べに行こうとなっても、素うどんにおにぎり一個と決まったら、他のものを食べてはいけない。おにぎりあと一個ぐらい食べたい、と思っても言えない。5人と決めたら5人。

司会 数字に対して、何か、自分の言った数字にとられるような所がありましたね。

瀬口 もう一回怒られたのは、ちょうど高岡の町長



「辰元先生が高岡にゴルフを広めたと言っている」（鎌田）

選挙の最中、私が「高岡にはYさんぐらいしか、なかなかこれと言う人はおらんとでしよう？」と言ったら、先生が腹を立てた。最初は何で腹を立てられたのかわからなかった。そして、「俺がいるじゃないか。俺を忘れて、何という事を言うか！」ということだった。

司会 本人を目の前にしての話だから、当然、辰元先生以外のことを話しているわけですよ。

鎌田 本人からすれば、自分も高岡町民だから、その中に入っているのに……と言いたかったんだと思いますね。うかうかやると大変。

瀬田 一言一言考えて話さないといけない。

もう一回怒られたことがある。霧島の別荘の件。先生に招かれて、私と業者仲間二人の計三人で別荘に向かったが、少し遅れた。その間、先生が一人で待っていた。階段を上がって行ったら、「おそーい！」と言ってカミナリが落ちた。鎌田 忘年会などのイベントの時、僕なんかはビールを納めていた。例えば6時半から開始となれば、せいぜい十分前ぐらいにビールをバースト出す。ところが確か最初の忘年会のとき、6時

と云うのが普通なのに。

鎌田 でも、この人は辰元先生に怒られて初めて自覚したと思うよ。もともとルーズな人で、他の人が何と言っても聞かない人だったから。

ゴルフで失敗した人はたくさんいる。ある葉屋さんは、短いパットが入らなかつた時、クラブでグリーンを芝をたたいた。それをキャディーが見てフロンに報告した。するとしばらくして、場内放送で「辰元先生、いらっしやっからフロントまで来て下さい」と呼び出しがあった。「キャディーが今、グリーンを補修をしている。お客さんがグリーンに傷をつけた。3日間、グリーンが使えない」と言われた。あくる日、

半開始なのに、先生が3時か4時頃下見に来た。そしたらビールが出てなかつた。それでスタッフは怒られた。そんなに早く出したらぬくなるじゃないですか。でも先生はグラスもビールも出して完璧に出来てないと機嫌が悪かつた。それで翌年から一旦ぬるいビールをテーブルに上げておいて、先生の下見が終わってから冷やそう、ということになりかけたが、それも出来ず、だから今だに1時間ぐらい前からビールを並べている。

ゴルフも、やっぱり時間厳守。これで失敗した人はたくさんいる。僕は自営業だし、家が近いから時間に遅れるということはなかつたが、他の人達は仕事を済ましたりして来る。すると5分くらい遅れる。もう大変な怒りようだった。逆に、自分が遅れる場合があると、「ヤーヤー、ごめんごめん」と手を上げてやって来る。瀬田 ある時、ゴルフの人数が足りなくて、わざわざ町内のある業者仲間を誘ったが、その人が少し遅れた。すると先生がその人に対してものすごく怒った。「ごめんね、忙しいのに来てくれて」

その葉屋さんはクビになった。

瀬田 その葉屋は、先生に連れられて来ていた。先生がゴルフコースの会員だから、先生の責任になる。

とにかく、先生は最初は優しい。私が事業で独立した時、一緒に行った鹿児島旅行ではホテル代やら何やら全部先生が持ってくれた。お祝いという事で。

鎌田 そういう所はあった。

ゴルフでは、スタートしたら絶対うしろを振り返らなかつた。前ばかり見ている。後ろの人が何をしているかわからない。自分が先に打つて前に行く。次の人が打とうとして、「先生！後ろから球が来ますよー」と言っても、「うーん？」と言って、顔を半分だけ後ろに向けて、上半身を少しずらすだけ。一回、球が先生の首すじを通って行ったことがある。

瀬田 先生のゴルフは、スコアよりも1ラウンドをどれくらいかタイムで回ったかの方が大事だった。早く回った、というのが誇りだった。十八ホールを一時間四十分で上がった事があった。「早う

打て！ 早う打て！」と他の人に言う。

鎌田 ゴルフのラウンドの中で、例えば「谷越え」がある。ピンに行くのに、前に谷がある。「自分はこの距離だと何番で打つても無理やな」と判断したら、横の山手の方に打つ。

瀬口 しかも、自分は谷越えを狙ってるけれども、たまたま横に行った、というふうなふりをする。「しもた！」と言うけど、最初からそつちを狙っている。

鎌田 プライドもあったらだろうけど、自分なりに自分の限度を認めている所は認めていた。私から見ても多分届くだろうという距離でも、無理はしなかった。普通は、落ちてでもいいから谷越えを狙う。そうせずに確実な方法を取るといふのは、プライドもあるわけだから大変な勇気が要ると思いますよ。そして終わってみると、最終スコアはまあまあいいわけです。

司会 理事長の『ひとつとべ』の中に、ゴルフではないが、経営のことでそんな文章がありますね。自分は「手堅い」と。派手な事はしない。シンプルで、見栄を張らずに、コツコツやるタイプだ、



©HONBU

瀬口 豪快な反面、奥さんもない、誰もいない、一人の時はものすごく寂しがる。

鎌田 だから、家に来られたら帰るまでが長いですわ。司会 お二人は、辰元以外にもいろんな所、大きな所やら小さな所とお付き合いがあると思いますけど、その方達と比べてみてどうでしたか？

瀬口 先生は、会うとパーっと受け入れてしまう。他はそんなことはない。ある程度、距離を取る。先生は、会うと抱き込んでしまって、身内状態になる。そこが違う。

鎌田 たぎり易くて冷め易い。たぎるのも早いけど、冷めるのも早い。だから安心していたら大変。「僕

と。一見、豪快な感じがしますけどね。

鎌田 世間のことは詳しくなかった。ゴルフのハウスのランチタイムの時、雑談の中で、フェニックスのことも何でも先のことを読んで、それが本当に現実になる。そんなことは数え切れないくらいある。宮崎市と高岡の合併の件も、その実現よりも何年も前に予言した。

瀬口 合併の時は、合併推進の運動を先生はすごく頑張った。

鎌田 有言実行ですよ。言い出したらとことんまでやる。結局それが実現するわけだから偉いですよ。

瀬口 性格的にはものすごく寂しがりや。私が例えばゴルフをしていると、ケイタイに電話がかかって来る。「ちよつと出て来んね。寂しくてたまらん」司会 そういう風に自分で言われるんですか？「寂しくてたまらん」と。

瀬口 そう。「今、どこな？」「家です」と答えると「家に行く」と言う。

司会 そこが不思議なところですね。豪快な感じがするんですけど。

は、先生はクビにすることは「なんて思っていたら、その日のうちにクビになる。義理とか人情とかじゃない。悪ければ、誰だろうとその場で切腹。」

司会 本当に信長みたいですね。

鎌田 それがわからない人が何人もいた。納入業者の中にも。たった一言が先生にカチンと来て、その場でパーになる。

瀬口 何十年の付き合いも、二、三年の付き合いも、落ち度があったらダメ。何十年の歴史も関係ない。慢心はいけない。

司会 お二人は、そうすると、「生き残り」ですね。



©HONBU

瀬口 私は四十年ぐらい。あんまり深入りしなかつたから良かったんだろう。

鎌田 納入業者でクビを切られた人には共通点がある。「僕に意見をされた」という感じを先生に受けられたらダメ。先生が話している事に対して「だけどですね、先生……」とやったらダメ。

司会 それが正論であつてもですか？

瀬口 正論とか、そんなものは通らない。

鎌田 自分は正しいとか、間違つてないとか思つていても、グッとこらえないといけない。それを出してしまうと終わり。身内の人にも容赦はなかつた。

ゴルフの話に戻ると、あの頃は高岡でゴルフをする人はほとんどいなくて、辰元先生が高岡にゴルフを広めたと言つていい。あれから女の人までゴルフをする人が出て来た。週に4回、一緒にゴルフをした。そのうち2回は、夜、ニスタチへ行った。

先生は雷に弱かつた。ある時、ゴルフのコースに出て、ひどい落雷にあい、小さな小屋に避難したが、その回りの木が落雷で何本も倒れ

もしたら辞めていただろう。

司会 複合施設や、グループでやっている所は少なくないが、これほど施設同士の職員がツアーの関心のグループは少ないのでは、と思います。やはり、ああいう理事長がトップにいたから施設間の職員の関係が密になつたのでしょうかね。

瀬口 先生は、人を集めるのが好きだつた。だから自分達もいろんな人脈が出来た。

鎌田 自分も本当なら医療機器の業者とかには何のかかわりもないのだけど、先生のおかげでいろんな人と知り合えた。その分、先生が亡くなつたあとは、そういう付き合いがなくなつた。

瀬口 先生が亡くなつた時、お通夜であれだけの人が集まつたのは他に見たことがない。八〇〇人ぐらいでしたか？

司会 いや、一〇〇〇人は来たと思います。

鎌田 自分の息子がセブンイレブンの店をしているが、鈴木会長から手紙の返事が来たのは辰元先生ぐらいだろう、と言つていた。辰元ブランドのレーズンパンを出そう、というアイデアを先生が思いつき、セブンイレブンの鈴木会長に手紙を出

るようなひどい天候だつた。ゴルフのクラブが一本、芝生の上に置き忘れてあつて、それを先生が取つて来るか、キャディーが取つて来るか、でもめた。結局、キャディーがおそろのおそろ取つて来て小屋に入れた。

だけど先生は地震には強かつた。一回、僕がショットしようとしたら、クラクラ来て、これは脳出血かな、と一瞬思つたら地震で、後で聞いたら震度4ということがあつたが、先生は平気だつた。

瀬口 先生がまだ大塚で開業医をしていた頃、奥さんが美人ということで関係者の間で有名だつた。理事長があれだけやつて来たのは、園長がいたから。困つたのは、何か集まりがあつて、先生の車で帰る時、先生と園長が前の席にいて、自分は後ろの席に座つていて、前の二人の間で口論が始まる。先生が時々自分に同意を求めてくる。どちらに味方したらいいのか、それに困つた。

秘書課長の橋口さんにも頭が下がる。先生に長年、身近で仕えていたのだから。普通の人はとても長くはつとまらない。自分だつたら三日

したらしい。実現には至らなかつたけれども。

司会 理事長は悔いのない人生だつたでしょうね。回りは振り回されたけれど。好きなことを言い、好きなことをして、寝込むことなく亡くなつたのだから。

瀬口 あんなに強烈な人はなかなか出ない。亡くなつて、やはり寂しい。病院に仕事で来て、ちよつと先生に会つて行こう、ということがなくなつた。職員さん達を見ると、先生が亡くなられて、伸び伸びしているようにも見えるが、大きな穴が開いたような感じでしょう。

瀬口・鎌田 一つ夢があるとすれば、あの世に行つたらもう一度理事長と高原カントリークラブでゴルフがしたいですね。

辰元先生との出会い

(有)高岡プロパン商会会長 川野 重利

私は、LPGガスを経営しております川野です。三十三年前、市内のガス業社から辰元先生が高岡に病院を作ることを聞き、すぐ先生の自宅を探したのですが、先生に会うことができず諦めていた時、今の裕生園の工事が始まりました。早速重油とガスの見積を持って行っただけ、重油はリットルに一円高い、ガスは見積書を見ることなく無駄と言われ、どうも納得がいかず聞いてみると、当時の事務局長の親戚がガスをしていることがわかり納得した次第でした。その後先生が、油入れにスタンドに見えてからが、私と先生とのおつきあいが始まったのです。

先生といろんな事を話していくなか、病院の取引業者と『高心会』を作ろうと私に相談があり、早速みんなに連絡をとりすぐに会が発足しました。年八回、取引業者経営者の誕生日にゴルフをし、夜は

会食で、いつも先生の熱弁に皆な感心することばかり。又気にいらないと、所かまわず大声で怒ることもある先生でした。昭和五十三年高岡クリニックが開設され、ガスは私にと、先生から依頼があり、この時にやっと先生に信用してもらったと私自身も大きな自信につながりました。

高岡天ヶ城ライオンズクラブ

昭和五十六年高岡天ヶ城ライオンズクラブが発足し、先生に入会のお願いをしたところ快く入会していただき、その後、会員が四十六名ほどになりました。ライオンズクラブの奉仕作業、空きカン拾い、カーブミラー磨きを朝早くから頑張っていたきました。平成二年四月、ライオンズクラブ十周年をするというので、私がライオンズクラブの当時の会長で、

先生には実行委員長になっていただき、多分なる寄贈をいただき、天ヶ城公園に十周年記念にと石像を作っていたきました。石像を作るにあたって、先生が鹿児島島の製作者の所に外国の石があると聞き、先生と二人で二回ほど石を見に行った思い出があります。車中いろんな先生の発想と現実のお話を聞かされ感心していました。石像は今でも、天ヶ城に残っています。



高岡天ヶ城ライオンズクラブ 10 周年記念に寄贈された石像（天ヶ城公園内）



高岡天ヶ城ライオンズクラブのキャップをかぶったところ

先生とのプライベートのお付き合い

一週間に一回のゴルフに一緒に行く様になり、ゴルフの思い出は沢山あります。なんとと言っても先生の喜怒哀楽が今でも目に浮びます。おかげ様でゴルフも出来る様になりました。

辰ちゃん会

先生を囲む辰ちゃん会を作ろうと、月に一回『光辰』で会合し和気あいあいの会が、今になって一番の楽しかった思い出となります。

「先生は鹿児島県の生まれだけど還暦を高岡でしませんか」と声をかけてたら、「私も高岡に住んでいるので一緒にします」と、快く返事をいただき、とてもありがたかったです。還暦は皆さんで百三十名程集まり、にぎやかな雰囲気の中、私が皆さんに先生を紹介し、県外から帰省していた友人も、「高岡にもすごい病院を経営する先生がいるんだな」と、びっくりしていました。

私と先生の三十三年間のお付き合いをさせていただいたなかで、先生はいつも経営のことを頭に描いておられ、私共には全く想像もつかないすごい発想を着々と実現されていきました。今では、経営トップの社会福祉法人となっています。ここに至る過程には大変なこともあったでしょうが、何と言っても裕生園の園長、奥様の大きな力があつたからだと先生も思っているでしょう。

現在高齢化が進み又雇用も一番大変な時代。辰元グループには、沢山の高齢者の方が入居されて、又沢山の人が雇用されています。現代の一番大きな問題、「高齢者」と「雇用」、大変な時代にとでもすれば

らしいことです。そうして皆さんが一番助かっていると思います。先生が描いていたことはこういう事だったのか、と今日になってわかりました。実に先生の功績は偉大です。又先生は旅行が好きで一緒に旅行にも行きました。この旅行も思い出の一つです。先生はすべて思っていることを実現されました。又

経営のことは、すばらしい奥様、ご子息、そしてスタッフ：何も心配することなく安心して逝かれたのではないのでしょうか。ほんとうに幸せな人生だったと私自身そう思っています。お世話になりました。

追悼文

思い出

辰元理事長の一周忌に際し、思い出を綴りたく、ペンを執りました。

あれは何年前になるのでしょうか。高岡の飯田地区に、老人ホームが出来るとの話聞き、宮崎の御自宅に友人と訪問したのが、最初の出会いでした。初対面の田舎者の私を、先生と奥様は、何の疑いも無く話を聞いて下さいました。先生の人柄は言うまでも無く、奥様の、先生の後ろからやさしく包み込まれる懐の大きさには、感動しました。

「思い立ったら百年目」と言う言葉がありますが、本当に、鋭い感性と実行力で現在の辰元グループを造り上げられました。先生の思い通り病院も、一年、一年、大きくなりましたが、私が経営する『やまほ』を、ずっと可愛がって下さり、一年一度の忘年会も『やまほ』には無理な人数でも、それはそれは賑やかに行われ、職員の方々の出し物も又、楽しいもので

元『やまほ』経営 松浦 保

した。奥様の、あの素晴らしい歌を聞くのが、これ又私達の楽しみでした。私も、その分、料理には、力を入れたものでした。

ある飲み座の中、「保ちゃん、ゴルフと言うスポーツがある。練習をして、高原カントリーに行こうか」と誘われ、何回か練習をし、まもなくゴルフとやらに行き、散々なスコアで回りました。でも、その時から楽しむようになり、度々誘っていただけ、スコアは悪くても、先生とのゴルフは楽しい思い出の日でした。

又、先生は旅行が好きで、私に、アメリカ自動車の旅、ベトナム旅行、シンガポール等々、誘って下さったのですが、当時は、とても行く事は不可能で、今思えば、良いチャンスだったのにと、つくづく残念でなりません。

ある時、病院から「すぐ来るように」との事。何

か不始末をしたのかと、すぐ飛んでいきました。院長室に入ると、先生はニコニコされていて、胸の中が軽くなるのを覚えました。先生が机の上の設計図を指差し、「これ、次の病棟の図面です」と言われました。先生の頭の中には、次々と未来の夢が浮かんでいたと思います。

人生には三つのチャンスがあると聞きますが、先生にとって病院の建設だったのですね。

一つは医学の道、医者であり

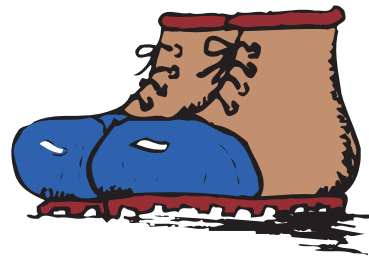
二つは建築設計士であり

三つは一、二を造り上げる事業家である。

又、先生を語ることに於いて、奥様の圭子様を忘れてはならないでしょう。裕生園に始まり、現在の大きい病院、その他いろいろ、いずれにしても、バツクからの奥様の大きな力添えをはじめ、御兄弟の御協力の賜物だと思います。

又立派な後継者も、実社会を堂々と歩いていらっしやいます。実に頼もしい限りです。

天国の先生、今頃、どの国を旅されているのでしょうか。そして、大きな夢を、まだまだ設計されているのでしょうかね。



追悼文

辰元先生に教えられたこと

(有)ドラッグストアーモリモト代表取締役

森元 直正

辰元先生と初めて会ったのは私が高岡に帰りドラッグストアーを始めてから間もない、三十二年ほど前のことと記憶しています。その時の辰元先生の印象はすごくニコニコとしていらっしやる方だなーという感じでした。お会いする前はとても怖い人だという話を聞いていたのですが、そんな感じはしませんでした。先生に会ったとたんに相手を安心させる親しみを感じさせる独特の雰囲気があったように思います。

私にとっては近寄りやすい存在に思っていた辰元先生と身近にお話することができた時には、事業経営者として軽医療にかかわる話を聞くことができたことは私にとって大変価値のあるものとして今も残っています。

皆さんもご存知のとおり明朗快活そして少しも偉ぶったところがない親しみやすいお人柄だと感じま

した。

その後数年過ぎ、父が突然脳梗塞で倒れた時、ご多忙にも拘わらず直ちに駆けつけて頂き、即入院治療と手厚くしていただき、その甲斐あって病状も安定し、その後、特養裕生園に入園させていただくと同時に、裕生園の家族会会長をさせていただくことになり、私にとっては有難い経験だったと今に至っては懐かしく思います。

父の入院入園とのかかわりの中で本当に沢山のことを学びました。辰元先生からの言葉から学んだことを大切にして私自身の仕事の事として努力していきたい、と今も先生の人柄を思い起こすと心が安まる思いがします。

先生は他人にはない素晴らしい才能を持った達人だと今も信じ、また他の人も多くはそう思っていると思います。会った時に何時も感じているのは、日

常に創意工夫され先を見定められている先生だ
な」ということです。

私があることを相談しました。その中で言われた
ことは、才能は勉強で伸びる人もいるし、器用さで
伸びる人、勇気で伸びる人もいる、そして常に前向
きで即実行することだ、と教わりました。私には辰
元先生の百分の一も真似することは出来ませんが、
偉大なる辰元先生に少しでも近づこうと日々努力し
ています。私が思うには勇氣と判断、そして決断力、
これが先生の生き方だったのかな」と思います。

先生は経営感覚という点で素晴らしく実績を残さ
れました。また先生は確かな洞察力を身につけてお
られて、先の見通し十年二十年先の社会を見定めら
れ、先生が心に思い描いておられた様に、いつも自
分の定めた方向へ向かって絶えず前進されて、行動
的で、立派な目標や計画を持って行動を起こされて
いて、チャンスを逃がさない。「さすがにすごいな」
と何時も感じていました。

確か昭和六十年頃だったと思いますが、私がドラッ
グストアーを新築した時に、先生の案と私の思いが
一致しまして、ストアー内に医療無料相談コーナー

また気持ちの優しい先生で、ある時子犬が生まれ、
一匹がどうしても親犬からの初乳が出来ず大変心配
されて、犬用粉ミルクを先生自身が買いにみえられ、
相談を受けた事があります。

辰元先生は人間の病気について献身的に尽くされ
ましたが、動物についてもその思いは一緒だなと感
じました。

先生の偉大さを今さらのように思い浮かべており
ます。

を設置し、一週間に火曜日と金曜日の二日間を相談
日としてスタートすることになりました。コーナ
づくりが出来上がったので、県医薬業務課に来ても
らい許可を得ることになりましたが、県としては前
例がないとのことで話が進まず断念。実現できませ
んでしたが、二十五年前のことで、先生の先の社会
を見定められた事だけに、その案はすごい事で今思
えば大きな思い出として今も心に残っています。

一流人間辰元先生は何かに生きがいを持ってもら
れて、生きがいを見つけられ、やることに一貫性が
あり、意欲をもって無我夢中に仕事に取り組んでお
られ、「何事についても結論を先に」が身についてお
られ、能力的に優れておられました。

今何をすべきかどうか、どうすれば効果的か、と
いったことを追求する姿勢をいつも持っておられ、
そして独創的なアイデアでそれを実行され、他の
人には真似できない意志の強い先生で、それをあく
まで実行される偉大さを感じます。

また地域医療振興、雇用促進に貢献され、地域の
活性化に大変な功績を残されました。地域での活躍
ぶりは相当なもので皆知るところです。



辰元忠先生を偲んで

上川路会計事務所所長・公認会計士 上川路 長生

先生の訃報は一枚のファックスで届きました。あまりに突然で、信じられずにただ紙面を凝視するばかりでした。

それは一ヶ月程前、圭子園長と園長室で事務打合せの最中でした。忠先生がおいでになり、「屋久島にこれから行きます」と目で笑って挨拶してくださいました。これが先生と永遠のお別れになってしまいました。あの時にもっとしっかりとお話をしていたらと悔やまれてなりません。

忠先生とのご縁は、二十年前になります。『光辰』が大淀川の河辺にあったところで、高岡をお訪ねすると必ず『光辰』に誘っていただきました。見事な庭を拝見しながらご馳走してもらい、黙って酒を飲むだけの高校の後輩の私に、熱く事業の夢を語ってくださいました。

年々歳々成長していく辰元グループを間近にみていく姿を拝見することができ職員総数四百名を数える一大成長事業となった経営のコツをもっと教えていただきたいと願っていただけに残念でなりません。

平成十七年六月、先生の『古希の祝い』を兼ねて南米ツアーにご一緒できたことが終生の良き思い出となりました。先生の高校時代からの憧れの南米、特にアルゼンチンへの長年の夢の実現に、子供に帰って大の字に寝転ばれた姿を忘れることができません。「そのうちにもう一度一緒に行こうね」と言われたことを、想起しています。

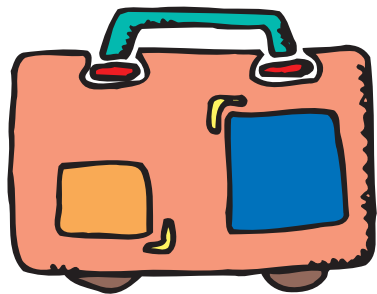
たえず『ひとつとべ』して、そして勝利してきたという忠先生の生き方は、正に薩摩男児の面目躍如たるものがありました。人生を一生懸命に走り抜けていかれました。最近では、宮崎でいう、ゆっくりのんびりの『いっちょやが』ライフへとギアチェンジの途中であっただけに惜しまれます。

家族を愛して、事業を愛して、高岡を愛した忠先生、本当にありがとうございます。

(平成二十一年十二月二十五日 記)

醍醐味は会計士冥利に尽きて格別なものがありました。先生の著『ひとつとべ』にはユーモアたっぷり、熊の魚取りにたとえて、名人の先生とその背後でしっかりと奥様が拾い集める二人三脚ぶりが書いてあります。先生が築いてこられた事業の基盤が宮崎県最大級にまで大きくなったのは、圭子奥様のお陰と素直に正直に述べておられます。後継者の信先生や裕子さんのお名前を、高信会・信愛会・裕生園と法人名・施設名につけてあることも子供さんへの、ほのぼのと温かくやさしいお気持ち伝わってきます。

先生が得意とされた各施設の設計は徹底した合理主義が基本となっています。すべての建物が一寸の狂いもなく超合理的に出来ていて、どの設計士が書いたものよりも確実に安く建てられ目的に合って無駄がないと自信をもって語っておられました。辰元グループが医療・福祉の複合施設として年々充実し



いつも圧倒された辰元先生

九州東邦株 日高 和良

私は、森薬品に入社して三十年になります。県内唯一の県内地場卸^{じばせき}として来れたのですが、今は時代の流れもあり、東邦薬品の子会社となり、社名も九州東邦株となりました。そして今までに一度の経験もない転勤になり、四月より鹿児島に行く予定です。

辰元先生は私が入社以来お付き合いをさせて頂きました。私も若かったのですが辰元先生も大変元気良く、よく価格、商品の納期など直接電話を頂き、よく叱られました。理事長室で三時間ほど殆ど一方的に話しをされ、飲み方の次の日など気分が悪くなりそうでした。先生から目をそらす事も時計を見る事も出来ない程、熱弁されたのを覚えています。それが何度あったか分かりません。

金沢に二人で車で行ったことがあります。夕方突然「金沢に行かないか」と言われ、先生の運転でま

ず宮崎よりカーフェリーに乗り大阪南港に行き、それから高速に乗り直行しました。先生の運転でしたが、あまりにもスピードを出すので、私はいつも足に力が入り冷や汗で行ったのを覚えています。着いたのはいいのですが、金沢で信先生と三人で食事をし、滞在時間はわずか二時間でした。そして又大阪南港でフェリーに乗ろうと、それでまたとばし、行きと同じ状態で帰り、五、六時間かけて南港に着いたのはフェリー出港の五分前でした。その時、すごいっている人生かなと思いました。先生に「もし今日乗り遅れたらどうしたのですか」と尋ねると、「中国道を陸で帰った」と聞き、ゾツとしたのを覚えています。

この私の三十年の先生とのお付き合いさせて頂いた中で、辰元グループ様は常に事業を拡大され、ベッ

ド他医療器を購入して頂き、会社内での売り上げも勉強はさせられました。大変助かりました。私の人生のページに大きく輝いている先生に「さよなら」を言うのが辛いです。安らかに眠りください。

平成二十二年三月二十四日



辰元先生へ

(有)グリーンハウス宮崎代表取締役

野中 勉

お久しぶりでございます。早いもので一周忌を迎えられると聞き一筆申し上げます。

先生との出会いは、思えばもう十年前のある会の懇談会で、銀行の支店長から紹介して頂いたのが最初の出会いでした。色々な話の中でゴルフの話から釣りの話になり、時間が無くなり、後日ゆっくり話をしましょう、とその時はお別れしましたが、びっくりしたのは次の日の夕方、自宅に奥様と一緒に「野中さん、今から食事に行きましょう」と車で来られ、「私は会社から今帰ってきたばかりですが」「いや、そのままでもいいですから奥さんも一緒に行きましょう」「いやまだ何も支度をしてないので」「支度はいいませんか：」とこんな会話をしながら、それではお言葉に甘えて行きます、と早々と車に乗り、着いた所は、私共庶民はあまり行くことのない有名な割烹『光辰』でした。そこで昨日からの話の続き

が始まり「野中さん、活魚が欲しいので、明日から良いので釣ってきてください、買いますから」と先生の話の早いことに私も面喰りました。

お仕事の話になりますと、先生の事業に対するアイデアと決断、そして実行とその経営感覚の素晴らしさに感動致しました。施設の増設時は必ず土地の下見に行き、そこで必ず「野中さんどうですか、良いでしょう、素晴らしいでしょう、名前も決まっています、良いでしょう」先生、私も今から予約をしておきますので宜しくお願い致します、と冗談話をしたものです。先生の事ですから、おそらく今頃は遠い世界で次の事業を考えられ、そして名前も決まっておられるでしょう。野中さんどうですか、良いでしょう、素晴らしいでしょう。しかし、もう先生その様な話を聞くことは出来ません。

本当に悲しゅうございます。先生との思い出はい

つまでもいつまでも忘れることはありません。遺族の方々は勿論、多くの方々を遠い空からいつまでも見守り下さりますようお願い致します。

友人より



©HONBU

辰元忠理事長との出会い

株式会社内山組代表取締役

内山 吉二

当社は、十数年前のバブル崩壊時に経営が悪化し、協力業者さんやお客様からの問い合わせが散発したことがありました。

その時、辰元理事長が先代社長に、「会社が倒産すると従業員や多数の下請の従業員の生活が出来なくなる。それではいけない。病院も人を助ける為、経営をしている。あなたも従業員や下請を助ける為に会社を存続しなければならぬ。お互いに福祉と思い頑張ろう」とアドバイスしていただいたそうです。

その数日後、先代社長は理事長に呼ばれ、病院新築建設を契約していただき、「人を助ける事は、福祉と同じ考え」という理念を教えていただいたそうです。それ以来、当社をご愛顧いただき、施設の建設には理事長の理想の通りに、また思いを込めて、建設設計施工まで携わらせていただきました。

理事長には当社の忘年会等にご多忙の中を、一度

も欠く事なくご出席を賜り、また私の結婚披露宴にもご夫婦で遠路志布志の地までお越しいただきました。そして私共も病院のお祝い事には都度ご案内を頂き、家族同様に可愛がっていただきました。

悲しくも辰元理事長がご逝去され、当社社員一同深い悲しみの中、特に先代社長は兄を亡くしたかのような悲しみを受け、その三ヶ月後、あとを追うように先代社長も亡くなりました。今頃は、天国で二人で設計図を広げ、大いに夢を語っていることと思います。

辰元理事長に多くのご恩を、ご縁を、そして思い出を頂きました。当社が、現在も営業継続させていただけているのは、理事長に助けていただいたお陰です。心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

合掌

大地に絵を描いたフロンティア人

アーバンアメニティ設計(有)代表取締役

赤澤 文義

先生の突然の訃報に大変驚き、深い深い悲しみが込み上げて来たのは私だけででしょうか。恐らく全ての方々がそうではなかったでしょうか。まさか、何故、今なのか？と。言葉を失い絶句状態でした。

先生とは義弟の薫様とのお引合いで、平成九年頃出会いがありました。その後、医療福祉施設建設の設計等で大変お世話になる事になりました。当初、園長先生共々、酒泉の杜レストランで鮎料理をご馳走になったと記憶しております。

先生はその当時、もちろん大変元気で、物腰柔らかく、かなりの理論家であり、「君はどう考えるかね」と意見を求められたりして、回答するのにたじたじ：固まってしまうと、にっこりと笑って得意の持論を展開され、色々お話し下さいました。また先生は多方面に造詣も深く、世界を旅行され、話題に事欠かないくらい含蓄のある話し方で、つつい時間

忘れ話に聞き入ってしまった、感銘を受けました。

又先生は常に旺盛な事業意欲の持ち主でもあり、これ迄多くの医療介護施設建設を手掛けられ成功を収められたその手腕は、まさにポジティブな考え方と独創的な発想に私は強烈な印象を受けました。あの意味、今までこの高岡地区のグランドデザイン、絵を描いて来られた先駆的存在だったのかもしれないね。その一つ一つに愛を注がれて来た観おまいは最高だったと思います。私はそのお手伝いをさせて頂き、大変光栄でありました。

その内には先生の独創的なプラン図の故、私が手を加えて変更して、「この図面を変えたのは赤澤じゃろ」と大目玉を喰い、出入禁止令発動になった事もありました。この紙面を借りて「申し訳ございませんでした」しかし、今こうやって思えば、そんな事が脳裏をかすめ、いつまでも記憶に残る出来事です。

そんな禁止令の時でも、先生は懐^{なつか}広く、寛大な心の持ち主でしたね。私はそのお陰で大いに救われました。有難うございました。

これらのご恩に対し、感謝、感激しつつ辰元忠先生の生前を偲^{しの}び、深く深く感謝申し上げます。

「ありがとうございます」



上空から見た辰元グループ（平成18年8月撮影）

追悼文

忘れられない先生

宮崎千果株式会社営業部長

上林 サダ子

辰元忠先生との出会いは、今から十五年前にさかのぼります。初めてお会いしたのは、その年の暮れの忘年会の時でした。「私が宮崎千果の上林です。お世話になっております」と言いますと、理事長が「ああ、ここ！ ここ！ここに座りなさい」とおっしゃり、その時、私達業者が一番いい席に案内させられ、私は驚くと同時に感動いたしました。

お会いしてからというもの、私も理事長からいろいろと学ばせていただき、私の仕事の方も少しずつではありますが、軌道に乗り始めて行きました。

理事長には、人との出会い、別れ、人から何を言われようと自分自身が決めた事は精一杯やり遂げることを教えていただき、人生重い荷物を背負って坂道を上るがごとく、私の人生の重荷を軽くしていただく方だったと思います。理事長のような人生を送れたらどんなに素晴らしいかと思いました。

残された人生を明るく、その日その日を精一杯、圭子園長先生と、又、園長を囲む皆様と、これからも歩み続けて行きたいと思えます。

本当にありがとうございます。

不思議な話を追加させていただきます。
理事長が亡くなられて一週間か十日後に、私の仕事場である市場に蝶々が一匹舞い込んで来ました。普段は市場には蝶々は一匹もいないのです。小振りの蝶々が朝の四時頃、一匹来て、背の高い従業員の頭やおでこに停まったのです。これが不思議なことに、人間の手で撫でて逃げない。床にちょんちょんと飛んでいきました。日を替えて、二〜三回やって来ました。これは市場でも有名な話になっています。

蝶々の話がもう一つあります。『光辰』での食事のあとに飲みに行つて、夜十一時頃、タクシーに乗る

折々の写真



有料老人マンション「信愛園」落成式にて
(昭和58年、48歳)



松形宮崎県知事の裕生園訪問を
お迎えする理事長と園長
(昭和57年、46歳)



職員旅行で(昭和59年、49歳)



『^{おほこ}昂』『マイウェイ』が^{おほこ}十八番
(平成5年、58歳)



裕生園利用者の運動会で(平成9年、61歳)

うとしたら、私の肩に蝶々が乗っていたのです。私は気が付かなかったのですが、運転手の方が「蝶々は乗せないで下さい」と言ったのです。蝶々は、一旦、私と一緒にタクシーに入って、窓からスーッと出て行きました。「夜の蝶々は珍しい」と運転手が言っていました。蛾ではなく、間違いなく蝶々でした。

川崎先生がお葬式の時のご挨拶で「理事長、蝶々になって帰って来てください」と言われていましたが、私はそれを思い出したのです。

たくさんの出会いの中で、記憶に残る人は少ないです。「世の中にはこんな人もいるんだなあ。業者を大事にしてくれる。だからこれだけ大きな経営をするようになったんだなあ」と思う次第です。本当に素晴らしい方でした。





裕生園創立30周年記念式典で談笑する理事長
(平成19年6月、72歳)



毎年行われる辰元グループ夏祭り。
地域住民との交流の場でもある
(平成19年8月、72歳)



就任間もない
東国原宮崎県知事が
辰元グループを視察。
辰元病院玄関前にて
(平成19年11月、72歳)



生前最後の事業となった
『きんかん』落成式で
あいさつする理事長
(平成21年3月、73歳)



辰元病院の理事長室にて
(平成8年、61歳)



恒例の辰元グループ合同忘年会の開会を
宣言する理事長(平成9年、62歳)



裕生園・ケアハウスシャトル・
グループホームたちばなの合同
運動会であいさつする理事長
(平成13年、65歳)



多目的ホール「ナナホール」での運動会
(平成13年、65歳)



優良民間社会福祉施設に対する天皇陛下からの
御下賜金伝達式。裕生園ホールにて。
(平成18年、71歳)



御下賜金伝達式での記念撮影
(平成18年、71歳)

設計が好きだった
辰元 忠理事長の手掛けた
病院・施設群(一部)



多目的ホール『ナナホール』
(平成13年、65歳)



『グループホームたちばな』
(平成12年10月、65歳)



『高岡病院』
(今の辰元病院 1病棟)
(昭和55年、44歳)



『セントラルキッチンたつもと』
(平成17年、70歳)



『グループホーム たちばな』新館
(平成14年8月、67歳)



『辰元病院』本館
(平成8年、61歳)



有料老人マンション『信愛園』
(昭和58年、48歳)



『きんかん小規模多機能ホーム』
(平成21年3月、73歳)



『アルテンハイム・グジブランド』
(平成18年6月、71歳)



『ケアハウス シャトル』新館
(平成12年4月、64歳)



老人保健施設『信愛ホーム』
(平成8年、61歳)

『多面的で大きな存在だった先生』

- 山下 真智子（辰元病院外来主任）
- 渡邊 静（辰元病院介護課長）
- 松元 由美子（グジブランド事務長）
- 橋口 勝彦（信愛ホームデイケア長・相談員）
- 楠元 剛志（たかおか居宅介護支援事業所管理者）
- 川越 淳（裕生園副園長）
- 柏田 沙代（裕生園事務主任）



今、私達は辰元忠理事長がオーナーだった料亭『光辰』の一室にいます。

楠元 この部屋とそれから隣りの部屋には、ある物が掛けてあったんですが、何でしょう？ 今はその釘の跡が残ってます。宮崎に関係がある。写真です。春の球場…

川越 巨人軍？ 長嶋？ 王？

楠元 原です。原監督と理事長と光辰の女将おかみの写真。

一同 へえー。

楠元 特理会の話をお願いしますか。

川越 特理会というのは「特別養護老人ホーム理事
長会」

柏田 宮観（宮崎観光ホテル）の料亭山吹で、私は走り回った。理事長は、自分が今どこにいるか

関係ない。一流料亭で、静かにBGMが流れていて、錚々たるメンバーが食事をしている所で、いきなり「柏田くん！」私は「はいっ」と言っ
てどんどん走って行って、「何ですか？」と言っ
たら、「肉を2キロ増やせ」隣りで産婦人科の
先生で特理会のメンバーの先生が食事をされて
いたのだけど、その先生が「は？」と、私を見
るから、「いや、先生違うんです。明日、霧島で
用意する肉のことです」ちょうどその時のメ
ニューにステーキがあった。みんなはそのステ
ーキの肉を増やせ、と言ってるんだろうと思っ
てぎょっとした。特理会のことなど、全然理事
長の頭でない。明日行く霧島のことしか考えてな
い。

松元 そういう「量」的なものには厳しかった。ビー
ルにしても、ジュースにしても。

柏田 決められた通りしないといけなかった。

川越 私達も霧島の別荘に行った時に、理事長のそ
ういう所を知らなかったから、理事長が自分の
小銭入れを出して、「これでジュースを買って来
い」と、何人分かの小銭を私達に預けた。その

日は暑かったから、近くのコンビニに行って、「今
日は暑いからジュースじゃなくてアイスクリー
ムにしようか。理事長も、今日は暑いから、ア
イスクリームを喜ばれるだろう」と話して、ア
イスクリームを人数分買って、「理事長！ アイ
スクリームを持ってきました」って行ったら、「馬
鹿か！」と大目玉を食らった。「えっ？」こっち
は氣を利かせたつもりだった。「返して来い！」
その言葉にまた「えっ？」アイスクリームをで
すよ。「アイスクリームを返すんですか？ もう
溶けよるですよ」「いいから、返して来い！」仕
方がないから、そのコンビニに行って、「ジュ
ースと換えられませんか？」と持って行ったら、
そのコンビニの方がやさしくて、「じゃ、換えま
す」って、換えてくれました。あの時はびっく
りした。

松元 「返して来い！」は得意だった。意に沿わない
もの。ビールの本数も決まっていた。おかわり
をして怒られた職員もいた。

橋口 今は笑い話だけど、その時は本当に大変だっ
た。

松元 私が三十年ぐらい前に入職した頃は、辰元病

院は今の一病棟で、後ろは全部茶畑とみかん畑
だった。まだ理事長が高岡にみえない頃。職員
がお茶を摘んでそれを使ったり、みかんをもい
で患者さんのおやつにしたりしていた。最初は、
理事長は大塚にいて、高岡の方は別のドクター
に任せていた。最初は『高岡クリニック』だった。
そして『高岡病院』になった。今の栄養士室が
診察室だった。理事長
は診察室で、机に足を
上げて休んでいた。眼
鏡を外して、靴下を脱
ぎながら、足を上げて
休んでいますよ。

川越 私が平成八年に入職
した頃は、信愛ホーム
はまだ基礎工事をして
いた。トントンカンカ
ンやっていた。それか
らどんどん大きくなっ
て、ケアハウスが出来、



したが、あの方達は、生き残り、ですよ、と
話をした。いろんな業者が現れては消え、現れ
ては消え：
橋口 最初はいいんだけど、一ヶ月後にはほとんど
の業者がいなくなっている。
川越 それはそれなりに何か理由があったんでしょ
うね。

理事長の人柄

柏田 理事長は人を信用しやすいから、騙され易い
所がある。無邪気で。

ある時、理事長と園長と息子の信先生まことと私の
四人でラーメンを食べに行ったことがある。ラー
メンを食べ終わって理事長が、エコ・プラザを
見に行こうと言い出した。信先生は仕事がある
というのに理事長が強引にエコ・プラザに行く
ことを主張して、結局行ったのだけど、いつも
の通り、自分が見たいものは他の人も見たいだ
ろう、という論理。でも、帰りの車中は誰も無
言で、何で私がこのメンバーの中にいるのかわ

病院新館が出来、グループホームが出来、：

柏田 私が来た頃は、今のケアハウス新館の所はジャ
リで、駐車場だった。

川越 職員駐車場もどこそこ移動しましたよね。

山下 高い山の上に駐車場があったこともあった。
子どもを抱えて、もう片方の手はオムツを持っ
て、雨ぐつがぬかるみに入って抜けない。雨ぐ
つをそのままにして、裸足で帰ったことがあっ
た。

川越 私が来た頃は、そう言えば、黒木義彦君がユ
ンボに乗って山に埋まったタイヤを掘り崩して
いた。不思議に思った。何で、タイヤがあんな
に山に埋まっていたのか。

松元 あれだけ集めて来たのよ。ボイラーで燃やす
ために。あの頃はハヤリだった。ビニールハウ
スなんかでもタイヤを燃やしていた。

川越 私も入ったばかりの頃、研修でタイヤ取りに
行ったことがあった。佐土原ぐらいます。

楠元 佐土原は近い方。日南や小林など、かなり遠
くまで行っていた。

川越 業者のつねむらさん、瀬口さん、二人と話を

からなかった。

川越 クツションが必要だったのでは？

楠元 味が欲しかったのでしよう。理事長は寂し
がりやだったから。

柏田 ボーナス支給の時もすごかった。理事長が自
らの手で職員全員にボーナスを手渡すのだが、
いかに早く配り終わるかが問題だった。

川越 一回、時間を計ったことがあったが、びっく
りするようなタイムだった。百人近い職員に2
分何十秒という速さだった。

山下 最後、体調を崩してからは、ベッドに座った
まま手渡していた。

松元 やっぱり最後まで自分の手で配りたかった。
あれは理事長の感謝の気持ちですよ。職員の顔
を見て渡したい。病院では最初の頃は、もらう
時に「ありがとうございます」と言う練習まで
していた。

川越 社福の方は、それを知らなくて、何人かの職
員が黙ってもらった事があって怒られた。

松元 ゲジブランドが出来た時も、それを職員に周
知させた。

川越 グジブランドにも理事長は行って手渡していただきますか？

松元 そうですよ。全施設。何でも、返事とかには厳しかった。

柏田 理事長は、言い方は直^{ちか}だけど、理にかなっていた。

松元 旅行やカラオケ大会、いろいろな行事があったて、その時は「よだきいなあ」と思っても、後ではいい思い出になっている。昔は誕生会もあって、全職員に自分の誕生日にプレゼントが渡っていた。ハンカチのセットとか。福利厚生はすごく良かった。以前は忘年会も『やまほ』や『くとみ会館』でやっていたが、職員が増えて入り切らなくなったから、老健や病院新館でするようになった。福利厚生面では、先生はすごくしてくれた。

柏田 理事長は妙な所がある。園長がこてんぱんに理事長を怒った時も、ニヤッと笑って、「かあちゃんがあんげな事を言いよるが」と言う。

松元 確かに、園長が怒っている時は、理事長はニコニコしていた。

治りも早かった。患者さんには良かったと思う。

そして『約束処方』というのがあって、分厚いノートに何冊も、A1、A2、A3、と細かいことが書いてあって、どの先生が見てもわかるようになっていた。あれはすごいと思う。岩切先生が感心して、「こういうのを作れる人はいない」とおっしゃった。小児から大人まであり、何歳から何歳までのこの症状はこれ、とか。やっばり勉強されていた。

川越 それは何人かの人も書いている。すごい勉強家で、先生の頭の中はどうなっているのだろうかと。

松元 理事長は腰が軽いんですよ。夜でも、絶対患者を断らなかつた。私達は助かっていた。往診の電話があつたら、すぐ行っていた。

柏田 あれだけ表^{おもて}だけの人も珍しい。秘書課長の橋口さんは大変だったと思う。すごい。ずーっと付いていたから。

橋口 いろんな人に助けられたから続けられた。今となつては、いい事しか浮んで来ない。

山下 何でもパツと思ひ付く。

川越 あれはどういう心境なんですかね。

楠元 あれはうれしんだと思いますよ。構ってくれる。相手をしてくれる。自分のことを言ってくれる。他の人は言ってくれないから。言う人はごく限られていますわ。だから逆にうれしいと思うんですよ。

川越 職員では有山さんぐらいじゃないですか、「理事長、それは違いますよ」と言っていたのは。

柏田 追悼文集では、どれ一つとして同じ話がない。

川越 先見の明があつた、というのは多くの人が書いている。あと時間厳守のこと。

松元 先生が若い頃は、職員がよく診察室に呼ばれて怒られていた。

渡邊 回診だ、と言ったらみんなビリビリしていた。患者さん一人一人に声かけて回っておられた。

山下 理事長は全施設、全患者を診て回られた。全員の処方をしていた。だから忙しかった。カルテが飛んで来ていた。理事長は仕事が早いから、こっちの人のカルテを書きながら、後ろの人の事を言っていた。患者さんがちょっとでも風邪気味だと、すぐ処方して薬を飲ませていたから

川越 名前の付け方がすごい。

橋口 病院で以前やっていたカラオケ大会も余興ではなく、大会。真剣勝負だった。

ある時期、忘年会での職員の出し物が面白くなって来ていた。忘年会の次の日、理事長がブスーっとしていて朝からイライラされていたが、突然、「よし、楠元君を呼ぼう」と言つて、楠元さんと呼んで、「楠元君、何とか辰元グループを救って欲しい」って頭を下げた。そして、真顔で「頼むから、オカマになってくれ！（女形^{おやま}をしてくれ、の意）」「わかりました」「そうかー！」

渡邊 何かにつけ、びっくりしゃっくり。いろんな事があるたびに。最初の頃は、職員一人一人を覚えていらつしゃつた。職員旅行の時は、理事長が職員一人一人にお酌をして回っていた。

川越 それはすごい。

渡邊 今は、職員は名札を付けているけど、その当時はそれがなくても職員を覚えていた。採用面接の時に覚える。旅行が終わって、先生に呼ばれると、「〇〇は何だ！あの態度は何だ！」と、

ちゃんと名前で言われていた。だんだん職員が若くなって行って、作法を知らない若い子が入ってくるようになった。

川越 私も経験ありますよ。事務長になり立ての頃、職員採用は園長がされてたから、特に理事長にまでは話を持って行かなかった。するとある時、理事長の知らない職員が働いているのに気付いて「あれは誰だ！」という事になって、私は怒られたことがある。さすがに最晩年はそこまで関心がなかったけど、私が事務長になった頃は、「君はそういう事が多すぎる！」と言って怒られたことがある。でも、理事長のそういう頃の歴史を聞くと、ああ、理事長は全部把握してたんだなあ、と納得させられる。私にはもう雲の上の人だったから、いちいち末端の職員のことでも理事長をわずらわせるのはどうか、という気持ちもあった。そしたら怒られた。

橋口 ある時、自分の知らない職員が写真に載っていて、それを識別して、「これは誰か！うちの職員じゃない！」と言っていた。本当にコンピューターのような感じだった。

先読みする力

渡邊 理事長の先読みする力については、神戸の大震災があった年に、沖縄で老人医療に関する全国規模の研究大会があった。いろいろな発表があつてる時に、理事長はそっくり返って「ちんすこう」をバリバリ食べながら、「何を今頃言ってるんだ。とうの昔に僕はわかってるよ。考えてるよ」と言われた。確かに私なんか病院で何年も前に理事長から、先行きこうなってるようになってこうなってるよ、と言われていた事その時の全国大会で他の人達が発表していた。だから、理事長の頭の中を解剖してみらんといいかんね、と職員同士で笑い話をしながら帰って来た。シーガイアにしても、言われた事が順を追って次々に当たっている。今、世界的にこういう時代じゃないですか。私は理事長に、先行きどうなるんでしょうねって、聞いておきたかった。それが聞けないままだった。

柏田 私も、何かで理事長と一緒にシーガイアに行った時、理事長がエスカレーターのイルミネーション

山下 毎日、日誌を書いていた。
松元 マメだったんでしょね。

山下 理事長は、脳出血するまでは日誌を書いてた。その後は、自分の代わりに日誌を書いてくれ、と言われていた。その日のことを大体でいいから、と。誰と会ったとか。ハガキも全部、裏も表も読ませていた。毎日。

松元 先生は字が上手だった。
楠元 繊細なところがあった。

松元 頭は良かった。数字には強かった。
渡邊 シーガイアが出来た時、「いいか、ここはすぐにダメになるぞ」って言われた。いくらいくらかかって、利息がいくらいくらで、すぐダメになる、と。「その次はどこがダメになると思うか」

「そんな事わかりません」って言ったんですよ。「三井グリーンランドだよ。その次はどこだと思うか。ハウステンボスだよ」と言われた。時間が経って、理事長が言われた通りの順番でその三つがダメになった。

橋口 懐かしい感じがする。私は秘書課長として身近にいたからわかります。そんな感覚だった。

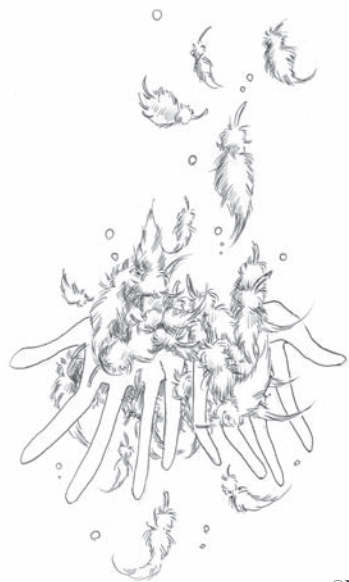
ンを指しながら、「俺だったらこんな無駄なことほしくない。シーガイアはもうすぐダメになる。そうになったらどうなると思うか」と聞かれた。答えに詰まっていると、「外人が買うよ、外人が」と言っていた。その通りになった。

渡邊 高岡クリニックが高岡病院になった頃、寝たきりの人が次から次に入院して来た。「君達には大変骨折りをかけるけど、先行き、これが普通になる。社会的にも君達の仕事が認められる時代が必ず来るから、頑張ってくれ」と言われた。

松元 老人医療というのに目を付けられたのが、一番の先見の明。高岡病院になって老人医療の患



©HONBU



©HONBU

者負担が無料の時代がしばらくあった。あれで結構、良かったはずなんですよ。毎月毎月、町に申請して補助金をもらっていた。

柏田 辰元病院、その前は高岡病院。あそこに入ると思えば帰れない、と言われていた時代もあったと聞く。

松元 でも、入っている人達の家族はそれを言わなかった。回りがそう言っていただけで。そういう人しか入って来なかった。生きて帰れる望みがない人しか入って来なかった。

柏田 私は、綾の実家に帰った時、お婆の所に近所の人達がいっぱい集まってお茶を飲んで話していた。年寄りばかり、十二、三名。「今、辰元におるらしいね」と言われるから、「そうよ。私は特養の裕生園という所」「高岡病院は一旦入ったら、もう出られんげなわ」という話になった。「でもね、おばちゃん。家で面倒を見られない人を病院が引き取ってくれてるわけよ。死ぬまで面倒を見てる。病院で亡くなってるからそうなるわね。そこをみんな、言い方が違うんじゃないの?」と言った。「私も行って初めて知った。

そういう状態にまで行ってしまっている。これ以上、手が掛けられない、というところで病院に来るから、病院で亡くならざるを得ない。

松元 そういう実態は、中にいる人間はわかるけど、それを外に言うことはできない。だからそういうわさになる。だから、近くの人にはむしろ入らないで、遠くの人が入っていた。

渡邊 日本全国からでしたね、昔は。北海道も来てたし、青森も来てた。

みんな寝たきりだよ。誰が面倒を見る? おじちゃんおばちゃん達も、子供達は誰も面倒見ないよ。その時にわかる、病院の有難さ、施設の有難さが」話さないといけない。

楠元 そのあたりの話は、ある民生委員さんも言っていた。帰れない、じゃなくて、亡くなるような方が入っている、と。

松元 理事長はどんな人も受け入れていた。

楠元 身体にウジのわいたような人も受け入れていた。

山下 外来に来た人を風呂場に連れて行くことも多かった。

川越 平田部長の追悼文の中にもそういうシーンが出て来る。「入院でーす」と言われて、両脇から手を入れて患者さんを運ぼうとすると、ズターッと膿がたれて来た、という。骨まで見えていた、と。

山下 ウジがわいていてね。それでもみんな長生きをした。朝、昼、晩、処置をした。背中のお骨から全部見えていた。身がないんだから。

渡邊 その当時は、みんな家庭で看てるわけだから、

柏田 理事長が階段で転倒してある総合病院に入院した時のこと、これは理事長が亡くなる一年前ぐらいのことだけど、理事長が家に帰りがたがるものだから、うちの職員の飛田君達が警備員に化けたりして何とか理事長を止めようとした。その病院の人達は、「何じゃるかいかい?」と思っただろう。

山下 私も理事長の付き添いでレントゲン室の所にいたら、何か黒い服を着た人達が三人ゾロゾロあっちへ歩いて行くのが見えて、理事長が「こっちへ行く」とドアの方へ行くと、さっきの黒服の三人が立っていて、私が「先生、ここも警備員がいますね」と言って、他の所へ行こうとしたら、その三人がうしろを付いて来た。真っ黒の人達。サングラスも真っ黒。そしてレントゲン室にお客さん達が、今からレントゲンを撮らないといけないのに、フーフー言いながら身を乗り出して、目を丸くしてその一行を見ている。これはあまりに衝撃が強すぎる、と思っ

橋口 あの時理事長は、とにかくその病院から出た

かった。出たくて出たくて。「非常口から行け！」
と言うから、私はすぐ辰元病院に電話して、「三人、うちの職員を警備員に変装させてよこしてくれ」と頼んだ。マスクや帽子をかぶってうまい具合に変装してくれた。

柏田 それを信用するから、理事長は。自分の所の職員だとは思わない。

渡邊 職員は職員で心配して行ったんですよ。「バレたら、どうしたらいいですか？」って。

橋口 三人のうちの一人が、「あとにもさきにも一生に一度でしょうね、あの理事長を怒ったのは」と言っていた。理事長に「いけませんよ！」と言うわけだから。

川越 そういう時に忘年会の演技が役に立ったわけだね。

松元 何事もそう。選挙の時も。何事もみんなの協力のおかげよ。

橋口 ある日ビラを配れ、と言われた。真夜中の十二時に配れ、ということだった。理事長はずっと寝ずに月を見ていたらしい。「もう、今頃は配っているはずだ」と。その話を聞いた時、ドッキ

茶を入れてもらうから」と優しくなだめるように言って、園長が向こうへ連れて行った。理事長にとつては死ぬか生きるかの大問題だった。

橋口 理事長がビラ配りの命令を出した時、「職員は誰もみつからなかったか？」と聞いた。「こっちの職員は誰もつかまらずに、牛乳屋か新聞屋がつかまったそうですよ」と言うと、「そうかーっ！」理事長の頭の中では、時代劇の拷問の場面が浮んでいた。

川越 理事長の命令は無理難題なんだけど、やってみると役に立つ、というものもあった気がする。『ローラー作戦』で、地域の家を一軒一軒回った時も、いやいやながら行きましたよ。でも、行ってみると在宅の様子がわかるし、何となく面白味もあった。

渡邊 奮い立たせられて…

松元 介護の人達は一生懸命やってた。手を抜かずに。

柏田 辰元病院の介護や看護には「感心する」という声を聞いたことがある。「あれだけのことを患者にしてもらえば、文句を言ったらいかんわ」と。

りした。月を見ながら、「成功するように」と、祈っていたわけ。朝になったらすぐ「どんげだったか」と聞くから、電話をかける真似をして、「ああ、そうですか。わかりました。理事長！ なんか、村の人達が外へ出て来て、こんな紙が来てたと話をしていたそうですよ」と言ったら、「そうか！ やったーっ！」

敵がはつきりわかれば、こっちの職員は仲間。という意識が強くなる。団結して可愛がる。でも、外に敵がいなくなると、内輪に敵がいなくていけなくなる。その辺ははつきりしていた。あの人は本当の戦争をしている感覚だった。いい加減な事をやったらそこで首切りだった。

柏田 高岡と宮崎の合併に関する最初の住民投票の時、六〇票差で負けた。その時、理事長が裕生園の事務所に来て、「俺はもう腹を切る。負けた。俺は腹を切る」と言うわけよ。そこに業者がいようと誰がいようと、そう言う。吊りズボンのサスペンダーをバチンバチン言わせて。そこへちようど園長がみえて、「腹を切るとか言いなさんな、そんな所で。私の部屋に行きなさい。お

川越 手厚い、という評判は良く聞きますよ。

松元 平田さんという人が最初にそれを築いた、というのはあったと思う。昔の職員さん達は農家の人達が多くて、手を抜くことを知らない。家の人を看るように介護をしていた、というのはある。

川越 平田部長にも追悼文を書いてもらったのだけど、病院に勤めてみて、雨が降らない」という事に感謝している。そういう所に感謝している。だからすごい。

山下 職員が休みを取ることについては理事長は厳しかった。逆に、家庭より職場を大切にすると誉められた。

渡邊 私も事故で二ヶ月の療養と言われて、理事長に言いに行ったら、「なに！ 二ヶ月？ 一ヶ月にしる！」と言われて一ヶ月で復帰した。

山下 平田さんも足を骨折した時、ギブスを巻いて車イスで仕事をした。

松元 平田さんはよく先生に仕えた。

柏田 平田さんのことは理事長も一目置いていた。

最終的には、
理事長の悪い所は思い出されない。(松元)

柏田 皆さん、理事長との付き合いが深いから、怒られた時はいやな思いをして悲しいけど、今はチャラになっていると思う。

川越 理事長は、いい意味で単純だし、うらおもてがなかった。そのまんまだった。子供みたいな。理事長に裏切られたとか、騙されたとかというのはない。

楠元 まっすぐな方だった。うしろも振り返らない。

川越 自分が嬉しいこと、自分が喜ばしいことは、人も喜ばしいと思っている。自分がアラレが好きだったら、人もアラレが好き。

柏田 亡くなった後、膨大な量のアラレが出て来た。

松元 笑顔がかわいい人だった。面接の時、みんな、ものすごく優しい人だと思ってしまう。

渡邊 どこでしたかね、飲み屋さんに行った時にこの人も言っていましたよ、「眼が優しい。あんな眼の人はみんな優しいですよ」と言われたことがある。

だと半分あきらめていた。でも、ピラを作ったり一生懸命していたから、ひよつとすると高岡もできるのかもしれない、とあって、それで市長が高岡の住民に話しに行こうか、ということになった。だから、合併が成立した時は、市長は、うちの理事長のことが真っ先に頭に浮んだと言っていた。

川越 拾い切れないぐらいエピソードがある。理事長が車に乗るなり、運転手の職員に「行け!」と言うから、「どこに行きますか?」と聞くと、「まっすぐ行け!」と言ったとか。まっすぐ行くのと田んぼにはまる…

渡邊 以前の男性職員は良く言っていました、「聞き返しができない」と。聞き返しができないから、しっかり聞いとかなないとけない。

柏田 理事長がまだ歩いて出勤されていた頃、暑い日で、途中で疲れたのだろうか、迎えに来てもらおうと思つて、園長に電話した。「迎えに来い」と。園長が「どこね?」と聞いたなら「ここよ」と答える。「ここて、どこね?」「ここよ!」
埴が明かないから、園長が賢く切り換えて「そ



楠元 一人でいるのが嫌いな方だった。誰かそばにいないとだめだった。それでいて、お役所が来ると会うことはせず、職員が代わりに会つてお話を聞く。

川越 でも、自分から役所に乗り込んだこともあるそうですね。

橋口 市長室にも何回も行きましたからね。市長の所に行つても、話が真剣。合併の話も、「絶対やらないといかん」と言つて。市長の方は、だめ

これから何が見えるね?」と聞いたなら、「プレハブ」うまく説明ができないんだらうね。園長が男子職員に頼んで、どこか途中にいるはずだから、と言つて捜してもらつたら、信号の所に立っていた。「ここよ」しか言わないから、他の人はわからない。

川越 それは理事長の典型的なところ。自分の思っていることを他の人も思っている、と思つているから、「ここよ」と北海道で言われても他の人にはわからない。自分を第三者的には見れなかったのかなあ。

柏田 まだ何も相手に話していないうちに、「君はどう思うか?」と相手にいきなり聞いたりしていた。

松元 「君はどう思うか」と聞くけど、すぐその後、自分で答えを言つていた。

柏田 だからへたに答えたらいけない。自分で質問して自分で答えを言う。

川越 理事長は背が高かったじゃないですか。当時の人にしたら。いや、今の基準でも高かったけど。そして理事長は先見の明があつたでしょう。

背が高いということと何か関係はないだろうか。他の人、普通の背の高さの人に見える物と、理事長に見えている物は違ったんじゃないか、と思って。物理的にも。もちろん、頭も良かったんだとは思うけど。だから、普通の人が見る物と自分が見る物は違う、ということをや、どこかで、あの人の成長の中で、自覚する所があったんじゃないかな。そういうことをちらつと考えたことがあった。

柏田 ペルーのマチュピチュに旅行に行く前、毎日私は理事長の所に呼ばれて、旅行ガイドの本を「読め」と言われた。理事長はもうその頃は目が悪かったから、毎日私が延々と旅行ガイドを読んだ。読んでいるうちに、ソファに座っていた理事長がだんだんずり落ちて来て、それでも「読め」と言うから読んでいた。読み終わった頃には、理事長はブリッジ状態になっていて、首と背中だけがソファの座面にある状態。

山下 それは昔から。ずるずるとずり落ちて、夜勤者が夜勤が終わってあいさつに来ると、理事長はソファのひじ掛けの所の穴に手を入れて、ラ

ごいのよ、その抱き方が。お互いに。橋口さんはものすごく芸が達者。すごく怒られた後のこと。

柏田 演技力も付いたでしょうね、秘書課長時代に。私も毎日旅行ガイドを読んでもらうんだけど、最初はちゃんと座っているのに、だんだんずるずるとズリ落ちて行って、この辺に顔があるわけよ。「理事長、ちょっと起きませうか」と言っても、でも起こしても起こしても一緒だった。

川越 本当に話は尽きませんが、この辺りで打ち切りましょうかね。三時間半という長い時間、ありがとうございます。

追記 座談会のメンバーは、辰元病院と『光辰』の間をマイクロバスで往復したが、そのバスの中でも理事長の話は尽きなかった。この座談会で拾い切れなかったエピソードが山ほどある。この座談会でもわかるように、理事長は多面的で、大きく、予言の力があり、非常に厳しくて恐かったけれど、子供のようなところもあり、どこか憎めない人だった。

ンドセルのように、からった状態。夜勤者が理事長の部屋に入ってきて来て、そんな理事長の姿勢を見て、あいさつのしようがない。床に寝たような状態なんだから。足だけ立てて。

川越 若い頃からそうですか。何か歩道橋みたいな感じでしたよね。何で姿勢を正そうとしないんでしょうね。

橋口 最後はソファからずり落ちて立てなくなりましてもんね。

柏田 起こすにも一人じゃ起こせないからね。固くて重いから。

山下 橋口さんは、ある時ものすごく怒られて、理事長室から廊下に出てきた。理事長が例の姿勢になっている事は知っている。ドアの中から「橋口君、橋口君」という声が聞こえる。「橋口さん、理事長が呼んでるよ」と言ったけど、橋口さんはすごく怒られた後だったからしばらく躊躇していた。でもさすがにちょっとかわいそうになって、ドアを開けると理事長が例のずり落ちた格好をしている。「アラ、どうしたんですか！ 先生ー！」そしたら先生が「ありがとうー！」す



ベトナムで、ご飯を口に運ぼうとするたびにバイクの音がバタバタして、それがあまりに繰り返されるものだからついに笑ってしまった理事長（平成19年2月、71歳）



مجلس
العلماء

医療法人社団高信会職員より

- 川崎 渉一郎 氏
- 木下 泰行 氏
- 岩切 徹 氏
- 有山 恵子 氏
- 山下 真智子 氏
- 渡邊 静 氏
- 橋口 勝彦 氏
- 平田 時子 氏
- 小畑 初美 氏
- 山口 好子 氏
- 原口 正人 氏
- 山本 邦子 氏
- 矢野 房子 氏
- 杉尾 町子 氏
- 駒山 道生 氏
- 高橋 英敏 氏



時代を先取りした事業家であった辰元先生

辰元病院院長 川崎 渉一郎

辰元先生に対する大方の意見を総合すると、事業家である、先見の明がある、アイデアマンである、気短かである、セツカチである、我がままである、などなど。先生の随筆集『ひとつとべ』の序文（渡邊綱纜氏）によると

病院その他の経営についても、「私の経営は一口で言えば手堅い」と、はっきり述べておられるが、企業出身の私が頭を下げたくなるほど、辰元式経営論は核心をついている。日頃から、私は辰元先生を「アイデアマン」と思っていた。着想が豊かである。そして前向きで、先を読んでもおられる。

とある。

先生は、鹿児島市のご出身で、昭和二十九年ラ・サール高卒、九大農学部を中退して鹿児島大農学部卒。昭和四十八年に宮崎市内で辰元医院を開設され

ています。当時の医療界は急性期医療が伸びつつあった時期で、慢性期医療、特に老人医療はどこでも厄介払いに近いものであったように聞いております。寝たきり患者さんや認知症のような患者さんは受け入れてくれる所も無く、急性期病院も家族も困り果てていたそうです。そこで辰元先生は皆が困っているのなら自分が何とかしよう、と思いたって、まず、昭和五十二年四月、当時の東諸県郡高岡町に特別養護老人ホームを開設されたのであります。以後この地に次々と医療法人、社会福祉法人関連の施設を開設・増設され、現在では職員総数が四百名近くにもなる一大事業所に成長したのであります。

しかしながら、私は、先生のたくさんの蔵書を見て、先生がただの思いつきで、アイデアマンでいろいろな事業を展開されたのではないことを知りました。先生はいろいろな本をどっさり持っておられた

のです。以後の医療や福祉、政治・経済の動向などなど。先生は単に先見の明があっただけではなく、常にじっくりと研究されていたのであります。当時、時局講演会などにも積極的に参加され、医療界の動向だけでなく、政治・経済の動向にも常に注視されておられたようです。オイルショックの後には、昭和五十七年に代替え燃料として大規模なタイヤボイラーを設置されています。みんなが困っていた大型自動車の廃タイヤの処分の手助けにもなると。（平成十五年に廃止）平成八年には、病院・各施設の膨大な水道使用料金の軽減を目的に敷地内に水を求めてボーリングしたところ、一向に水脈に当たらず、めトルからの温泉です（含ヨウ素食塩泉、27℃）。これをタイヤボイラーの熱源で温めて病院・施設入所者用に大きな温泉施設が出来ています。（もったいなくも一般には開放していません）

先生は、思い立ったら即実行と言う性格で、平成七年一月十七日の阪神・淡路大震災の時には、一月二十〜二十三日まで当地から自動車にて数人の職員・仲間を引きつれ、陸路で神戸市まで駆けつけ、ボラ

ンティアにて医療活動をされています。その行動力には感心します。この様なことは枚挙にいとまがありません。時には周囲の人たちが振り回されて大変な思いをした方々も多かったと聞いております。

現在の辰元グループの概況を列挙しますと、医療法人としては辰元病院183床（介護療養型）、介護老人保健施設80床、天ヶ城訪問看護ステーション、社会福祉法人としては特別養護老人ホーム裕生園70名、ケアハウスシャトル50名、認知症対応型グループホームたちばな26名、養護老人ホーム長寿園50名、たかおか居宅介護支援事業所、小規模多機能ホームきんかん、会社組織として介護付き有料老人ホームグジブランド65名、有料老人ホーム信愛園10名、有料老人ホーム鹿児島信愛園（住宅型30名、介護付20名、泉源62℃の温泉付き）、セントラルキッチンなど。セントラルキッチンにしても、あたかも一流食品工場のような清潔で大きく立派なもので、独立した組織になっています。ここから病院、各施設へと配食される。職員総数は約四百名近くにもなり、これほどまで大きな組織になりますと、それをしっかりと束ねることも容易ではないはずです。その点、先生は

各施設・病院の幹部職員を厳しく叱責されておりました。平成十三年夏、縁あって私が当院の院長職として赴任後は、医療面は私に任せきりで、先生はもっぱら組織全体の経営、管理に専念され、いつも次へのステップアップのための構想を練っておられました。私にとりましても、大学時代での実験・研究生活、学生や医局員への指導、学会活動や医師会等での講演、その後の県病院での神経難病の診療や救命・救急医療などの最先端の医療と、当院での老人医療、人生の終末期医療と言う医療の両端を経験出来たことは大変良い経験にもなり勉強になりました。あの世に行かれた先生は、多分今頃はあの世での新しい事業展開を模索されているのかも知れません。

ここで再び先生の随筆集の一文をご紹介します結びと致します。

思えば昭和五十年この地に立った時、今日の発展を思うことは砂漠に緑を求め様な感慨でした。努力と挫折は縄のように交わり幸運は執念の中で微笑みました。十年先二十年先という時間と空間を想像し、いつか社会がお年寄りを大事にする時代が来ると思い、また高齢化がこの

追悼文

辰元理事長の思い出

以前お世話になったことのある辰元理事長が、病に倒れ、古賀病院に入院中である。又、中村病院長が、カーフェリーの上で急死された。というショッキングなニュースを耳にしたのは、平成十二年のことでした。気になって、古賀病院に理事長をお見舞いに行くと、思ったよりもお元気そうで、看護師に怒られながら、昼夜を問わず、病院や知人に電話をしまくっている、という園長の報告に、安心したので覚えていきます。理事長は、ベッドの上で、それまであったいろんな出来事や、同年四月から始まった介護保険制度についても熱心に話され、「辰元グループでも介護保険施設を開設しており、これからも介護保険事業に専念、拡大していくつもりなので、施設を見学して気に入ったらいつでも来なさい」と声を掛けていただきました。

介護保険制度に興味があり、ケアマネージャーの

仕事に関心と理解と力を貸してくれると思いがらじつと待ちつづけておりましたら、まさに時代は予想以上の広がりをみせ、今日最後のこと、自分たちの両親のことを考えない人はいなくなりました。

(本文は、宮崎市郡医師会会誌「醫友しののめ」平成二十一年十二月号に掲載されたものです)



特別養護老人ホーム裕生園の三十周年記念祝賀会に供するために、わざわざ目井津港まで買い付けに行かれた時のもの。この様に、いつも直接現地に出向き、最高のものを求めてこられる。

辰元病院副院長 木下 泰行

資格まで取っていた私は、辰元グループの新しい介護保険施設や、職員たちの仕事に対する情熱に圧倒され、平成十二年十月から常勤医として勤務することになりました。

高齢者時代の到来を逸早く予見された理事長は、昭和五十二年四月、高岡の地に特養施設裕生園を開設された後、介護療養型辰元病院、老健施設信愛ホーム、その他、ケアハウスや、グループホーム、セントラルキッチン、小規模多機能施設など次々に開設され、今や辰元グループの職員の数は約四百人と巨大介護支援グループに成長しました。現在の日本の介護保険制度は、先駆者のドイツを凌いでおり、外国人から見たら、より細かく区分された複雑な、質の高いケアに目が回るかも知れませんが、私が辰元病院に来た当初もまさにその通りでした。

さて、理事長には忘れられないたくさんの思い出

があるのですが、その中で、感謝しなければならぬ思い出の一つに禁煙があります。私は、辰元病院に来た頃に、ちょうど禁煙を試みていました。目標を決めて、一日に吸った煙草の本数をメモし、徐々に減らしていくって禁煙しようと思っていたのですが、なかなか上手いきません。そこへ、見るに見兼ねた理事長が、亡くなられた中村院長がヘビースモーカーであったことや、煙草の恐ろしい害について語られ、「少しずつ減らしていくようでは禁煙はとても無理、一本も吸わないつもりでぱっと止めること」と、迫力を持って言われた為、私も決心し、一度に止めました。結構苦しくて、飴やガムなど山のように買ってきて、煙草代わりにしょっちゅう食べていましたが、数カ月後には何ともなくなり、無事禁煙に成功しました。その後は、以前みられていた頻回の咳や痰、労作時の息切れなどが消失し、心電図で認めていた虚血性所見も全くみられなくなりました。改めて煙草の恐ろしさを認識するとともに、理事長に感謝した次第です。

他に忘れられない思い出として、恐怖のお茶タイムがあります。ある日、理事長と昼食をご一緒した

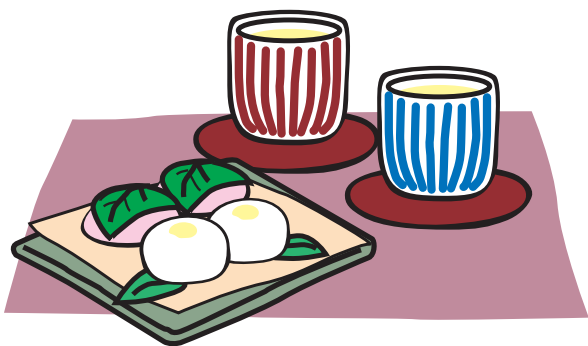
さらながら理事長の存在感の大きさを思い知らされました。

あの理事長のこと、辰元グループのことが気になって、今でも「そこはこうじゃない、ああじゃない、こうするんだ」と空の上から見守っておられるかもしれません。

理事長の長年のご苦勞に敬意を表し、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

後、お茶を飲みながら、病院や施設のこと、世間話に、時の経つのも忘れて熱中し、気がついたら夜になっていました。久しぶりに楽しいひと時を過ごせたと思っていたら、翌日もまたお茶を飲もうと言われて、夜まで延々と話が続きました。すると、その翌日も又お茶に誘われ、さすがに仕事に気がなり始めたのですが、理事長はおかまいなしに身振り手振りで延々と話に熱中されるのです。それから一週間位続いたでしょうか、同じ話題になり、つい眠気が襲ってくると、突然、「君は一体どう思うか？」と矢の様な質問が飛んでくるのです。見るに見兼ねた看護師が、病棟から指示受けの電話をして助け舟を出してくれたこともありました。

社交的で、賑やかなことの大好きな理事長は、新年会や、新人職員歓迎会、夏祭り、忘年会など、自分から率先して行われ、職員や地域住民との触れ合いを大事にされました。特に忘年会の職員の余興は毎年楽しみにされており、忘年会が終わった翌日にはもう、「来年はどうなっているか？」と職員に尋ねられ、みんなを驚かせていました。理事長のおられない今年の忘年会は、何となくしらくらムードで、今



辰元忠先生の思い出

辰元病院副院長 岩切 徹

初めて先生にお会いしたのは六年前の四月頃だったと思います。日曜日の午後理事長室を訪問すると先生はテレビでイラク戦争を見ておられた。「岩切です。よろしくお願いします」数分間テレビに集中されてなかなか挨拶がかえってきませんでした。すると突然「先生はおいくつですか」と私に聞かれました。「私は今年の九月で〇〇歳になります」「そうですか。じゃあ年収は××××円ぐらいでよろしいですか」「はいけっこうです。いろいろ準備がありますので七月一日からうかがいます」このときはとても短い話ですぐに完了しました。

その次は日曜在宅医で私は外来をやっていました。先生は病院に出ていらして暇のようで、私の外来に遊びに来られました。「じつはですね、脳出血のために意識がなくなり、車を病院の玄関につけてしま

ね。それ以来車の運転はしていません」「もともと車の運転はとても好きなんです」「金沢までドライブもしたんです」信君が跡を継ぐ予定の話などをのんびり話しました。その日はとても外来が少なくてじっくり話ぐできました。

いつかは霧島の別荘で先生と介護職員と一緒に別荘の温泉に浸かりました。先生は何事にもせっかちで焼肉を全ての職員に食べ食べとせかされました。ある職員は南アメリカ旅行のビデオテープを病院に忘れてきたということで霧島から病院まで取りに行かされました。先生は実に楽しそうにテープを見ておられた。南アメリカの旅を思い出されたようでした。翌日は定番のちゃんぽんを食って帰ってきました。先生は幸せ者だと思いました。いろいろ職員に対して怒られ、気の短い人のようだけど、なんと

く憎めないオーラが出ていました。怒られても気分が悪くならないのが辰元先生の真骨頂です。一日宿泊して生活するとやっと人格がわかります。ちなみに私は南アメリカ旅行のお土産にマチュピチュの帽子を頂きました。

ある日曜日の夕方、私の家族4人である回転寿司にいました。私の家族は寿司が好きでよく回転寿司に行くのですが、そこに偶然辰元夫婦が寿司を食べに来られた。光辰とか経営されているのにこういう安い店でお会いしてびっくりしました。先生の飾らない人格を垣間見たようでした。もちろん先生はいつものサービス精神で私の家族の分も出すと言ってきかれませんでした。恐縮しました。

さて、理事長とお会いしてからちょうど六年間になったところでした。六年間観察した先生は速断・速決の人と見えました。初めて会う人から見ると変人に見えるかもしれない。実際私はある他の病院の先生から「辰元病院の理事長は変わっていますね」と言われたことがあります。だんだんと知り合っ

て月日が経つと先生の人格がみえてきます。先生の怒ったところ、わがままなところ、気の短いところ、その裏にある優しいハート、サービス精神、従業員には喜んでもらう、という精神が思い出されます。先生のご冥福をお祈りします。

合掌

思い出

辰元病院事務長 有山 恵子

勤務して一ヶ月位の頃、病院前の田んぼのあぜ道で当時三歳の長男は理事長先生に抱かれて頬ずりされました。その長男も三十二歳。いろいろな事がありました。

十数年前の介護病院の飲み会の席で私は三人の方にこう言われました。

①記念病院〇理事長

「貴方とこの辰元先生がうらやましい、先生が右を向けと言えば職員が全員右を向く。うちはだれも向かん」

確かにすごい指導力でした。次から次と溢れ出る先生のアイデア。それに従う全職員。数日間続くローラー作戦等はその最たるものでした。一日休むと次の日はついて行けないくらいのスピードでいろんな事件？がおこっているのです。取り残されないように気合の入った毎日でしたが、今振り返ると結構刺激

りました。

いろんな事がありました。事務長室を面接、来客、昼寝、等など理事長室と間違っておられるのではないかと思うくらい利用して頂きました。

お子さんの話をされる時の優しい目

園長先生との出会いを話されている時の照れくさそうな笑顔

愛情表現の苦手な先生でしたが人一倍情にもろく、優しい方でした。

いつからでしょうか 先生から怒られる事が殆どなくなりました。

先生いろんな話をしましたね。コーヒーが吹きこぼれる位笑ったり

年とつたらシャトルでみんな一緒に暮らしましょうと盛り上がったたり

振り返ると沢山の思い出があるのに なかなか文章にできません。

ありがとう 先生、 さようなら 先生。

のある楽しい毎日を過ごしていたように思います。

②当時温泉病院のk先生

「辰元先生は熱心な先生ですね。必ずどんな研修でも出席されています。感心しています」

確かに先生は薬価改正、病床の転換等、改正の前にいろんな事を勉強されていて、私達は先生の指示に従っていれば大丈夫の状態でした。いろんな情報を聞くと県内、県外に職員を伴って研修に行かれました。将来を見極める力と数字の計算の速さには敬服。

③丁病院専務理事のkさん

「有山さん、どんな事があっても辰元先生について行きなさいよ」

何度も役職を降りたり降ろされたり。職員の中で一番先生と口論もしました。口論の後、言い過ぎたと握手もしました。常識にとられないものの方、考え方等沢山の事を、先生に付いていった事で教わ



コスモスの向こうに辰元グループの建物群が見える

理事長先生との思い出

辰元病院外来主任 山下 真智子

私は、昭和五十六年二月に、辰元病院に就職させて頂き、当時は、先生も、朝から夜遅くまで、外来患者様の診察や、病棟の回診など、忙しい毎日でした。病棟回診時は、患者様の一人ひとりの手を握り、「大丈夫ですか」と声を掛けられ、訴えがある場合は、「すぐ薬を飲ませなさい」と指示して下さいました。週三回ぐらいの午後は、高岡町内と宮崎市内に、往診にも行かれ、患者様や、その御家族の方々色々な会話もされ、患者様も御家族の方も、楽しみに待つて下さっていました。在宅では、寝たきりの方が多く、病院受診も困難な患者様の為、月に一回は、血液検査と心電図検査を行っていましたが、看護師一名ですべての検査をし静脈注射まで施行するのに大変でした。先に、車の中で待つていらっしやる先生の事が気になり、車の所に、ヒヤヒヤしながら行く事が

多かった。そんな中、一回は、後部座席に多くの機械などの荷物を乗せ、反対側の座席に乘ろうとした時、急に先生の車が発車し、私一人取り残された事があり、本当に心配しました。次の往診先に行った時、私が乗っていないのを知り、引き返して来て下さったが、すごく怒られた事を覚えています。その後は、「荷物を乗せますので、反対側に私が乗ります」と必ず声を掛ける様に気を付けました。

夜も、患者様の急変時は、大塚の方から毎晩来て下さり、重症時は病院の医局で待機して下さいましたので安心だった。そういう時間で、薬剤の勉強をされたり、本当に努力されていました。

毎日の忙しい中、職員の間話を聞いて下さったり、幹部の方々は、理事長室に入ったり、出たりの日が多く、その中で、どなられたりする事も多く、涙が

出たりした日もありました。でも、問題解決時には、やさしい声で、「それで、やって見て下さい」と、にっこり声を掛ける事で、あまりの変化にびっくりした事もありました。でも、厳しい先生ではありませんが、今考えますと、やはり、私達職員の事を良く考えていて下さっていたと思います。

又、介護保険の勉強も、平成初期頃より始められ、「今後は、老人が増えて来る時代、皆さんも老人保険の勉強を頑張して下さい」と朝礼で話された事を思い出します。そんな中、「医師会の先生方は、あまり関心がなく『老人なんて』と話を聞くとしなかった」と教えて下さった。でも、数年後、先生の話された通りの時代になり、私は途中、看護学校に入学した時、介護保険の勉強を授業で学び、その時、「やっぱり先生のお考えは正しかった」と感心しました。

そして、約二十五年前の辰元病院には、他の病院からの入院紹介があったが、全員重症であと数日の命で危険な方々ばかりで職員は大変だった。重症の為、先生は必ず入院時「三日間は親孝行として付添

いをして下さい」「何もなくて良いのです」「側にいて下さい」と、御家族の方に話をされていました。でも、死亡退院時、家族の方が「最後の親孝行が出来ました」と、挨拶をされていました。その時、先生が私達に「良かったね」と安心した表情をされていました。しかし、病院周囲の人々は、「あの病院に行くと思くなる」とか「死ぬげな」と色々な声が聞かれ、私達職員はすごくこの現状を知らない人達の言葉に涙が出ました。幹部の職員が「先生、これ以上重症を入れないで下さい」と、お願いされたが、先生は「何も心配するな」「困っている家族の人は、他の病院から全部断られている」「周囲の人が何を言っても俺は間違った事はしていない」「まあ、見とけ」「そう言っている人達も辰元病院に入れて下さい」と、来る日があるんだよ」と言われた。考えて見ますと、現在、この周辺の方々が、外来に来られたり、入院、入所されている。

だが、あの大変な時代を乗り越えられた事で、今も全職員で頑張っているのだらうと思います。

追悼文

厳しさの裏にある心の優しさ

辰元病院介護課長 渡邊 静

理事長がお呼びです、と聞いたなら何が何でもその手を止めて理事長室にかけ込んでいました。なぜなら、呼ばれて5分も待たせたら院内放送があり、イナズマと同時の雷が落ちていました。

「まあ、そこに座れ」ハアハアいいながら主語の無い質問を受けます。聞き返しの出来ない質問を、君はどう思うかの問いに速答しなければならぬ焦りとでいつも緊張しておりました。

ニコニコと笑って話をされる事は少なく、いつも厳しいお顔でした。時間に厳しく、短気で待つ事が出来ず、遅れない、待たせない、それは原則でした。計画された事は時間通りに実行しなければなりませんでした。何か事あるごとにピリピリしておりました。

社会状況の先読みが早く、福祉の先取りをしなが
ら、前へ前へ突進されて来たように思います。考え



理事長の自宅にあるドクター人形。
娘の裕子さんからの誕生日プレゼント

先生は、何があっても何を言われても、迷わず、諦めず、自分の考えを真直ぐ持ち続けられ、又、それを実行し、成功された方であったと思います。今後も、先生の教えを守り、全職員で協力し合い、全員の力で辰元病院、グループを築きあげていきたいと考えております。先生もそれを望んでいらっしゃると思います。

た事、ひらめいた事、思い立ったら絶対に意志を曲げず、後にも退かず、いつも強気だったように思います。それ等は形として実現されて来りました。形として現わされるのには、計算に鋭く、大数から小数に至る迄、合理的で無駄の無い答えが出されておりました。そして、目の前で暗算される、その早さにも驚いたものです。

先読みが早い、計算に強い、記憶力がすごい、そんな理事長の頭の中はどうなっているのだろう、見せていただきたいものだと上司と話した事がありました。

頭の中には数多くの引出しが用意され、諸々の情報がいっぱい詰め込まれており、古い事から新しい事、先読み資料等々いっぱい、いっぱい詰め込まれていたように思います。まるでコンピューターのようにも思えました。時々（コンピューターの事は詳

追悼文

秘書として身近に接して

信愛ホームデイケア長・相談員 橋口 勝彦

しくないけれど）ウイルスが侵入しようものなら、強気で削除されて、なかなか侵入出来なかったようです。

「この辰元の複合施設が、後々まで社会に役立つ地域に役立ってくれば僕はそれでいいんだよ」と言われていた言葉を思い出すたび、表面的には厳しく見えた理事長でしたが、その裏には広く大きい心の優しさがありました。福祉への深い思いが、今日の施設が形となって残ったのだと思います。亡くなられてみて、その偉大さを改めて感じます。

福祉への深い思いを持って突進されて来た理事長に頭の下がる思いでいっぱいです。又、その理事長を見守りながら支えて来られた裕生園園長に感謝申し上げます。

今後、益々の発展を願っています。



今から十数年前のある日、入社したばかりの私は理事長室の前を通りかかった。すると突然、「君は馬鹿かー」と大声で怒鳴る声が聞こえた。私はびっくりに立ち止まり、息を呑んで中の様子をうかがった。すると「やっと分かった？ハハハ」と、今度はその凄い笑い声が聞こえてきた。入社したばかりの私には何もわからなかったが、一緒にいた先輩が「また、理事長に怒られちよるわ」とサラッと言った。お医者さんでもあんなに怒ることがあるんだ。私は冷静さを装いつつ、心の中ではドキドキしながらそう思った。それから数年後、運命とは分からないもので、私は辰元理事長の秘書となり最も身近な立場でお叱りを受けるだけでなく、喜怒哀楽のありとあらゆるお姿を見させていただきながら、多くの事を学ばせていただいた。

私の知る初期の頃の理事長は、物静かなようでした。

慮深いような、よく分からない存在だった。近くで接することもほとんど無かったし、白衣を着て歩かれるお姿を遠くから眺める程度だった。ただ何か近寄りがない存在だったのは間違いない。当時の上司からは、「理事長は、辰元病院を周辺のどの病院よりも大きく且つしっかりした病院にするため日々頑張っておられる」と聞かされた。つまり、理事長にとって回りの病院は、全てライバルであり敵の城のようなものであった。こうした意識で先陣の指揮を執られる理事長のお姿は、まるで戦乱の世を武力で統一し、近隣のどの敵軍から攻められても、ビクともしない強い領土を築こうとした織田信長そのものだった。

信長といえば家臣から大変恐れられた武将だったが、理事長も職員から大変恐れられた方だった。どこの誰よりも戦略的で計算高く、竹を割った性格は

曖昧さや弱気な姿勢を極端に嫌われた。それ故、理事長室に呼ばれると職員のうち誰かが青ざめた。叱り方も中途半端な叱り方は決してされず真剣そのものだった。まるで野生のトラが、牙をむき出して吠えながら飛びかかって来るような恐ろしいものだった。私も何度となく叱られた。今が信長の時代だったら、間違いなく切腹だったろうと思う事が何回もあった。私はその度、この時代に生まれて本当によかったと心から思った。ただ、当時の理事長に言わせれば、「辰元病院の回りにはまだライバル病院がたくさんあるのに、貴様のその平和ボケした態度はなんだ」と私を叱咤激励されたのだと思う。とにかく、今思い返しても背筋がピンと伸びてしまう。

怒られる時とは対照的に、嬉しいときの表現もダイナミックな方だった。なかでも理事長の笑顔は素晴らしかった。裏表の全くない方だったので、純粹に心の底から「嬉しい」という気持ち溢れた少年のような笑顔をされていた。ともあれ、当時の理事長は近寄りたいたいお方であり、誰よりも恐ろしいお方であったが、どこか憎めないお人柄をされていた。しばらくして理事長は、現在の敷地に病院本館・

れない性格をされていた。それどころか、困難であればあるほど闘志を燃やされた。つまり、どんなことがあっても自分がやると決めたことは、必ずやり通す方だった。そして、このころの理事長は、以前のように勇猛果敢に突き進まれるだけでなく、より大きな規模での採算性を考えておられた。医者としての見栄とかプライドには全く左右されず、とにかく損になることは絶対にされない、収入と支出のバランスを絶対に見失わない方だった。また、病院のことを「本丸」、その他の施設は全て「出城」と言われ、本丸である病院が経営的にしっかりしてこそ、回りの施設も安定するという哲学を常に持つておられた。その一方で、幹部や職員に対しては、必ず自分の病院・施設を守ってくれと信じておられたので、様々なイベントを組んでは部下達の慰労の場をもたれた。数年が経って、病院周辺の施設が全て完成すると、県下でも屈指の複合施設を一度は見学したいという人たちが数多く訪れるようになった。見学に来られた人たちは、敷地の広さと施設の大きさにびっくりされ、創設者である理事長に敬意を表した。理事長は自ら全施設を案内され、嬉しそうにここに至るま

新館・老健施設と大きな建物を一気に建てられ、更にケアハウス、グループホームなど6000坪の敷地がいっぱいになる勢いで新しい施設を次々に建てられた。この頃になると県下でも屈指の複合施設となり、押しも押されぬ辰元グループとなった。つまり戦国の大大名となられたのである。そして、いっしか理事長の意識は領土拡張から天下統一に向かっていくようになられた。つまり、織田信長から豊臣秀吉へと変わられたのである。

そして戦いの場合は、高岡町から宮崎市へと拡大していった。言い換えれば、高岡周辺の医療・介護から宮崎市全体の医療・介護をを考えていかれるようになる。宮崎市には大きな病院・施設がたくさんある。それらは全て理事長にとってはライバルであり、そこ以上になることが新しい目標となった。そして、宮崎市内に立派な施設を建設することに集中され心血を注がれた。その様な意識の中で、最初に建てられたのがグジブランドだった。

当時はまだ高岡町は東諸県郡に属しており、市内に新しい施設を建てるにあたっては様々な困難があった。しかし、それらの困難に対しては決して妥協さ

での思いと苦勞を語られた。そのお姿は、まさに戦乱の世を終わらせ万民が驚く金色の大坂城を築いた豊臣秀吉そのものであった。

それから数年が経ち、昭和、平成を駆け足で走ってこられた理事長も、お体が少しずつ悪くなられた。そして、これ以上のグループ拡張という意識は少しずつ薄れていかれた。ただ、ご自分は死ぬまで現役の医者として戦い続けるという強い気構えを持たれた方だったので、「自分が看病されるときは死ぬとき」とよく言われていた。

死ぬまで現役にこだわる理事長を、圭子園長は陰の力で支えつつ次の時代への橋渡しをされた。御長男の信先生が宮崎医大に勤務されておられる時から、多くのご苦勞と努力をされながら理事長の頑固な想いを少しずつ和らげほぐしつつ準備された。そして、その想いと行動と時の判断は見事だった。まるで混乱する幕末に、無血で江戸城引渡しを成功させた陰の功労者「篤姫」の様であった。

初めは「まだまだ自分がやるんだ」と言われていた理事長も、後では「今は、全部息子に任せています。私は暇です」と周囲の人に言われるようになった。

追悼文

院長と共に歩んだ日々

《昭和五十三年 面接：院長、園長、丸田婦長》

院長「君は寮母、調理、どっちを選ぶか」

私「8月中旬頃、前の道路を通るとき、何か建物が出来つつある、トイレの掃除でもないだろうか、と思ったのです」

院長「そうか。裕生園では寮母と呼ぶ。病院ではヘルパーと呼ぶことにする。じゃ、君はヘルパーをやってみるか」

とおっしゃった。

院長「病院は日給だよ。給料について何か」

私「農家のおばさんですからさっぱり分かりません。この仕事が私に出来るかどうかも分かりませんし、私を使ってみてから決めて下さい。人に出て来て私に出来ない事はないとは思いますが…」

《昭和五十三年十一月三日 初出勤》

そして、そう言われながらあの何ともいえない素晴らしい笑顔をされていた。

晩年の理事長は、いつも満足そうでどことなく安堵されたご様子だった。そのお姿はまさしく、あの関ヶ原の合戦に勝利して天下泰平の世をうち立て、江戸幕府を長男秀忠に継承させた名将・徳川家康そのものだった。江戸幕府は、子孫達の活躍で約三百年間続く事になるが、辰元グループも必ずそうなると思った。

二〇〇九年六月二十六日。昭和の巨人・辰元忠理事長が息を引き取られた。私は、その瞬間まで一緒に過ごさせていただいた。そして、理事長の秘書を七年間させてもらった事に感謝した。

最後に、理事長の意思と功績は、これからも多くの方によって末永く引き継がれていく事を、心からお祈りいたします。

本当にありがとうございました。



平成 21 年 4 月 10 日、屋久島に行くフェリーの船内にて
(左から橋口秘書課長、理事長、宮内薫氏)

元辰元病院介護部長

平田 時子

坂元、中村、平田、三名から出発した。先ず裕生園で三日間ずつの実習を受ける。昼食ものを通らず、寮母さん達が、「ハイ、お茶ですよ、おやつですよ」…親切にして下さるのに、カチコチと全身が緊張で…三日間終了して本場のクリニックへ帰ったら、我が家に帰った気分になり、「さあ、頑張るよ」と、三人で腕をまくった。

- ① 先ずはベッド入れ込み（ナースの指導を受ける）
- ② オムツ縫い（丸田婦長の指導による）
- ③ 園長に勤務表頂き、目にした（早出7時、遅出13時）

外に何も無い。

7時の早出は6時に出ないと一人で心配で、三人とも早く出勤していた。それでも楽しかった。屋根の下で雨にも濡れず、何と幸せな職場だろう。三人口を揃えて喜んでいた。

※喜んでるのは、つかの間

やがて患者さんが次々と入院され、今日も、また今日も：寝たきりの患者さんばかりでした。

ナース「ヘルパーさん、入院ですよ」「はい」

担架を持って階段を駆け降りる。中村さんと左右に立って手を背の下にさっと入れ、二人の手をしっかりと握り合せて立った。ズタズターっと、褥瘡の膿が流れ落ちた：が、そのまま二階の部屋へ上がりベッドに：大きな褥瘡。骨が見えた。新聞がべったり：可哀想で涙した。

びっくりしてる間もなく、次々と入室は増加。立ってる間もなく、降りたり上がったり、大忙しの日々となったが、三人のうち一人が退職して二人になり、困った時、一人また一人とヘルパーも増えていった。

〇〇ちゃん、〇〇ちゃん、と呼んでるところに

院長「何が、ちゃん、だ！ ちゃん呼びはいかん！」と大声で怒られました。恥ずかしいやら怖いやらで、〇〇さんと呼ぶようになった。

《走るヘルパー》

忙しさのあまり、走り回っていた。そこへ園長の

いる。今の工事が終るやいなや、またまた音が歌い出す。先生の一生、音は消えないだろうと思ひ、音のない病院なんて淋しい位になってしまった。今は何の音が歌っているでしょうか。

園長「次々と継ぎ足し継ぎ足しじゃなく、一面に整地してデーンと作つたらいいのに」

院長「借金してまで作れん。お前が口出しするな」

どちらの意見も素晴らしい事に感心して聞いた。職員の給料の件も考えられ慎重に行動されているように思わされた。

院長「近い将来、ヘルパーが三十人になるんだよ」

それにびっくりしたのに何と三十、四十、五十、六十、七十：医療サービスの時代、二対一となり、四十代、五十代の方達が次々と入社され、ゴルフ場から定年者も入社されて来た。院長は大満足の様でした。「七十歳、八十歳でも元気な人なら声かけするように」と、困った事も多かった。声かけも簡単ではなかった。

今、世界が一つになり、中国、韓国、〇〇と、日本に入国され介護の勉強されていますが、院長は三十年前からこの事は話され、「フィリピンの女性を

目が光った。

園長「なぜ走ってるの。走る所ではありません。見苦しいでしょう。気をつけるのよ」

私「はい、申し訳ございません」

それからは、ある人が「園長がいらっしゃったですよ」とおしえると、ハツとして歩く。園長が裕生園へ帰られたら、私達は又走っていた。

院長、園長。今になって思います、私の教育にどれ程苦勞された事だろうと。

申し訳なく反省して居ますが、取り返しの出来る事ではありません。

さて、患者さんに対してヘルパーも三人、五人、七人、十人増員され、病室も少しづつ増築され、院長も若く元気いっぱい、設計も御自分で一病棟、二病棟、三病棟、本館、新館、信愛園、管理棟：最初の増築から音のしない日がなく、

私「先生、いつになったら音が止まりますか」

院長「これが最後だよ」

私「ああ、良かった」とはつかの間。

院長室。設計図に向かって居る院長の目が光って

連れて来るが、どう思うか。グッドアイデアだろうと、先見の明、素晴らしい院長でしたね。

先生の頭は雲の上、私の頭は地の中のミミズですね。先生がイライラされるのは私のせいですよ：山ほど会話したものでした。

《院長より礼あり。》

院長「今、〇〇地区に居る。町のヘルパーが二人いるが、母親がむずかしく手がつけられない状態だ。早く急いで来い。事務の男を迎えに帰す」

さあ、誰と行こう。渡邊、丸田婦長に声をかけた。古い毛布、タオルケット、バスタオル、いっぱい車に載せた。現場に着いた。院長、ナース一人、事務男子二人、町ヘルパー二人。皆さんがバラバラに外に立っていた。何だろうと思いつつ家に入った。「ばあちゃんが寄せ付けないよ」と耳に入ったが、私達「おばあちゃん、こんにちは」

声かけながら入って行き：

直寝型で体半分が腐つてると見た。黒い、小さい、足がついた虫が顔の上を歩き廻ってる。五〜七匹は目にした。母が口から食を押し込む様子。食べると

出る、出るとちり紙を押し込む。それが足の指先まで。月日がどれだけ続いているかは予想つかない。

「さあ、始めるよ」と、三人で両脇に毛布、布団等、少しずつ頭から足の先まで押し込んでみた。何とか出来上がり、担架に持ち込んだ。

汚いと思うより、「町のヘルパーさん、何してたんだろう」心が怒り出した。だが、何も口に出さず、無言で病院に向かった。浴室に直行し、シャワーで洗い上げ、三病棟の個室へ。後はナースの方達へ：流れて行った。きれいな娘さんだった。

三人ともに清潔にして消毒済ませ、ほっと一息した時、

渡邊さん「〇〇さん、食事するんですか？」

私「今日ばかりは食がありません」と言った。

渡邊さん「ああ、良かった。食べるよと言ったらどうしようかと思つた。じゃあ、コーヒーだけでも」と言つて、缶コーヒーを頂いた。とってもおいしいコーヒーだった。

私「院長先生、大変お疲れ様でございました。この様な家族が他にもいらつしゃるものでしょうか。私にとつて、どこの学校にも勝る程の実習、勉強

長は園長に負けじとばかりにゴミ一つから注意され、朝から帰るまで気の休まる日がなかった。

《週3回入浴（院長命令）》

院長「よそに出来てうちに出来ん事はない。やれ一夜寝ずに考え、表を作つた。

私「出来ない事はないですが、他の事は何も出来ません」

院長「バカか、君は。〇〇〇やるんだよ」
いつの日か、またまた助け舟。

園長「あなたは3回入浴してるの？」
私「はい」

園長「やめなさい。2回でもいいのよ」
※院長に指示された事は必ず一回は実行したものだつた。

《もったいない》

・勤務表：カレンダーの裏紙を利用して作つた。私の定年まで。しかし、ちょうど時世は一変した。
・メモ用紙もチラシ等で、ひもにつるして使用
・無圧布団の利用：退院の家族が「処分して下さい」

強させて頂きました事、深く深く感謝しましてお礼申し上げます」

院長「うん、良かった良かった。役場に行つて町長にどなってやったよ」

ハイ呑め、と言つて一杯のお茶をこちそうになり：残りの半日を又知らぬうちに走つていた。いかにいかに。園長に見つかったら又目玉だあ〜

《散歩》

院長、事務長、先頭になって散歩。裕生園の裏を通つて中尾の道に降りて道路に向かい一回りする。ヘルパーだけでなく全職員でした。一人が月に十回という表が朝礼場の前に貼り付けてあり、みんな目の色を変えて大変だ大変だ。達していない人は勤務終わつてから散歩。涙落とした人もいた。昔はバラス道の所もあり、バックでないと車椅子が動かず、一ヶ所は補助係を置いた。

他施設に研修に行かんでも裕生園を見習えばいい、とおっしゃつたが、県外に二ヶ所行つてみた。が、清潔感裕生園に勝る所はなかった。病院の方も院

それを強酸性水で消毒して、百円のカバーを買つて作り上げ、患者さんに使用した。何百も作つた。今となつては恥ずかしい品。

院長は全館を廻られ、不必要な電灯を消される。ずっと続けられていた。ある日、

院長「君は電気係になれ」
私「はい」

その場返事しないと大変だから。戦時中の私にピタシと思われたのでしょうか。実はこの役、三拍子。患者さん、職員、電気。ほか色々全てに目配りする事は出来た。

今は世界中が「もったいない」という言葉を発している。

院長「君は今、前の道路を歩いてみよ」

私「何のために？」
院長「いいから行け」

一人で歩いた。一円玉も落ちていない。
院長室に入る。

院長「何か気付いたか」
私「分かりません」

院長「バカか、君は。屋上の干物は何だ。丸見えじゃないか、バカ」

私「でも、干す場所がないんですよ」

その日のうちに事務男性は干し台を買って来て、屋上に持ち上げた。屋上まで何年走って上がった事だろう。若かったなあ〜 なつかしい。

《院長と当直》

朝、出勤と同時に呼ばれ

ナース「怒ってるよ。大変だよ」

何も分からないままに院長室に入った。いきなり、

院長「君は今夜当直しろ。オレがどんな思いをしたか、

君も同じように泊まれ」

私「どうされたのですか」

院長「ゆうべの当直者が布団も出さずに寒い夜を過

ごした。どんな教育をしとるのか」

私「申し訳ございません。さっそく聞いてみます」

ヘルパー全員朝礼の場で申し送り済んでから、本人と渡邊、中武、私の四人で院長室に行き、全てを

私「いや、私は泊まる」

院長もいっしょにいて、

院長「事務長も入れ」とおっしゃったが、

事務長「いや、帰ります」と言って帰られた。

院長はヘルパー事務所で夜明けまで楽しそうにしゃべられた。その日は一日中勤務しました。

私は院長が怒りたくなる顔をしてるんでしょうね。

渡邊さんといつも話していました。

「渡邊さんを怒るようなことはないですよ。貴女は心が丸いし、やさしいからねー」

昼食も十分そこそこで、外に出て動いていました。足が止まるのは我が家で寝る時だけでした。枕元に電話、メモ。夜中でも電話するように、と全員に約束してました。朝になっての勤務交替は絶対困るから、と三百六十五日必ず受けてました。一日だって作業が止まる事なく続けました。

院長ご夫妻様には本当に本当に良くして頂きました。厳しさは仕事でしたから、でもやさしさも山ほどあふれて涙する事も多かった。退職して十年にな

話し本人が謝った。そしたら何と、

院長「いいんだよ、いいんだよ」

やさしいのにびつくり。三人が出た後、

私「先生、何で本人にはやさしいのですか」

院長「若いのに謝りに来てくれるなんて可愛いじゃないか」

ないか」

私「じゃなく、本人達に厳しく注意して下さらないと：」がっかりだった。

光辰で院長が私をガンガン怒鳴られている。

信先生「お父さん、ここまで来て〇〇さんに失礼じゃ

ないですか」

私「若先生、こんな事、子守唄ぐらいですよ。気に

なさらなくて下さい。有り難うございます」

院長「ハイハイ、たっぶり食ってくれよ」

肩をポン。私の横にはいつも渡邊さん。

追伸 院長との当直については、U事務長にもとばかりがかかり、さんざん事務長に頭を下げた。夜9時の見回りをして事務長がヘルパーの事務所に来て、事務長「〇〇さん、帰りましょうよ」

りますが、楽しかった事ばかり思い出します。

字が見えないでしょう。足は左、手は右が悪く、精一杯きれいに書いたのですよ。次々にあれもこれも思い出され、一冊の本になりそうで、もうこの辺でやめます。右手が痛くなりました。整理して半分にしました。この内から一個ぐらい役になりますか。自分で書いたのに読めない所いっぱいですが、もう書き直しも出来ません。お許し下さい。

辰元忠前理事長を偲んで

辰元病院看護師長 小畑 初美

平成二十一年六月二十六日夜夜状態急変の連絡を受け、早朝突然の訃報の知らせに驚き、半年が過ぎる今日でもまだ信じられない気持ちです。それ程、前理事長の存在は大きいものです。当日の二十六日は、検査入院されていた古賀総合病院を退院して、この辰元病院へ帰って来られる予定になっており、前理事長の部屋にベッドの準備をして帰りを待っていた日でした。

今回、追悼の文集を寄せるにあたり、思い出が多くありすぎて、浮かんでは消え浮かんでは消えと走馬灯の如く流れて行きます。三日三晩では語り尽くせないほど数多くの思い出を、入職から今日に至るまで紐解いてみようと思います。

昭和六十一年十一月中旬、知人の紹介で面接に伺いました。当時の名称は高岡病院であり、前理事長との初めての出会いでした。当時、前理事長も若かつ

たですが私も三十歳半ばで、色々と前勤務病院の事を聞かれました。他には何を聞かれたのか覚えていませんが、とにかく緊張していて面接が終わると身体がガチガチに固まって居た事を覚えています。

それから私の勤務が始まりました。「朱に交われば赤くなる」とは言いますが、それまで経験して来た事、システムのギャップに戸惑いを感じた事も多くあり、悩みや葛藤との戦いでした。高岡病院が介護強化病院として、また、老人医療が変化を遂げようとする中、五年間の勤務を経て平成三年十二月末をもって一旦退職を致しました。

退職後に高岡病院から現在の辰元病院へと改名され、在職中は福岡のホスピス病院や老人保健施設の見学も一緒にさせて頂きました。前理事長は先見の明を持っておられ、今後の老人医療が大きく変わることを予め思い描いておられたのだと思います。

退職後七年間は、他の医療機関で勉強させて頂き、

平成十一年二月一日に再就職致しました。その時は現在の新館病棟が落成しており、前理事長の念願のひとつだった緩和ケア病棟としての準備が進んでいました。私は、本来は緩和ケア病棟が希望でしたが、その時の緩和ケア病棟の看護師責任者と私の性格が合わないだろうとの前理事長のご配慮から一病棟への配属となりました。これは後になって、あるスタッフから聞いた話であったのですが、前理事長のご配慮をととても嬉しく思いました。

とにかく前理事長は怖いイメージが大きかったですが、その反面びっくりするような優しさも持っておられました。それに加えて色々な構想も持っておられ、前理事長の考えに振り回されたことも多く、ついて行くのが精一杯でした。それだけに前理事長との思い出は実に数多く残っています。

では、前理事長との思い出を紐解いてみましょう。

(病棟回診)

一言で言えば「とにかく忙しい」に尽きます。前理事長の話に相槌をうちながら、話の合間に患者様

の状態を報告し指示をもらうのですが、そのタイミングが非常に難しいのです。本当に息をするのを忘れるくらい忙しい回診でした。回診についている看護師は忙しく走り回っていたのを覚えています。

(定期処方)

これもまた忙しく早く、前理事長が記入し終わったカルテが正に「手裏剣の如く」宙に舞うのです。とにかくカルテを拾い集めるのに必死なのですが、そのタイミングを間違えると頭に命中する事もあり、大変痛い思いを致しました。今となつては笑い話になっておりますが、当時は真剣に取り組んでおり、「わざと狙っているのでは!？」と思つた程でした。また、カルテの内容に不具合があると直ぐに担当者が呼ばれ、注意を受けました。耳にたこが出来るくらい何度も繰り返し注意を受けたことが鮮明に頭に残っています。

(慰安旅行)

毎年の六月終わりと七月初めの土曜日で一泊二日の慰安旅行が組まれていました。二班に分かれて行

くのですが、これもまた忙しいスケジュールの旅
行でした。そんな旅行の一番の思い出は、なんと言っ
てもバスの中で、前理事長の十八番である『昂』を
聴けたことです。二班目の旅行では、前理事長はバ
スには乗られず、ご自分の車で来られて夕食を共に
されておりました。前理事長は夕食宴会の時間には
必ず来られ、みんなと楽しい時間を過ごされており
ました。時間にも非常に厳しい方でありました。

鹿児島の指宿の旅行の時には、夕方に前理事長が
到着された際、玄関に出迎えがいなかった事にご立
腹された事もありました。言い訳をさせて頂きます
と、前述のように時間には非常に厳しい方でしたか
ら、私たちはとにかく「夕食の時間に遅れては大
事だ」と宴会場に集合することばかりを気にしてい
て、「先生のお出迎え」を考える余裕が無かったので
す。そのお蔭で宴会は、前理事長の顔色を伺いなが
ら楽しむ羽目になったのですが、それもまた良い思
い出のひとつとなっています。鹿児島旅行は、故・
中村先生との最後の旅行となり、翌年、長崎雲仙旅
行の帰りのフェリーの船上で中村先生を偲んで海に
花束を手向けられました。中村先生の突然の訃報は、

（カラオケ大会）

前理事長の自宅で毎年八月焼肉とカラオケ大会が
催されました。全職員参加で、焼肉を食べながら各
セクション代表による喉自慢大会を楽しみました。
それで優勝した人は、十一月の高岡の祭りの職場カ
ラオケ大会に出場していました。

（職員の誕生会）

以前は、定期的に誕生会を催して下さいました。
もちろんプレゼント付きです。毎年、職員が増え続
けたことで誕生会は無くなりましたが、前理事長の
職員に対する心遣いが嬉しい出来事でした。

（霧島別荘）

数年前まで、七月～八月にかけて別荘行きが計画
されてきました。前理事長の愛車のヴィッツに乗っ
て、ただひたすら霧島に向けて車は走ります。車中
はかすかに聞こえるラジオの声を聞きながら、誰一
人と口を開く人はいないので。別荘へ到着すると
次々と役割分担が待っています。女性は夜の夕食の
準備に忙しく、男性は別荘周囲の草払い、温泉の準備、

前理事長にとっても大きな衝撃であったことと思
います。

（忘年会）

毎年十二月初め、辰元グループの忘年会が開かれ
ます。以前は、高岡や国富の料亭で開催されていま
したが、年々職員が増えていった為、会場はグルー
プ内のホールに変わりました。以前は、各セクショ
ンからの余興でしたが、数年前からは前理事長が考
えられた五つのチームに分かれての余興をするよう
になりました。毎年何をするか？頭を悩ませました。

数年前、看護チームの内容が、「保育園児よりレベ
ルが低い」とすごく怒られました。その罰として、
保育園児を招待して、園児の前で踊らされた事もあ
りました。

また、ある時には看護チーム（よれよれ組）の出
し物で、「はいのしめなわ（姥捨て山）」の劇をした時、
涙を流されていたとの逸話も聞いたことがあります。
た。

焼肉の炭火の準備と忙しく動きます。前理事長と最
後に別荘へ行った時、炊飯器に米を仕掛けたら炊飯
器が壊れていてご飯が炊けずに凄く慌てた事を思い
出します。怒られる事を覚悟で炊飯器の事を話した
ら、前理事長も車に乗ってコンビニにおにぎりを買
いに行き、何とか焼肉の時間に間に合った事があり
ました。夕食は、焼肉とビール三本、おにぎり、味
噌汁とメニューも決まっています。前理事長は、自
分が食べ終わると「ゆっくりして下さい」と言われ
部屋へ帰られます。でもその後がまた大変です。待
たせると機嫌が悪くなるので急いで片付けを済ませ
て部屋へ行き、前理事長が行かれた旅行のビデオを
見たりしながら時間を過ごしました。

他にも前理事長との思い出は数多くありますが、
よく怒られ、よく泣きました。前理事長の言われる
事に納得いかず悔し涙を流し、くじけそうになった
事もありました。でも今の私があるのは、ここまで
私に色々な教えを頂いた事、そして導いて下さった
おかげだと感謝しています。

以前は、世間の色々な風評も聞かれた時期もあり
ましたが、それでも負ける事なくご自分が思い描か

れている辰元グループ、複合施設の構想を実現されました。前理事長は、「人生とはチャレンジしてみる」と本の中に書かれておりますが、その通り常にチャレンジ精神で走り抜けてこられたのではないかと思います。

長く勤めている看護師は口をそろえて「怖かったよね」と言います。それでも長く勤める事が出来るのは、前理事長の優しく前向きな人柄を知っているからだと思います。

色んな事に厳しい反面、時折見せられる優しい恵比寿様のような笑顔が今でも浮かんできます。

数年前から体調が思わしくなく、辛い時期もあったと思います。晩年は好きな屋久島や鹿児島に幾度となく旅され、今思うと前理事長なりに思い残す事が無いようにしたかったのではないかなと感じています。

前理事長との思い出を紐解いて来ました。前理事長もまだ沢山の心残りがあつたと思いますが、残った私たち職員が悲しみをこらえて前理事長の遺志や思いを心に感じながら一丸となってこの辰元グループの発展の為に頑張ります。

追悼文

すべてに熱心だった理事長

辰元病院病棟主任 山口 好子

理事長との最初の出会いは、辰元病院に入職の面接でした。十八年前の事ですが、つい最近の様に思います。当時は理事長も若くて、辰元病院のこれからの福祉にかけての思いを話して下さいました。私が入職した年は、病院が「まるめ」定額制度になる大きな転換期でした。入院されている患者様を過重な医療よりも適正医療にもどすことで老人にとっての人間の医療、真心のこもった会話、ケアを重視して手をさしのべてほしいと話され、感動しました。

当時は全病棟の回診、理事長の歩く足の速さに私達看護師は、必死でついていきました。一人一人に声をかけられて、笑顔で接して、手を取って握手もされました。

病院の仕事の内容も色々な「係」に分担されていきました。全部の係は月末にチェックをして理事長へ報告にいきました。カルテ記入の仕方、血圧測定さ

これからも、遠い空からずっと私たちを見守って下さる事と信じています。
心からご冥福をお祈りいたしますと共に、私の追悼文とさせていただきます。

れているか？印鑑の押す位置がちがうとやり直していました。理事長が熱心に指導されたので、今でも私達は「係」の仕事を確実に守っています。学校、保育園、営林署の健診、高岡町の地域の早朝健診は、理事長の運転する車で行っていました。助手席に座って声かけられると、胸ドキドキ、緊張していた事を思い出します。

職員の福利厚生も充実していました。毎年の慰安旅行、宴会ではカラオケで歌をよく聞いてました。もう一度聞きたいです。以前は誕生会、自宅でのカラオケ大会、多くの催しあり、思い出を作っていました。忘年会は、各部署にて演芸を出して、出し物の内容には厳しかったです。ある年、私達看護師の部で内容が悪くて、理事長へ呼ばれて、保育園児よりもへたくそだと言われて、保育園児の前で踊ったのがなつかしく思います。内容が充実するように

いつだったか二人で焼き肉を食べに行ったことがある。運転手だった私にビールを何度となく勧められるのを断るのが大変だった。そんな思い出はエピソードとして残っていく。集めたらキリがないが、やはり一番心に残っているものがある。

辰元に勤めて十二年。始めからありがたいことを目をかけていただいております、側にいる事も多かった。元気な頃はゴルフに行ったり、韓国旅行に同行もさせてもらった。どこに行っても理事長は理事長だなあと感じたものだった。

大きな存在だった。理事長を一言で言うならそんな思いがする。

追悼文

大きな存在

辰元病院放射線科技師

原口 正人

私自身の結婚式。職場同士の結婚ということもあり、理事長・園長に仲人をお願いした。本当に快く引き受けてくださり、式は滞りなく進んでいった。披露宴での仲人挨拶で、その頃はすでに視力の低下や体調も芳しくなくなってきたこともあり、正直不安でもあった。ところが、メモを見ることもなく、私と（詳しくは見知っていないであろう）妻の生い立ちを見事に話してくださったのである。

これには感動と共に尊敬をも感じたものだった。この人は本当にこんな立場になるための人物なのだ、と。沢山のことを手がけ、成功を収めてきた理事長。まだまだ夢の途中ではなかったのだろうか。

理事長の見守り続けられる中、これからの辰元グループを支える一員として恥じないよう努力したいと改めて思い直す。

と、よれよれ組の名前をもらって、毎年頑張りました。京都の舞妓さんを出し物にしようと、介護の方と、理事長室にて言葉の特訓もしました。理事長の熱心さに、私もひきこまれていきました。理事長は、今年は写真で参加でしたので、淋しかったです。忘年会の終了後は理事長の評価がないと、淋しい思いがありました。これからは、あの世から評価されて手抜きすると怒られそうです。

病院の本館に理事長室がありましたので毎日出勤され、私達は毎日お会いしていました。今でも部屋から出てこられて、呼ばれるのではないかと思う日があります。本館病棟の照明、音楽（有線）が声が小さいと、こまめに注意されていたので、今でもチェックしています。

今まで指導された事、大事にして、思い出を大切にしていきたいです。



理事長先生を悼む

理事長先生、風の様に行って行かれ本当に残念でなりません。今まで、先生から受けて来た厳しかつたこと、励ましてもらったことの全てがよき教訓となり思い出となっています。以前の私は、よく風邪をひいて咳をしながら歩くことがありました。そんな時、先生は必ず声を掛けてくださり、「きつそうだね。薬をあげるよ」と言って診察して下さいました。後日には、「もう大丈夫？」と優しい声を掛けて下さいました。本当に人情味のある優しい先生でした。また、子供の教育で悩んでいる時も、「頑張ってるね」と、何度も励まして下さいました。その一言でどんなに励まされたか知れません。

私の中の最も印象的な思い出は、やはり理事長先生が一番輝いていた頃、将来の夢やアイデアをこぼれんばかりの嬉しそうな笑顔で語られていた事です。今でもその頃の様子をはつきりと思ひ出します。

信愛ホーム介護主任 山本 邦子

そして、その夢を全て実現されて、素晴らしい複合施設を築かれました。一職員としてその過程を見て来たことを大変嬉しく誇りに思います。事実、これらの施設を通してどれだけの高齢者とその家族が安心して暮らしていることでしょうか。

また、私達職員も安心して働ける沢山の雇用場が与えられ、結局は家族みんなが幸せに暮らせています。そのことを思うと理事長先生が命をかけてこられた老人福祉、その理念をしっかりと胸に刻み、受け継いでいきたいと思えます。

理事長先生、本当に感謝の気持ちで一杯です。今まで本当に有り難うございました。

追悼文

私が介護を志すきっかけは、父が脳血栓で倒れ、二年余り母と看病した事が始まりでした。縁があったて入職し、上司や諸先輩からの教えを受けた事が思い出されます。

当時、建物は一病棟と二病棟があり、病棟での受け持ちも一人一部屋の時代でした。みんな競争で患者様のお世話をし、部屋もピカピカに磨いたものです。そんな中、理事長先生は、毎日の朝礼の中で将来の夢を熱く私達職員に話をされ聞かせて下さいましたが、想像もできずにいました。院長室は二病棟にあり入室すると、机の横に自分で設計された図面が引かれてあり、どんな施設が出来上がるのか、心がときめいたものでした。二病棟は今でこそスロープがあります、風呂のある日は患者様を両脇、後からと、三人がかりで抱き二階の病室迄かけ上る、といった人海戦術です。今考えると、よくやってたな、

辰元病院介護主任 矢野 房子

と思います。先生も職員の頑張りを眼の当りにされ、時折、ねぎらいの言葉をかけて下さいました。仕事はきつかったのですが、先生の夢を励みとし、皆頑張っていました。

やがて管理棟が出来上りました。三病棟と呼び、入院患者様を受け入れる病棟として、三日間御家族に泊っていただき、私達職員の仕事ぶりを見て知ってもらい、安心して預けていただく。先生の、先の先まで読んだ考え方を、上司から聞き感心しました。

次に、本館、老健と完成し、私達職員も嬉しかったですが、先生が一番嬉しかったんじゃないでしょうか。老健には毎日の様に足を運ばれ、見て回られた事を覚えております。そして新館、ケアハウス、グジブランド、きんかん、と施設が出来ると共に患者様、職員数も増え続けていきました。今も変わらないのは忘年会での余興です。課題を与え、知恵を出

追悼文

「ここが一番いいヨ」

十一年ぐらい前になるでしょうか。前理事長・園長のお知り合いを通じ辰元病院を紹介してもらい、前理事長・園長の面接を受ける事になり、翌日、一日実習し、その後、前理事長室へ呼ばれ、「君が働く気があれば、がんばってくれ」と言われ、私は「是非よろしくお願いします」と返事をした事が、つい最近の様に思え、緊張していた自分を覚えています。それから入職し思い出に残っている事と言えば、霧島へ二回程一緒に一緒させてもらった事があり、最初の時は緊張の連続で、焼肉がのどに通らなかつた事を覚えています。二回目霧島行きの際は、それ程緊張せず、ビデオを見たり、他職員と会話し楽しく過ごせました。

体調を崩されてからは、何回かドライブをご一緒したり、また、お風呂を楽しみにされてましたので、ゆっくりお湯に入ってもらったり、時には、ご自宅

し考えさせる。職員間のチームワークとコミュニケーション作りにもなり、年末恒例行事として定着し、楽しみの一つになっています。先生は厳しい方、と聞いていましたが、一つの事を貫き通された、信念を持った方でした。よく世界旅行もされ、みやげ話を披露下さいました。

病院では当時、入社十年のごほうびとして香港、マカオ旅行に連れて行って下さいましたが、それも十二月、クリスマスツリーのイルミネーションの飾りや、にぎわい、世界一と言われるすばらしい香港の夜景が見せたいとの先生の計らいで、やさしさの一面が窺え、病院とは違う顔もみせて下さり、職員の心もほぐれ、日常の仕事からの解放感も味わう事ができました。

晩年は、男性職員の運転でドライブを楽しまれ、屋久島にもよく行かれてました。ひよんな事から、介護職員もお供する事になり、宮内社長、橋口課長、甲斐看護師さん、と共に同行した事が良い思い出となりました。又、新館での入浴を日課とされてから、介護職員との「ひととき」を持たれ、職員は緊張のしつぱなしでしたが、先生は湯舟につきり、目を閉じ何

を考慮しておられたか、今となっては知る由もありません。職員も先生を、雲の上の人から、身近な人と感じ触れ合えた事は良かったかな、と考えます。私自身、やりがいのある一生の仕事がみつけれられた事に、感謝しております。

先生、本当にお疲れ様でした。
そして、ありがとうございました。

辰元病院介護主任 杉尾 町子

へ訪ねた事も。でも気分がすぐれない時は、怒られた事もありましたが、最後に屋久島から帰られた時だったと思います。お風呂に入られ、気持ちよさそうだったので、「屋久島は、楽しかったですか」と尋ねたところ、笑顔で「ここが一番いいヨ」と言われたのです。私は、その時、「そうですか」と言った事をはっきり覚えています。この会話が最期になり、二日位してから入院されたと耳にし、びっくりしました。

いつも最後には、笑顔で「ありがとう」と、私達に感謝のお礼を言われていました。
ありがとうございました。

前理事長とは

信愛ホーム看護主任 駒山 道生

私は、国富が地元ではあるが、父の転勤により、今の場所に落ち着いたのは、中学入学からで、高校卒業迄の六年間のみで、卒業後は福岡の小倉で病院に勤めながら看護師資格取得、結婚し生活を送っていた。ほぼ十八年福岡に居たが、毎年宮崎に帰省する度に、辰元病院の茶色の建物を目にしながら帰っていた様に思う。自分が看護師であるから、当然どんな病院なのかは気になっていた。そして今、辰元病院に入職し、訪問看護を経て、信愛ホームで勤務し、六年が経とうとしている。その五年間の中で、前理事長の思い出を探す事は容易ではないが、少ない機会の中で、自分が思った事、感じた事を述べて行きたい。

まず、初めて前理事長を目の前にして話したのが、平成十六年の二月だったと思う。入職後の研修を終え、前理事長へ顔見せだった。優しい顔をし、「どこ

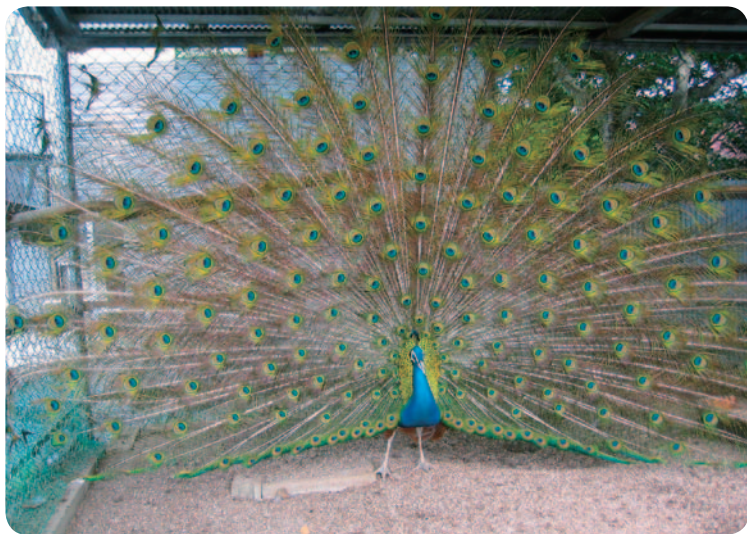
がいい？」と、「訪問看護でお願いします」と返事すると、「よし」と、短い会話だったが、なぜかホッとした。入職し勤務していると、いろいろな前理事長の話を耳にする事もある。自分の知っている前理事長は、体調を崩し、厳しさを見る事はなかったが、時に歩く姿を見ると、胸を張り堂々としていた様に思う。

二回目に直接面談したのは、訪問看護に二年半勤務した後、信愛ホームに配属となり、看護副主任の話があり、その時は、「どうだ」と聞かれ、「病院自体に勤めてなく、自分はまだまだだと思えます」と答えたが、「大丈夫だ」と云われ、今はその言葉を糧として頑張り、努力していている様に思う。しかし、前理事長は、徐々に体調を悪くされ、目にする自分達も辛く思っていた。そんな中、霧島の別荘に同行させてもらい、何もできなかったが、記憶に残る出

来事となった。その後は、直接話をするという機会はなかったが、最期まで屋久島へ数回行かれたり、『強い人だ。これだから、この辰元グループは大きくなったんだ』と実感した。

先見の明を持った前理事長。病院経営や事業を積極的に熱意に満ちた人柄で、前へ前へと進んでいかれたのでしょうか。今思う。一つ自分に残念な事は、その時期の前理事長に会いたかった。見たかった。

いつまでも前理事長の志を胸に、今後も努力していきたい。



辰元グループの敷地内で飼われているクジャク。理事長は鳥や動物がいて、音楽が流れる楽しいシルバーゾーン作りを目指していた。

先生との思い出

辰元病院営繕副主任 高橋 英敏

私が辰元病院へ入社したのは平成十三年二月七日でございます。

辰元前理事長先生（以下先生）とは入社してすぐから接する機会が多く、当初私の中の先生は短気でこわい存在でありました。仕事で先生に呼ばれ指示を頂くのですが、戸惑う事も多く、わからない事は橋口秘書課長に助言してもらいながら、スタートする毎日でした。先生は「いつでもいいよ」と言う言葉をよく使っていらっしゃいました。それを信じて二、三日後まで仕事をのばしている、「先日の件はどうなっているのか」と叱られ、先生からの仕事は何においても優先第一、すぐに片付けるようにしました。毎日、何事においても変化があり、正直今までの仕事と一八〇度違い、おもしろくともやりがいがあり、自分のもっているものを出す事ができました。辰元先生が私を採用してくださった事に感

謝しております。

先生の言葉でもう一つ思い出すが「アレ」です。先生の当番の時には理事長室で一緒にいる訳ですが、先生が「アレ」を持って来いと言われます。前もって橋口課長から「アレ」の種類は聞いているのですが、はたしてこの時の「アレ」は、また、この「アレ」は何なのか、先生の「アレ」を判断して仕事をさばっていくのに必死でした。月日がたち慣れてくると、話の流れから先生の「アレ」が何を意味しているのかがわかり、先生も私の仕事にやや満足していただけたのではと自負しております。

昼食の時はうどんは吉長、重の井、大盛うどん、カレーはCOO一番、ラーメンは栄養軒、王林とよくいろいろなところに連れて行っていただきました。またド食べるメニューは必ず決まっております。またドライブに行って車内での世間話も楽しかったです。

先生は厳しいお方でしたが、叱ってもその場だけで後で色々言われる事はなく、いつも「去る者は追わず、来る者は拒まず」と言われており、情け深いお方でした。



社会福祉法人信愛会職員より

- 宮田 トク子 氏
- 楠元 剛志 氏
- 北堀 志美子 氏
- 松浦 玉子 氏
- 川越 淳 氏
- 西薊 脩子 氏
- 入船 三代子 氏
- 長友 美紀 氏
- 柏田 沙代 氏
- 中岩 哲也 氏
- 甲斐 ミツ子 氏



前理事長先生を偲んで

ケアハウスシヤトル生活相談員 宮田 トク子

昭和五十三年三月、裕生園入職を希望して面接に行きました。その日、初めて理事長、園長にお会いしました。勿論、お二人共若くて、理事長先生は背が高くハンサムで格好良かったです。園長先生はとてもきれいな方で、その美しさに吃驚した事を覚えています。理事長、園長先生がさりげなく面談して下さった事、理事長が「和」を持って仕事をしなさいと優しく声掛けして下さった事に、私の緊張もしほぐれてうれしくなり、ホントに頑張らなければ、と自分自身に誓ったあの日の光景を思い出しました。

昭和五十三年四月、介護職として入職しましたが、其の年の十月には体調を崩して開院間もない高岡クリニックに職員第一号として入院しました。患者さんには、全ての方に対してとても優しい先生でしたので、私も約二ヶ月の入院中、主治医と患者という

立場で先生の優しい一面を又知る事が出来ました。

その後、介護職として当時の定年五十歳まで勤めさせて頂きました。当時はまだ資格制度もありませんでしたが、社会福祉主事、痴呆研など諸々の勉強を沢山させて頂きました。定年五十歳を目前にして有資格制度が出来ました。定年を間近に控えておりましたが、国家試験を受験させて頂き下さる事になりました。幸い介護福祉士の資格を取得できました。一旦、定年で退職しましたが、新たに再雇用して頂きまして現在に至っております。

平成八年、ケアハウスシヤトル開設に伴い、ケアハウスに異動になりました。先生がまだまだお元気な頃、私が園長先生と食事をしている休憩時間になると、理事長先生もシヤトルによく足を運んで下さる様になりました。そして色々な事を楽しく面白く話して下さい、先生自身も時には大きい声で笑いな

が楽しんでいらつしやる事も多かった様にありました。何時も先生が来られるとシヤトルも賑やかになり、今まで知らなかった先生の一面を又伺い知ることが出来たのも私の貴重な思い出になっております。

今は亡き理事長先生ですけど、私の気持ちの中では生きていらつしゃいます。

今日まで福祉の仕事に携わって参りまして、沢山の事を学ばせて頂き、私を育てて下さいました。ご厚情に深く感謝申し上げます。

最後に、昨年十二月、厚生労働大臣表彰を受けさせて頂きました事、ご報告させて頂きます。先生、ありがとうございます。



開設当時の裕生園の屋上には遊歩道があり、つつじの花や池を見ることができた（昭和52年）

辰元 忠前理事長を偲んで

たかおか居宅介護支援事業所管理者 楠元 剛志

辰元先生のことを今振り返ってみると、殆んど多くの方が思い描く先生像とは違った思いが心の中を駆け巡ります。つまり、豪快で人の言う事など聞かず「ひっとべ」とばかりに自分の信じた道をひたすら進むといったイメージを抱いているのではないのでしょうか。

しかし、私が三十年近く先生と接していく中で先生像は、とても慎重でいろいろな考えを職員にぶつけては注意深く職員を観察するといった場面が多かったと思います。特に晩年になればなる程そのことが強く感じられました。先生はとても繊細な感情を持ってはいてもそれを表にはなかなか出せない、少し「照れ屋」で「寂しがり屋」などところもあり、一人でいることがとても嫌で誰か側にいないと落ち着かない方でもあったのではないのでしょうか。また反面、とても戦略家でもあったと思います。

一番大きなイベントは「忘年会」です。この「忘年会」においても会場設営や景品の中身にいたる全てに自分の思いを詰め込まれました。また、「忘年会」に取引業者の方が来賓として発足当初から来られてはいましたが、年を重ねるごとに、県内でも著名な方も来られるようになり、「辰元グループ」の力を暗に知らしめる効果も考慮してのことではないかと考えるのですが。言わば、「現代の信長」といっても過言ではないと思います。この話を信長が聞いたら気を悪くするかもしれませんが、「うつけもの」と呼ばれた信長と「・・・」と言われた先生がどうしてもオーバースタップしてしまいます。「能ある鷹は爪を隠す」とよく言われますが、まさにそれをそのまま実践されたのではないかとつくづく思います。思い出すのは、憤怒とした顔ではなく笑った顔ばかりです。話は変わりますが、今の「辰元グループ」を見ると先人の「柿本人麻呂」の歌を思い出します。

東の 野にかぎろいの 立つ見えて

かへり見すれば 月かたぶきぬ

先生はいろんなイベントが大好きな方であったのは、皆さんの周知のことですが、これこそが先生の戦略家と言わしめる所以でもあるのです。つまり、イベントをするには職員一人ではできません。何人もの職員が協力し合って初めて成功できるのですが、それがグループが大きくなればなるほど強力なチームワークが必要となります。それを見越しての戦略ではなかったのかと思うのです。

昔は誕生会や慰安旅行等があり今では懐かしい思い出です。慰安旅行では、九州全土を何回も行かせて頂きました。大型バスを貸しきったり、職員の運転でマイクロやデイクア送迎のバンなどを何台も連ねた長崎旅行等思い出せばきりがないので、これが、これらのエピソードは他の方々に譲るとして、このころから先生が一声挙げれば兵隊（職員）が動くといった状況が完成したのです。

文武天皇がまだ軽皇子かろみこといわれていたころ、父の草壁皇子がご逝去のち、大和の阿騎野に遊獵され、生前ここで狩獵された父を偲びながらこの野に宿られたが、お供に従った「柿本人麻呂」が皇子の心を汲んで詠まれたものとされているのが一般的ですが、この歌の現代語の解釈が「冬の早朝、東の空にまさに日が昇ろうとするその直前、光が差し込もうとしている山際の空の美しさ、振り返って西の空を眺めると月が沈もうとしている」となります。少数派かもしれませんが、草壁皇子が今までの偉業をたづさえ世代交代を行なっていくことを天下に知らしめるためにこの歌を「柿本人麻呂」が詠んだもので、東の空（現世）の日が「現理事長」で西の空（西方浄土）の月が「前理事長」であるかの様な歌に感じます。

忠先生に合掌

男のロマン

長寿園医務主任 北堀 志美子

私が理事長と初めてお会いしたのが、昭和五十六年一月、現在の一病棟一階の理事長室で面接をして頂いた時の事でした。椅子に座られるなり、「君は、年寄り好きですか」と聞かれ、意味もわからず、ポカンとしていますと、「老人と話をしてもらうだけでもいいですよ、そして時々治療すればいいよ」と言われ、初めて、この病院が老人専門の病院だという事が、なんとなく理解出来、又、寝たきりの方がたくさんいらっしゃる事に気づきました。

さて理事長といえ、何事も時間に厳しい方で、何事も早目早目に行動にうつされました。ドライブ大好きとあってか、往診にも必ず自分で運転され、我々看護師は助手席に座らせて頂いていたものでした。往診先では、車を駐車場に止めるやいなや、患者様の自宅へ早足で行かれる為、我々がグズグズしているものなら、後ろ姿を見失ってしまい、困っ

ていると、理事長が迎えに来て下さったものでした。往診に行く道々、タッパの中からアラレを一握り、「君も食べなさい」とくださいました。以前からアラレが大好きでした。

回診の日―理事長を迎える日は、朝から準備。きれいな好きで、特に居室廊下はゴミのない様に、車イスが廊下に散乱していないか、窓枠はホコリがたまっていないか、職員全体に緊張が走りまわりました。又回診が始まりますと利用者に優しく語りかけられ、急ぎ足で進まれる為、後を追いかけて、一つ一つ指示を聞き落とさない様、走って付いて行くのが精一杯でした。

昭和五十八年ごろでしたか、今の二病棟を増築される時、回診中に「すぐ百床になるよ」と、目を子供の様にキラキラ輝かせながら理事長が言われた時は、私自身、疑心暗鬼でしたが、病棟が出来上がる

間もなく、あつという間に満床となり、さすが！理事長は先見の明があると感嘆したものでした。

その頃から、こういう施設・病院が、世の中に必要とされて、長寿社会に突入したのかなと、理事長のおかげで考える事ができる様になった気がします。

忘年会―昭和五十七年の十二月が始まりだったと思います。わずかな職員で一生懸命、唄に踊りにお芝居に頭をひねったものでした。理事長はいつも前列で目を細めてご覧になっておられ、時には舞台に引っぱり出されたり、最後にはランク付けして発表され、商品を配られ、我々もとてもワクワクした事を忘れられません。

毎年の様に敷地内、あるいは、他場所に建物を建てられた理事長。「男のロマンだよ、これが最後の建物だよ」と、いつも目を細め、ニコニコしながら、工事現場に足を運ばれておられた様にありました。

一代で築きあげられたこの施設…周囲からは、ちょっと変っていると聞こえた事もありましたが、常に存在感のある理事長には職員として敬意を表していましたし、誰も真似出来ない事を遣り通され、従業員の人数も増え、忘年会も「ヤマホ」では収容

しきれない事態となるあり様、驚きをおくせない程でした。

外來は、お客様（患者さん）を迎える為に、きちんとスリッパを揃える事、施設内は無臭、車イスは必ず畳んで歩行者の邪魔にならない場所に置く。電話のベルは三回以内で、早目に受話器を取る。相手を持たせない。施設内では必ず挨拶をする。

理事長の教育された事が、辰元病院に根差す事を願ってやみません。

食事に対する想いを伝えたい

裕生園管理栄養士 松浦 玉子

理事長との初めての出会いは、長寿園栄養士として勤務していた時でした。印象としては痩せ型で白衣を羽織られ飄々と廊下を歩かれる姿や、利用者の診察をされている光景です。笑顔はあまり見たことがありませんでした。チョット怖い感じを持ちました。それから二年後（平成元年四月）、裕生園栄養士として勤務することになりました。それからは理事長から患者様・利用者様の食事（給食）に対する想いを得々と二十一年間ご指導いただきました。

平成十七年十一月オープン前のセントラルキッチンには以前から想いを発せられておられた事業の一つでした。今は順調に稼動していますが、複合施設があるところはどこも喉から手が出るほど欲しい給食施設だと思えます。県内で一つしかなく HACCP（食品製造における衛生管理手法の一つ）を取り入れた近代的な内容のセントラルキッチンです。



オール電化されたセントラルキッチンの内部。
真空調理法を採用

オープンにあたり理事長の「給食センターを造ろう」の一声がなければ絶対できない事業であったと思えます。現在はセントラルキッチンの中温冷凍車が真空調理やクックチル状態で調理加工された翌日の1日分の食事を5カ所（病院・裕生園・信愛ホーム・長寿園・グジブランドの給食室）に毎日配送され患者様や利用者様に提供されています。

理事長は患者様と同じ患者食を食べておられました。「美味しいものを出しなさい」「食べやすいものを出しなさい」は口癖のように言われておりました。問題の献立の時は呼び出しがありいろいろ指摘を受けました。十分で終わる時もありましたが、ある時は二時間ぐらいい話をされることもありました。多忙な日は気持ち裕生園の方へソワソワしていたことを今さらのように思い出されます。今思えば、理事長の大変熱い思いや貴重なお言葉であったと懐かしく思い出されます。

二十一年の間にはいろいろな思い出話やエピソードがありますが、一番印象深いのはやはり、セントラルキッチンオープン前の業者との話し合いや準備です。これから新調理法である真空調理（空気を通

さない特殊なビニール袋に材料や調味料を入れて脱気後加熱し冷却後保存する）やクックチル（ホテルパンに材料や調味料を入れ加熱し冷却後蓋をして保存する）で多くの料理がセントラルキッチンで調理加工されるであろうと言うことで、食事を兼ねて市内の高級レストラン（真空調理法を指導して頂くシェフのレストラン）に真空調理で料理して頂いたものを食べに行くことになりました。理事長や園長とともに栄養士も一緒に数回行きましたが、若い栄養士は真空調理の料理にも興味津々でしたが、理事長や園長と一緒に食事をする機会は殆どなく初めての事でしたので、今でもその時の理事長の笑顔が印象深く残っていることでしょう。肉料理や蛸のマリネが大変軟らかく美味しく、また果物のコンポートも本来の果物の色が鮮やかに引き出されていてさらに甘く美味しく感じました。これなら患者様や、利用者様が軟らかく美味しく食べられると再確認しました。

もう一つの思い出は、「来週から1週間に1回定期的に泥鰌どじょうが送ってくるから献立に入れるように」と言われた時です。大分県に生きた泥鰌の買い付けに

理事長と秘書課長と共に直接仕入れに行かれたものでした。「なぜ泥鰻なの？」と正直いました。ある料理屋で泥鰻料理を食された時に、大変カルシウムやたん白質の多い魚で淡白な味であることから、高齢者である利用者様や患者様に食べさせたいと思われたのでしょうか。何事も大変拘りを持たれ、すぐ行動に移される。暫くはとことんそれに対して追求される情熱型でした。今思えば病院の院長として、また理事長として実績はすばらしく大きいものですが、小さい時からの夢を一つ一つ叶えられ、今日の老人複合施設の達成になったのは理事長の強い信念と情熱ではなかったかと思えます。また園長の縁の下の力がなければ出来ないことで、それが最大に大きいのはもちろんのことです。(泥鰻の献立は1週間に1回他の天ぷらの中に含めて出しましたが、大きい泥鰻は骨が固いと苦情があり二、三カ月で中止になりました)

生前、まだ足が悪くない時、ひよつと裕生園の二階の栄養士室に來られ一時間ぐらのお話しされて帰られたこともありました。逝去された後もまたひよつと來られるような錯覚や、まだ理事長室でいろいろ

な次の構想を練ってらっしゃるような思いがまだ私の頭中にありました。しかし、今日この文章を書くことになり、もう理事長にお会いすることも無く、また呼ばれていろいろなお話を聞く機会もないと思うと、大変感慨深く寂しい気持ちでいっぱいになりました。

現実を受け入れ、理事長の食事に対する思いをしつかり実践しながら、また良い所を伝承し辰元グループの給食の発展に生かされるように気を引き締め頑張りたいと思います。ありがとうございます。心からご冥福をお祈りいたします。

合掌

追悼文

生き続ける理事長の精神

裕生園副園長 川越 淳

私が辰元忠理事長(この文章の中では理事長と呼ばせていただきます)と初めてお会いしたのは平成七年秋。裕生園・辰元病院・信愛ホーム合同の採用試験の面接の時でした。私は長年住んでいた京都から宮崎に帰って来て、ある福祉作業所で一年ほどボランティアをやっていました。福祉人材センターに登録したところ、裕生園から採用試験の案内が来て、この日の試験となったのです。理事長と圭子園長お二人による面接でした。あまり採用面接というものに慣れていなかった私は、理事長、園長に尋ねられるまま、いろいろ話をしたように記憶します。そして理事長、園長からのお話もありました。当時の私は福祉のことも医療のことも全くわからず、ただただお二人の話をお聞きするだけでしたが、それでも、理事長、園長の考えが世間一般の考えよりだいぶ先に進んでいることだけは直感できました。

面接の翌日。私がいつものように宮崎市倉岡の福祉作業所で作業をしていると、「電話がきてるよ」と作業所の方が知らせてくれました。誰だろう？自分がここで作業していることを知っている人はほとんどいないのに… と思いながら、電話に出ると、前日に面接を受けたばかりの辰元理事長でした。「今から来なさい」という。えっ!? 今、作業中であること、自分は市内から作業所に自転車であって高岡まで自転車で行くのはあまりに遠いこと、その日は作業のためジャージを着ていてワラくずがいっぱいくっついていて、などを言って、「とても無理です」と答えたのですが、「いいから、来なさい」ということでした。高岡トンネルを避けて、大淀川の見える、がけ下の旧10号線を自転車で行ったことを覚えています。

私は縁あって裕生園に採用となり、その後、理事長、

園長の指導のもと仕事をして来たわけですが、正直言って理事長の考えについて行けないこともありました。理事長の指示に反発して、裕生園の事務室で、机をはさんで理事長と向かい合って座り、お互いに無言のまま長い時間が流れたこともあり。険悪な空気に回りの人達はハラハラしたでしょう。理事長の考えについて行けなかった理由は、その時々で様々でしたが、ある時、理事長の視点が自分達の視点よりもずっと高いことに気付いてハッとしたことがあります。それは、〓キャプテン制〓制定の時のことです。キャプテンとは、土・日・祝祭日に辰元グループの幹部の一人が当番でキャプテンとなり、不測の事態に備えるというものです。キャプテン制が無かった頃は、土・日・祝祭日にたまたま誰も幹部がいない、ということが起こっていました。ある時、理事長が幹部の一人を呼びましたが、休み。次の幹部を呼んだが、その人も休み。また更にもう一人も休み……という事があって理事長が怒り、キャプテン制の導入となったのです。最初の導入の時、私たちはあまり意味がピンと来ませんでした。病院、施設がたくさんあって、例えばその日、裕生園の幹部がキャ

理事長には『ひとつとべ』と『いっちゃん』の2冊の著書があり、理事長御存命中は実物の理事長があまりに強烈な個性の持主であったため、著書の方は、私はあまり念を入れて読んでいませんでした。亡くなられてから改めて丁寧に拝読したのですが、理事長の思い、考え、来歴がよくわかり、また私にとつての新しい発見もあり、なぜ御存命中にもっとしっかり読まなかったのか、悔やまれます。

発見の一つは、患者さんや利用者に対する理事長の優しさ、まごころの深さです。理事長が患者さんや利用者じかに接する所で仕事をしていた職員にとっては、理事長の優しさはもう言うまでもない事でしょうが、私にとっての理事長は辰元グループの総帥、常に事業の拡大を図って行く事業家、のイメージが強かったので、理事長の著書に表れているこの〓患者中心主義〓、利用者中心主義〓は私にとっては驚きでした。

それから、辰元グループの一大特徴は医療と福祉の融合にあります。理事長はこれを早い段階から自覚的に進めて来た、ということ。広大な土地があったことも一つの好条件であったのは確かです

プテンとして出勤したとしても、他の施設や病院にはあまり関係があるとは思えない……それぞれの施設で、その幹部クラスが当番になる、というのなら話はわかるが……。つまり、私達の発想は施設の範囲内にとどまっていたのです。しかし理事長の発想は、施設・病院のワクを越えて、辰元グループ全体を高い所から見たものでした。土・日・祝祭日にグループ幹部が当番制で言わば理事長代理をなささい、ということだったのです。それをキャプテンと名付けたのでした。その視点に気付いた時、私は理事長の視点の高さに驚いたと同時に、もしその視点を得なければ理事長の考えを理解することは難しいな、ということにも気付いたのです。理事長の考えについて行けないその理由の一つは、この視点の高さということもあつたと思います。「馬鹿かお前は！」「やっ」とわかったか！」が理事長の口ぐせでしたが、理事長と他の職員達との視点の高さの違いが歴然としてあり、理事長の所まで登って行くのが大変で、理事長の側からすれば自分の言っている事がなかなか理解してもらえず、もどかしく腹立たしかったことでしょう。

が、単なる成り行きで医療・福祉の複合施設が出来上がったのではなく、将来必ず医療と福祉が連携して行かなければならない時代が来る、という確信のもとに自覚的にそして戦略的に事業を展開して来たということ。今でこそ、国も、医療と福祉の連携を唱えるようになりましたが、理事長はそれよりも十年も二十年前から自分の確信に基づいて事業を展開して行ったのです。

そしてもう一つ。理事長の著書を読んで私が思ったのは、理事長の文章に表われている〓乾いた知性〓、とでも言うべき思考の質です。理事長の文章はどれも感情に流されることなく、対象物を、それが経営のことであっても、歴史であつても、どこかの都市のことであつても、そのものの輪郭に沿ってつくきりにとらえています。そして、そのようにはつきりと見えたものしか文章にしません。もうろうとした対象物が出て来ませんし、自分の目が何らかの感情でくもらされることもありません。それは徹底しています。この透徹した目は、理事長が医学という科学の現場にいらっしやったからでしょうか。そして理事長の乾いた知性は経営に関してもドライに

本質を見て、その上で思い切った決断をされています。辰元グループの今日までの発展は、理事長のこの、くもることなく物事の本質を見る目と、先入観なく展開される思考と、果敢な決断力、がその大もとにあつたことは多くの人が認める所でしょう。

理事長。みんなが言っています。亡くなったとはとても思えない、と。建物にも壁画にもそして駐車場の線にまで理事長の思いが残っています。何よりも職員の中の心に理事長は生き続けています。これから、理事長を知らない新しい職員が入職して来ますが、理事長の精神を何らかの形で引き継いで行けるよう私達も頑張ってください。どうぞ私達みんなを高い所から見守って、また時にはしかって下さい。



追悼文

理事長が教えてくださったもの

高岡地区地域包括支援センター主任ケアマネジャー 西蘭 脩子

私が介護の世界に足を踏み入れたのは二十四年前（昭和六十一年十月）の事である。四十歳近くになり、老人介護の世界に足を踏み入れ、見る事、聞く事、初めての事ばかりであったが、当時は院長であった理事長が朝礼で熱く介護を語る姿、また医師は雲の上の人とばかり思っていた私が、廊下で理事長が患者とすれ違う際に廊下の隅に寄り、頭を下げて患者に道を譲る姿はとても印象的であり、私を熱く燃えさせ介護の世界へのめり込んでいく原動力になった。

辰元病院に一年半勤務後、裕生園に異動が決まり、園長に「病院の院長に黙って裕生園に移ったのです」と恐る恐る言うと、園長は、「私と院長は夫婦ですから、大丈夫です」と言われ、私は理事長と園長が夫婦であることが「やっと、分かった」のである。いつでもまっすぐで少年のように夢を語り、夢を

実行に移す理事長の姿。お年寄りを愛し、職員をこよなく愛する理事長の姿が、迷うことなく二十数年間、辰元グループで仕事を続けられた所以であろう。「やっと、分かったか」まだ答えられないが、「理事長、分かりました」と言える日が来るように一歩一歩進んで行きたい。

偉大なドクター

元裕生園医務主任 入船 三代子

私は特別養護老人ホーム裕生園の一期生です。開設当時、周辺は一面田んぼ、裏はみかん山で、みかん時期は入居者を連れてみかん狩りに行ったり、今は考えられないでしょうが、ゆったりした時間でした。それから雨上がりの日はベチャベチャした道路で、雨靴で出勤しました。

初出勤の時の辰元先生のご挨拶の内容、今も忘れることは出来ません。この先生は普通のドクターではないと胸にしっかりと感じ入りました。その時におっしゃったお言葉は、「お年寄り生き仏様ですからこうした施設を考えて、本日開設することが出来ました。皆さんもそのつもりでお年寄りを^{たす}かう心で頑張ってください」とご挨拶されたのです。

私は約十九年間お世話になりました。その間いろいろありましたが、先生は即実行される先生で、先見の明とでも申しませうか、アイデアマンでした。

施設の設計もご自分でなされたとか。

話は変わりますが、ある日の回診の時、内ポケットから圭子園長の写真を出して見せて下さいました。その時の先生のお顔はとても嬉しそうでした。そうした中にも圭子園長が、あることで、先生の話にブレーキをかけられて口論になる事が多々ありました。けれども直ぐに先生の方から「園長は？」と尋ねて来られていたのです。それはそうでしょう。肌身離さず写真を携帯されておられたのですから。

又ある日の回診の時です。「入船君、これからは福祉施設の事に外国の人、インドネシアやフィリピン等から来るように、きつとそうなる」とおっしゃったのです。随分以前の事ですが、世の中はそうした傾向になって来ます。又々びっくりすることでした。

辰元先生はお亡くなりになっていらっしゃいます

が、福祉に貢献された偉大なドクターだったと誇りに思っています。

辰元先生、大変お世話になりました。有難う御座いました。
合掌するのみです。



昭和 52 年、オープン当時の裕生園

『大好きなおとうさん』（ナナ子・ミニ・シロちゃんより）

グループホームたちばな管理者 長友 美紀

いつものように定刻、たちばな一号館の玄関のドアが開き「ナナ子ちゃん」と「ミニちゃん」が出勤。ただ車の助手席に笑顔の理事長と愛嬌を振りまく「シロちゃん」の姿がないのを除けば、いつもと変わらない光景である。

「有言実行」「先見の明」「率先垂範」等々、理事長の生前の偉大なお姿は皆さんも御存知の通りで、私たち職員にとつて近寄りが見たい存在でしたが、ここで人間味あふれるほのぼのとした理事長のお姿を紹介したいとおもいます。

今から九年前、G・Hたちばな一号館が開設してまもなく、理事長に抱っこされた小さなかわいい「ナナ子ちゃん」が出勤。そして一年後、妊娠し大きなお腹をかかえた「ナナ子ちゃん」に一号館の職員は、こわれものにさわるかのように、ハラハラ・ドキドキの毎日でした。ある日妊婦犬の「ナナ子ちゃん」

がパイプ椅子での居眠りで、椅子からころげ落ち、

手にケガをし、早速、理事長に呼び出され、もうこれは例のごとくお叱り覚悟で理事長室へと足を運び状況を説明すると笑顔で「そうか、そうか。これからも面倒をよろしく頼む」とおっしゃられ、胸をなでおろしたことがありました。それからしばらくして、「ミニちゃん」が誕生してからは、理事長のトレードマークである帽子をかぶり、シオルダーバッグを肩にかけ、かわいい二匹をリードで引っ張りながらの出勤が続き、「暑さから二匹が夏バテするといけない」と、しっかりと夏休み（夏期休暇）もありました。又、理事長・園長の長期出張の際、家での留守番はかわいそうと、たちばな一号館で職員と夜勤業務をしたこともありました（現在も時々夜勤業務をしています）。

二、三号館の番犬の「ポポ」と「ピー子」も面倒を

みる人がいないと聞き、理事長自ら、即、もらいに掛ければ命名し、犬小屋、ネームプレートも完成。そして世話を直ぐ決められ、出勤の際、必ず車で立ち寄られ二匹の状態を笑顔でみられる日課も続きました。

高齢者の方々にとつて、動物とのふれあい（アニマルセラピー）が良いことも理事長はわかっておられ、利用者の方々と一緒に「ナナ子ちゃんたち」にとつても第二の我家であるたちばなの一員として、理事長の意志を引き継ぎ現在もしっかり役割をこなし、

和やかな日々を利用者の方々と共に過ごしています。四匹のかわいい犬たちがいることで、私たちたちばなの職員も、心が和み、癒され、利用者の方々に対する日々のケアもかわいい犬たちから教わることも多々あります。

ここ数年、理事長も体調をこわされ、「ナナ子ちゃんたち」も車での送迎でしたが、「ナナ子ちゃんたち」は理事長の車をしっかりと覚えていて、一号館前に定刻、お迎えの車が到着すると、それはそれはちぎれんばかりに尾をふり、うれしそうな声で鳴き、後を



大好きなナナ子ちゃん、ミニちゃんと（グループホームたちばな1号館前で）



ナナ子ちゃんをひざに乗せて（グループホームたちばな1号館で）

追悼文

感謝

平成二十一年六月二十六日、理事長が静かに息をひきとられた：

私にはあつという間のことのようで：何がおきているのかしらという気持ちだった。「えっ、うそ、理事長がなくなつた？」あとの言葉が出てこなかった。突然にいなくなられた、そんな思いです。あまりにも大きな存在だったので、亡くなられたという現実が受け入れられませんでした。そう思う人は私だけではないと思います。

今、理事長との思い出を振り返ると、可笑しかったり、懐かしかったりしています。たとえば、ある会合の懇親会でのことでした。料亭の大広間で、突然「柏田くん」と呼ばれ、私は「はい」と言つてそばにいくと、「肉を2キロ増やせ」と言われるのです。すぐ隣で食事をされていた他法人の理事長（ドクター）が、私の顔を見ながら非常に驚かれています。



一足先に逝つたシロちゃん。今頃は天国で理事長と再会を果たし、ひざの上にちょこんと座っていることでしょう。

たちばな一号館のホールのベンチに腰掛けられ「ナナ子ちゃん」をひざに抱き満面の笑みで、職員との対話を楽しまれ、くつろがれた理事長。「自然」「人」「動物」をこよなく愛され人生を一気に駆け続けられた理事長。人間にとつて大切な「人を思いやる心」を身をもって教えていただきありがとうございました。私たち職員も教えを守り、これからも日々、真心を込めたケアに努めていきます。本当に、お疲れ様でした。大好きな「シロちゃん」とゆつくりお休み下さい。御冥福をお祈り致します。

裕生園事務主任 柏田 沙代

のです。咄嗟に私は「先生、今のお肉の話は、明日霧島の別荘に持つていくお肉の話ですからご心配なく」そう言うと「あつ、そうね、そういう事」と安堵の顔をされた事がありました。それもそのはず、会食のメニューには宮崎牛のステーキが並んでいましたから驚かれたのもわかります。『思いついたら即行動』がぴったりの方でした。

しかし、そのような錚々たる面々の方たちが、「先生、お元気ですか？また建物が増えたらいいですね」とか「久しぶりに先生にお会い出来て良かったです」などなど、理事長のところへ必ず挨拶に来られていました。なんとなく人をひきつけるところは、やはりカリスマ性を感じました。またあるときは、南米への旅行前でしたでしょうか、理事長は目を悪くされていたので、私は殆どといっていいほど毎日のように秘書課長室に呼ばれ、世界遺産マチュピチュの

資料（パンフレット）を読むようにいわれました。もちろんブラジル・サンパウロ、イグアスの滝など、いろいろな資料を読むうちに、私も一緒に現地にいるような感覚になったものでした。後に聞いた話では理事長の凄さに現地のガイドがびつくりしていたとか。そしてあるときは、早朝に理事長室に呼ばれ、いきなり、「柏田君、君に頼みがある、園長の仕事を減らせ」と言われる。「はあ、理事長どういうことですか？」と質問すると「いいから減らせ」としか言われない。そこへ傍にいた秘書課長が「いや、実は先生は、園長が疲れているから柏田さんに助けてくださいか、というような意味合いでいわれたんですよ」との事。ようやく意味が理解できた私は「理事長、そういう優しさ、気づかいでしたら何で直接園長に言われないんですか。心配だから」という事なら、園長も喜ばれるし、聞いている私たちも嬉しいじゃないですか」と私が言い終わるか終わらないうちに、頭をかきながら、照れくさそうに下を向かれるような、とてもシャイな一面も見受けられました。本当に園長のことを思っただけじゃあんな感じでした。

あらためて、亡くなられて一年が過ぎた今、永年理事長に仕えた職員の口から、「寂しい」などの言葉を聞くと私も同感しますし、なんと愛された方だったでしょう。理事長と私の会話を、とんち合戦みたいだと言われたことがあります。やはり少し寂しい気もしますね。今までいろいろな経験をさせていただいたことは感謝の気持ちでいっぱいです。これからもいろいろな方たちと思い出話をしながら、理事長を偲び頑張ります。

追悼文

前辰元理事長を偲んで

ケアハウスシャトル事務長 中岩 哲也

私が初めて前理事長とお会いしたのは、平成二十年の二月でした。私は他の社会福祉法人に勤めていましたが、転職先を探しているところで、前理事長の面接を受けました。理事長室にはベッドが置いてあり、体調が優れないことを知りました。

壁には池の写真がたくさん飾ってありました。西田池の写真でした。就職の面接でありながら、私の経歴などの話はほとんどされないうちに西田池の話になり、言葉少なではありますが、目を輝かせて話されるご様子から、西田池に対する強い想いを感じました。

その後、そんなお気に入りの場所に建設する『きんかん小規模多機能ホーム』に私自身が関わることになり、前理事長と私の唯一の接点ができました。きんかん建設中も、毎日のように池を見に来られ、晴れた日は長いすに座られ、天気の良い日でも車の

中から池を眺めておられたそうです。今でも池が一望できるお堂の下に、主のいな長いすが置かれています。『きんかん』という名称は、前理事長がひらめきで命名されたようですが、実際に開所してからは地域に溶け込んだ、地域の高齢者の方たちが覚えやすく、親しみの湧く名称だと好評でした。前理事長のひらめきのすばらしさを肌で感じました。一番新しい『きんかん』をはじめ、一代でここまで大きな総合複合施設を作り上げた行動力、統率力、先見の明には感服します。

私が信愛会にお世話になって2年になりますが、その当時から体調を崩されていたので、第一線で働かれていた、とても厳しく、皆から怖がられる存在であった前理事長を存じ上げません。一〇年、二〇年と長く勤めている職員から前理事長の武勇伝や、怒鳴られたり、褒められたりした思い出話を聞くと、

自分にはもう絶対経験できないことだと寂しい気持ちになります。できることならお元気な頃の前理事長の下で、叱られながらたくさん事を教えていただきかったという想いでいっぱいです。

— 今まで前理事長が作り上げてこられた辰元グループを微力ではありますが、盛り上げていけたらと思います。前理事長のご冥福をお祈りいたします。



西田池の対岸から『きんかん』を見る

追悼文

『きんかん』命名に立ち会う

裕生園介護主任 甲斐 ミツ子

われた事は私にとっても幸せな事でした。

著書も拝読しましたが、一本気の本当の意味での薩摩隼人の姿を見た気がしました。男性ならきつと理事長の生き方に憧れる人は多いと思います。太く大きな屋久杉を思わせる生き方です。

追悼の文を書く職員の中で一番短いお付き合いでしたが、ずっと誇りに思える理事長です。一生懸命かけ足で駆け抜けられ、さぞお疲れだったでしょう。これからは、信先生に任せてゆっくりお休み下さい。ご冥福をお祈り申し上げます。

今思えば、理事長と初めてお会いしたのは、義父を看取っていただいた時です。その時はまだ私は他の施設に勤務しておりましたので、辰元のドクターという事しか知りませんでした。縁あって裕生園に入職して理事長とお会いした時、小規模多機能施設の立ち上げに取り組んでおられ、何度か西田池にご一緒しました。小規模多機能施設の命名も、ある日、さくら苑の小規模多機能施設『さくらんぼ』を一緒に見学した時、「ここは『さくらんぼ』だね。それならうちは『きんかん』がいいね」という一言で決定しました。最初は「きんかん？ 少し変じゃない？」と思っていたのですが、挨拶回りで「『きんかん』てかわいいですね。一度聞いたら絶対忘れないですよ」と言われ、やはり理事長は先見の明がある方なのだと改めて思いました。

理事長の最後の事業立ち上げの『きんかん』に関

グジブランド職員より

- 後藤 秀臣 氏
- 松元 由美子 氏
- 松浦 暉子 氏
- 松村 為史 氏
- 広若 キクミ 氏
- 河野 哲史 氏
- 西園 幸子 氏



辰元忠前理事長との思い出

アルテンハイム・グジブランド施設長

後藤 秀臣

前理事長 辰元忠先生は、遠く鹿児島地の地から宮崎に赴いて来られ、医師として長年地域医療に尽力されると共に、高齢者の医療・保健・福祉を充実・向上させたいという強い志を持って施設運営にも積極的に努めてこられました。その先を見据えた手腕は行政を始め各方面からも高い評価を得ており、数々の業績は枚挙に遑がない程です。そのような先生のもとで仕事をさせて頂いたのは3年間でしたが、その間、ここに書ききれない程の様々な楽しく懐かしい思い出があります。

先ず、私が入って間もない頃、グジブランドの建物が着工される少し前の話になりますが、建設現場を見に行こうということになり、先生、橋口さんと三人で出かけたことがあります。車中では普段考えておられること等、様々な想いを話されましたが、その話を伺いながら目的地に向かいました。現場に

たが、このことについては、先生も見透かした上での事ではなかったかと思っています。どういう風に見られた事をこなすか、多分、それを観て楽しんでおられたはずですよ。そして、この件に限らず何事も、それぞれの職員に対して高い課題を与え、人間性の涵養を図る等して個々の能力を伸ばそうと試みておられたのではないかと思われます。最初はどうか考えればいいのか正直言って戸惑いを感じましたが、今、そう確信しています。

又、ある時、グジブランドが開園して間もなくの頃、屋上で小鳥用の網を張っていた時のことです。突然、〇〇日頃、霧島の別荘に行きましようと言われたので、何の予備知識もないまま、「ハ、ハイ」と応えたものでした。このことを後で職員に聞いてみると、別荘行きは毎年の恒例行事だという。温泉を楽しんだり、ビデオを観たり、又、酒を飲んだりしながら過ごすのだと言う。それは良いこと尽くめではないか、いい休養になるね、と話をしたところでしたが、職員の反応はイマイチです。それもそうだなあ、先生と一緒に緊張もするし、と思いつつながらその日を待つことにしました。それから数日して、いよいよ

着くと作業員が一人パワーショベルに乗って手際よく黙々と整地作業をしているところでした。傍にいた橋口さんに話を聞くと、先生が現場に着かれる前の時間を見計らって、介護士の黒木さんが駆けつけ作業していることを話してくれました。その時は、請負業者が決まっているのに、何故わざわざ施設の職員が仕事の時間を割いてまで整地作業をするのか、不思議に思っていたところでした。しかし、後になって先生の話を色々伺う内に、一つには、グループの職員は皆家族のようなものだから、何事も一緒に頑張って協力してやって欲しい、という強い気持ちがあるのではないかと思うようになりました。職員としては忙しくても命令に背くことができないので、やむを得ずその時だけ分らないように現場に行つて取り繕う、いわゆるパフォーマンスを行っていたのです。それを何も言わずニコニコして見ておられました

出発です。その日はあいにく台風が接近しており、確か大雨警報が発令中でした。大丈夫かな、無理ではないかと思いつつも、5人で賑やかに目的地に向かって出発しました。最初はいつもの道路をいつものとおり進んで行きましたが、1時間くらい走ったでしょうか、道路のあちこちが冠水しています。まあ、それでも走れなくはないので、そのまま進むということになりましたが、次第にそれがひどくなる状況になってきました。運転していた高橋さんが、隊長これ以上は無理です（隊長とはいいませんでしたが、雰囲気はそうでした）もう引き返しましょうか、と言うと、すかさず、じゃ別の道を行きましょう、と言われたのです。どの道路も行ける状態ではないことが想像できましたので、びっくりしてそれぞれ顔を見合わせたものでした。それから別の道路に迂回して別荘を目指すことにしましたが、途中でやはり通行止めです。もう進める道路はありません、と言うと今度はキツパリとそれでは引き返しましょう、と言われたのでこの日は止む無く断念することになりました。激しい暴風雨の中のことですから、皆

追悼文

辰元 忠先生へ

アルテンハイム・グジブランド事務長

松元 由美子

三十年という長い間お世話になり本当に有り難うございました。

考えてみますれば、主人の実家に帰るといっているので、近くで働ける場所はないか、と思っていたところ、チラシで辰元病院の求人募集を見つけ、事務員として雇って頂ける事になりました。それで、医療事務の資格を取るべくニチイ学館に通い、資格試験を受け無事に合格して裕生園に圭子園長を訪ね、面接を受けさせてもらい、翌月から早速仕事をさせてもらうこととなりました。だからその時、辰元理事長の面接は受けたはずなのですが、あまり記憶がないのです。その頃は、理事長はまだ大塚の方で開業をしておられ、この高岡のクリニックは他の先生に任せておられた時代です。その時代はレセプトを大塚の辰元院長の事務員さんに教えてもらい、国保連とかに出していました。その後、忠理事長が高岡に本拠

顔を見合わせて安堵したものでした。その様子をニコニコして観ておられました。ここでも又、みんながどう反応するかを楽しんでおられたのではないかと思います。

そのような理由で、目的地には到着できませんでしたが、車の中での数時間は本当に楽しそうに、冒険遊びをする時の悪戯いたずらっぽい少年というような表情をしておられたのが印象的で、先生の一面を垣間見たような楽しい一日でした。

以上の話から、厳しい指導者・経営者としての先生、又、一方では遊び心のある人間性豊かな先生の一隅が窺えるような気がしましたので、紹介させて頂きました。この他、屋上屋台、吉兆うどん、マゴ(孫)ハウス、小鳥の放し飼い、犬、中庭、南に広がる雄大な山々等に纏まわる数多くのエピソードがありますが、どの話も楽しいものばかりで想い出は尽きません。本当に短い間ではありましたが大変お世話になりました。ここに深く感謝申し上げます、心からご冥福をお祈り申し上げます



グジブランドの中庭。吹き抜けの天井に網をして、小鳥が放し飼いにしている。

地を構えられました。

若くて元気のいい理事長の一時代が始まりました。若かりし頃の理事長は、職員に厳しい方でした。今の栄養士室が診察室でしたので何かあると看護師、介護職員を呼んで一言一言注意されました。時間に厳しい一面があり、一回目の忘年会の時に看護師の方々が席に着くのが遅れたとき大変な怒りようで、それから、全職員が十五分から三十分前にはびしゃつと席に着くという暗黙の規則が出来上がりました。

理事長は忘年会、新年会、誕生会、夏のカラオケ大会、慰安旅行、ほか、本当に職員の福利厚生に対して心を砕いて頂いた方でした。職員の数が増え、多くなり行事も盛大で大変な物となっていききました。理事長の想い—職員が楽しんでくれる、その顔を見るのが楽しみ—というお気持ちですと続けて頂いたのでしょう。職員旅行など私自身も楽しい思

真剣に向き合って下さった先生へ

アルテンハイム・グジブランドケアマネジャー

松浦 暉子

「キミは馬鹿か!」「いいか!もう一回言うとなー!」
いつも十年先が見えていた先生は、凡人の私を相手に一生懸命話されます。如何に歯がゆかった事でしょう。古稀の祝後、二次会で「キミは僕が十年後に生きていると思うかい?」と問われ、何時ものとおり返事に困っていると、何時ものとおり返えを自分でおっしゃいました。「僕は生きていないよ」と。そして本当に逝ってしまったました。

「先生が亡くなった」との一報を受けた時、「私の人生の中で、夫以外に一番影響を受けた男の人が居なくなった」と思いました。

思いは一杯ありますが、私は先生の期待に応える事が出来ずに、病院を一度辞めて又戻った者です。その時の事を書く事にします。

私は病院を辞めてから、暫くすると辰元先生の事が懐かしく思い出され、叱られた事はすっかり忘れ、

機嫌の良い時の素晴らしい笑顔しか浮んできませんでした。そんな時、友達から辰元グループが訪問看護師を募集しており、「園長が、松浦さんはどうかしらと言っていた」と聞きました。役場で臨時職員をしていた私は、丁度、役場に用事でみえた閨野事務長に、「又使ってくれるだろうか?」と聞いてみました。事務長が先生の機嫌の良い時を見計らい、「松浦さんが又使って貰えないだろうかと言っている」と言った途端、「あいつは、どんなに俺を苦しめたか知っているか!」と、怒りが沸騰したそうです。病院を辞めてから十年近く経っており、私は何も傷ついていないのに、先生は十年経ってもまだ癒えない程の傷を受けていたのだと気付かされました。

こんな私でも真剣に相手をして下さった先生。少しでも恩返しが出来れば、と思っています。

辰元忠前理事長のカリスマ性

アルテンハイム・グジブランド相談員

松村 為史

私が辰元グループにお世話になり、五年の月日が過ぎようとしています。〃たったの五年〃と言われるようですが、私にとっては、貴重な経験をさせて頂いた五年間でした。

それは、辰元忠理事長、辰元圭子園長を始め、色々な方々と出会うことができ、経営・運営理念のあり方考え方や、高齢者等をグループ全体で援助し支えていく為に必要な医療と福祉の連携のあり方等を学び、体験することができました。

その中において、辰元忠理事長のぶれない信念、〃強さ〃と、人を集める〃カリスマ性〃、を感じました。それを感じた思い出が、グジブランドの利用料金について理事長が〃一律十五万円〃を打ち出された時のことです。そうすれば利用する側、される側ともわかりやすいだろうと説明されましたが、介護保険報酬等の関係で、〃一律十五万円〃にはならず、パン

フレットにも十五万円とは記載されませんでした。

即日、理事長より話があり、「君は辰元グループのルールをまだ知らないのか。ペナルティだ」とお叱りを受けました。その後、川越副園長、辰元園長より説明して頂き料金については〃ご理解されました。

翌日、理事長より呼ばれました。お叱りを受けると思いきや、一言、「昨日は悪かった」とおっしゃられました。その際に思った事が、私みたいな若輩者に対して、謝罪される事は普通の方ならばできない事であり、理事長の器の大きさ、カリスマ性の高い方だと感じ、〃尊敬〃という気持ちとなりました。

その後も、理事長、園長より、適切なアドバイス、指導を頂きながら自分の役割を果たしてきました。理事長が亡くなり、寂しさを感じていますが、辰元信新理事長より、医療内容等についての指導を受け、今の自分にできる事を行うことが、この五年間の感

謝と考えています。
微力ながらも、これからの辰元グループを支える一員になればと思っています。これからもご指導よろしくお願い申し上げます。

追悼文

辰元理事長を思う

アルテンハイム・グジブランド医務主任

広若 キクミ

平成十一年十二月末、友人の紹介で辰元病院へ面接に訪れました。事務長、婦長、と面接を終えた後、理事長先生に面接をして頂き、その時、内心ドキドキ不安感がありました。実際、前職場にまだ籍があるのに、私の都合で辰元病院へ面接に来たのですから、ルール違反と注意され不採用を言われるのではないかと、思っていたのですから。先生にお会いし、先生は簡単な話をされました。どんな事を自分で言ったのか覚えていませんが、先生が最後に、「明日から来て下さい」という言葉に驚きと感激でした。私にもまだ必要とされる職場があったのだと思うと、先生に何と感謝してよいかわかりませんでした。

あの当時の私は、精神的に落ち込み、顔色、表情共に冴えていなかったと思うのです。そんな私を採用して頂いたのですから、本当に感謝しました。平成十二年一月から就職という形になりましたが、今

までの救急医療と療養型の差にとまどいがありました。しかし職場の皆さんが私を高く評価して下さいました。しかし辰元病院に長く勤めている方達をさしおいて私が出しゃ張る訳にはいきません。チームワークの大切さはこの世界ですと仕事してきた私は十分理解していました。自分と同じ様に周囲のスタッフは大切です。そんな中、理事長先生の存在感、辰元病院の過去、現在、未来が少しずつ理解出来る様になりました。先生のいつも夢を追い続ける少年の様な心、職員への厳しいけど思いやりのある心です。一番思ったのは、入院している患者さん達への思いでした。

何でも思いついたら夢中になる性格をお持ちの理事長先生が、私を理事長室に呼ばれアンパンを片手に持ち、患者さん達へ一日一個ずつあげたらどうか、という事でした。家族のように思われ、アンパ



グジブランド駐車場の壁画①（橋口勝彦画）

追悼文

辰元忠理事長との思い出

アルテンハイム・グジブランド統括課長

河野 哲史

辰元忠理事長と初めてお会いしたのは、平成十年の就職試験の面談でした。面談の詳細な内容は忘れてしまったのですが、辰元忠理事長が、「おじいちゃん、おばあちゃんは好きですか」と面談時に聞かれたことは、今でも覚えています。この時、私は「はい、好きです」と応えたように思います。月日は早いもので、あれから十二年の月日が経とうとしています。

十二年の間には、色々な事があったように思います。辰元忠理事長は、第一に入居者の事を考える事の出来る人だったように思います。印象に残っていることといえば、春・秋に「入居者と散歩をして下さい」と話されたことです。敷地内には散歩コースが有り、職員は入居者一人一人に担当が決められていました。私は、初めは「忙しいのに」と思っていました。担当の入居者と散歩コースを歩いて見ると、入居者一人一人とゆっくり落ち着いて和やかな

ンを食べさせたいという思いだったのだと思います。グジブランドが完成し入居者が次々と入られる中で、新入居者への挨拶を週一回の宿直の朝にされてきました。私が一人一人案内して廻りながら、先生はにこやかに挨拶をされ、一人一人を大切にされていたのだと思います。いつも男子職員を連れて、行動力のある先生でした。いつも何かを求めて興味津々の日々だったのだと思います。

私は辰元病院へ転職して本当によかったと思います。救われたと思います。

今は信先生が理事長になられ、辰元先生の意志を継がれ益々この辰元グループが大きくなっていくものと思います。

夢多き理事長先生

安心して、安らかに！



雰囲気散歩が実施できたことを覚えています。それまで私は、介護とは五大介護がメインで、余暇活動等は時間が余った時にする事だと認識していました。しかし、実際に入居者と散歩をしてみると、本当は五大介護よりも、もっと大切なことだと気づかせてもらいました。

辰元グループでは、いくつかの伝統があります。伝統といえば、良い挨拶と臭いの無い施設だと思いますが、臭いの無い施設作りのために強酸性水での清掃は勿論、換気、高齢者特有のにおい防止の為、辰元忠理事長は入浴の実施を話されていました。私達は、直ぐに、芳香剤等に頼ってしまおうと考えてしまいましたが、辰元忠理事長は「身体を清潔にすれば臭いはなくなる」と基本的なことを話される方でした。このような、介護の基本的な事を、辰元忠理事長はとても大切にされていた方だったと思います。

追悼文

理事長先生の思い出

アルテンハイム・グジブランド介護主任

西蘭 幸子

私が辰元グループにお世話になりました、十三年が過ぎました。最初勤めた所は、特別養護老人ホーム裕生園でしたので、理事長先生と接する機会は少なく、時々、裕生園に來られた時にお見かけする程度でした。諸先輩方より「厳しく怖い方」と聞かされていきましたので、裕生園に來られた時はなるべく顔を合わせないようにしていた気がします。

理事長先生が素晴らしい考えをお持ちでいらつしやることを教えられたのは、私が勤め出して最初の昼礼か職員研修かでの講話で、施設を「老人天国」にすることが夢だと話された時で、それには共鳴させられました。

池やお花畑、そして鳥達がさえずる中をお年寄り達が笑顔で散歩して過ごせるような施設を作るのが夢だと話されました。そんなゆつたりした空間で過ごせたらどんなに素敵な事でしょうか。「すぐにでも

実現できるのでは」と思いました。しかし勤め出して次第に介護の仕事に慣れ、現実が解り出した頃は、本当に遠い夢になってしまいました。

又、理事長先生は無理難題を期間限定で出されることしばしばありました。新人の頃は真面目に受け答えして叱られたことが一度ありました。温泉を造られた頃、高岡在住の職員は一人五名、温泉を利用する人を集めて来なければいけなかったのですが、私は集められずに会議室に呼ばれ理由を聞かれました。「近所に高齢者がいない」と答えたところ、「歩いていける人に声をかければ集まるだろう」と言われた事を思い出します。運良く、海外より戻って来た主人を連れて行き難をのがれました。

その他にも色々あり、休憩時間を利用して職員で手分けして勧誘して歩いたことも今では思い出となり残っています。その頃は、住居を移そうかとも思っ

入居者にも、大変な愛情を注がれる方だったと思いますが、職員にたいしても愛情のある方だったと思います。毎年開催される職員のための忘年会等、たぶん他の職場にこれほどの忘年会があるだろうかと思いますが、辰元忠理事長の忘年会に対する思いは「職員に楽しんで欲しい」との思いからだっただろうと考えています。私は、忘年会は職員が楽しむことと、人の前で人を喜ばせる練習だと思っと思っています。職員は、毎日入居者と時を過ごすのですが、そこには、時には楽しみの提供が必要であると考えています。この時、忘年会で練習したことが生かされるように感じています。

最後になりますが、グジブランドには一階食堂に辰元忠理事長、辰元グループの理念が書いてあります。

今日一日を奉仕と感謝の心で過ごし職員として職務と技術の向上に努めます

私は、この理念を忘れず、入居者の為の、楽しい施設作りをグジブランド職員全員で行ってまいりますと思っっています。



てしまいました。その頃はまだ理事長との関係は間接的でありましたので、まだ私達は良かった方ではないでしょうか。

アルテンハイム・グジブランドの施設を造る話が私の耳に入っただけではなく経ってからは、理事長先生よりの呼び出しがありました。入浴介助中に「直ぐに来なさい」との呼び出しを受け、「今度は何を叱られるのだろう」と半信半疑で理事長室に伺いました。理事長はグジブランドを建設中で、どんな施設を造っているのか説明をされ、「今から現場を見に行くので一緒に来なさい」とのことでした。理事長は直ぐに出かけるつもりであったようですが、職務を中断してきた由を伝え、裕生園に戻りその話をした所、「仕事はいいので、理事長先生を怒らせないように」とのことを言われ、老健よりも一人行くことになり、四人でまだ基礎作り真最中の工事現場を見学に行かれました。その頃は、まだ異動の話はなかったのですが、裕生園では十年経ったら異動になるとの事でしたので「もしかしたら異動？」と思っていた所、案の定、少し経ちました異動の話があり、肩書きがつかなくなったら受ける事にし、グジブランド

す。夜は皆集まって談話したのですが、理事長先生は笑顔で話を聞かれました。あんなに緊張したキャンプは初めてで、良い思い出になりました。

私の理事長先生の思い出は、少ないですがこの位です。厳格で妥協を許さず真直ぐに進む性格、そして、発想の豊かさは、誰も敵われないことでしょう。もしかしたら天国で「老人天国」を築きあげているのでは、と思います。

そうそう、主任の役を拒んだ時、「君が育ててバトナタッチすればいいんだよ」と言われましたね。もうすぐ実現できますよ。

これからも、益々辰元グループの繁栄をお見守り下さい。安らかに。

を立ち上げる仲間に入りました。裕生園では、おんぶにだっこで皆さんにお世話になっていましたので、色々大変なことばかりでした。

施設が完成するまで、理事長は毎日かかさず見に行かれていたとの事。又、施設が始動してからも、毎日足を運んで下さいました。一週間に一回、満床になるまで、グジブランドに宿泊されていました。日中來られた時は、いつも中庭の見える所に座り、ワンちゃんや小鳥を見ながら何かを思案中のように見えました。

又、初めて霧島にキャンプに行くことになり、施設から女性二人、それも初めて参加するので、運転して行かれた男性職員は、「退職覚悟で来ました」と言われていました。私達は先輩の経験者より、キャンプでの手順を事詳しく教わって行きましたが、それに反して、別荘に着く前にドライブとなりました。順序が変わってしまい、緊張しっぱなしでしたが、三人で協力し、何とか理事長先生の気分を害さないうで済みました。裕生園の園長が心配されて、弟さんを理事長先生の話相手にと送ってくれましたので、私達は胸をなでおろし一安心したことを思い出しま



グジブランド駐車場の壁画②（橋口勝彦画）

(平成十八年七月にグジブランドが竣工した際に利用者のお一人が寄せて下さったお祝いの文章です)

グジブランド利用者 村岡 柳次

宮崎大学、医学、学芸、工学、農学、各部のキャンパスをバックに、鰐塚連山を眺望し、小松電子、沖電気の近代化工場を下に見る風光明媚なここ郡司分が丘に、この度、高齢者福祉施設アルテンハイム、名付けてグジブランドが偉風堂々、高台の緑にも映えて新屋が落成竣工、閑静な中にも近代を感じる、高齢者には淋しい想いを起こさせない保養・静養・再生・介護の素晴らしい殿堂が出来ました。送迎付きで通所介護のデイサービスも受けられる者からの感謝感謝の讃辞の漢詩を贈呈します。『アルテンハイム・グジブランド新屋竣工を賀す』と題します。

アルテンハイム・グジブランド

題賀新屋竣工

作 釈常真

瑞雲高閣賀竣工

家運隆昌祝福声

郡司分丘望鰐塚

一門余慶讚弥栄

平成十八年七月吉日

(正格平起式庚韻七言絶句)

(意味)

めでたい、何かを呼び寄せるような気運の雲が漂っています。素晴らしい殿堂が落成竣工、家運の隆昌は間違いないと、各界より祝福の声があがるでしょう。利用される方も思われるでしょう、幸せを。その筈です。鰐塚連山を遠く望む閑静で雄大ななここ郡司分が丘です。一門の企業の余慶、素晴らしい事業計画の弥栄を讃えます。

新屋竣工を賀すに題す

作 釈常真

瑞雲高閣 竣工を賀す

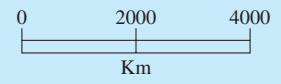
家運の隆昌 祝福の声

鰐塚を望む 郡司分が丘

一門の余慶 弥栄を讃えん



辰元 忠 世界旅行マップ



色の付いた国や地域が訪問したところ。五大陸すべてとたくさんの島々。
理事長室にはこのような世界地図があり、訪れた場所には印が打たれていた。

ヨーロッパ・中国

世界を旅する



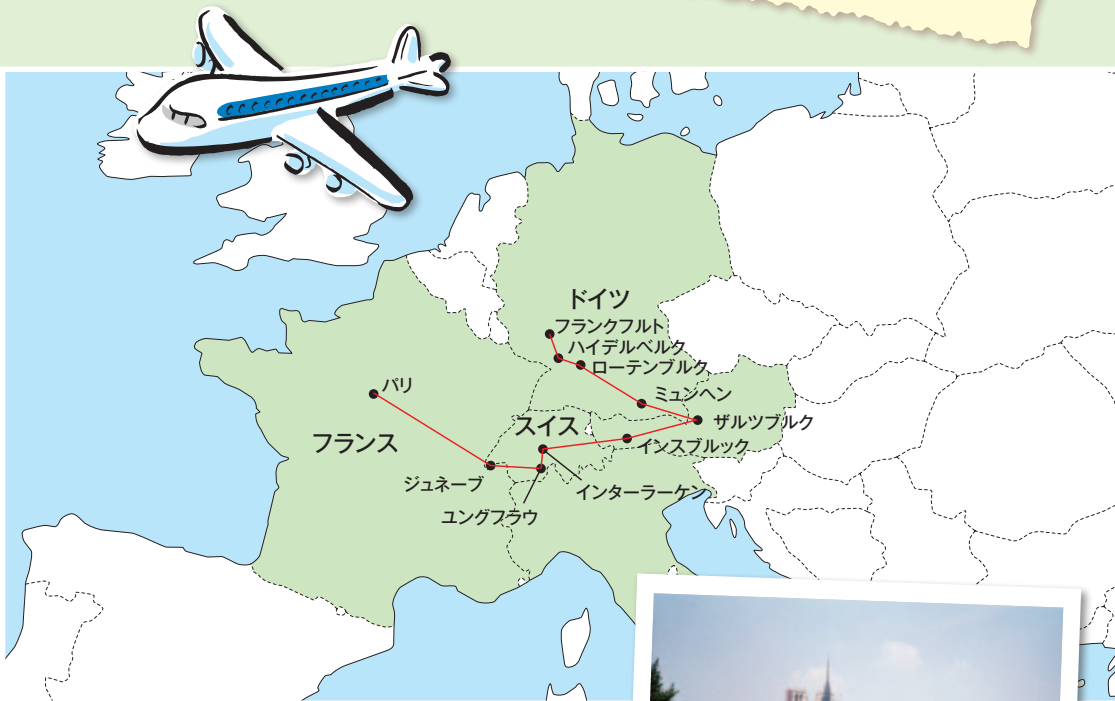
イタリア・ピサの斜塔
(平成10年、63歳)



ベルギー・アントワープの広場にて
(平成9年10月、62歳)



イタリア・ローマのコロッセウム前で (平成10年、63歳)



シルクロード敦煌の鳴沙山でラクダに乗る
(平成11年8月、64歳)



パリ、エッフェル塔
(平成4年、57歳)



パリ、セーヌ河のほとり。
うしろにノートルダム大聖堂が見える。
(平成4年、57歳)



ドイツ・バイエルン州の
ノイシュヴァンシュタイン城
(平成4年、57歳)

中南米



メキシコ・マヤ文明の
チチェン・イツァ遺跡
(平成15年5月、67歳)



世界最大のイグアスの滝
(ブラジルとアルゼンチンにまたがる)
(平成17年6月、70歳)



ペルー・インカ帝国のマチュピチュ
遺跡。標高2400メートル。
(平成17年6月、70歳)



ペルーのアンデス山脈で、
原住民の人たちと
(平成17年6月、70歳)



ブラジル・サンパウロの日系人が営む農園にて。
NHKドラマ『ハルとナツ』のロケ地でもある。
(平成17年6月、70歳)



アルゼンチンのパンバ大草原で大の字に寝転ぶ。
高校時代からの夢が実現した瞬間。
(平成17年6月、70歳)



映画『戦場にかける橋』のクワイ河(タイ)にて
(平成16年2月、68歳)



カンボジア・アンコールワットにて
(平成19年1月、71歳)



タイ・バンコクのワット・プラケオの前で
(平成2年、54歳)

東南アジア



マレーシアからタイまでの
イースタン&オリエンタル・エクスプレスの
車中で (平成16年2月、68歳)

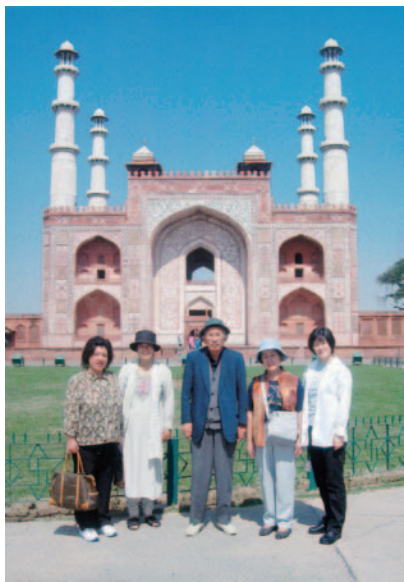


ベトナム・ハノイのホーチミン廟の前で
(平成19年2月、71歳)



フィリピンの病院と介護の専門学校を視察
(平成17年、70歳)

インド



タージマハル廟の門の前で
(平成15年10月、68歳)



インド・アーグラにある
タージマハル廟にて
(平成15年10月、68歳)



インド・ニューデリーで暮らしている
アフガニスタン難民の“里子”を訪ねて
(平成15年10月、68歳)



インド・ニューデリーのガンジーの行進の像の前で
(平成15年10月、68歳)

アフリカ



タンザニア・ンゴロンゴロ自然保護区にて (平成14年10月、67歳)



タンザニア出身の宮崎大学留学生を支援していた関係で、
タンザニアの実家を訪問。コーヒー豆をもらう
(平成14年10月、67歳)



感謝する心

暖衣飽食の今が幸せである事は間違いないが、それでも人間の欲望と満足度は限りがなく、人の心に不平や不満や嫉妬が渦巻き感謝する心が薄れがちである。

私より先輩のお年寄りは、もっと厳しい貧しい時代を過ごしてきたと思う。その証しに、患者さんを見ていると、食物を食べきれずに残し「もったいない」としまうところや、物を大事にするところを見ると身に詰まされる思いがある。

もったいないと思う心、物を粗末にすると罰があたるという心、すなわち暮らしの中で生きる事に感謝する心を持っているからである。

私達は、この感謝する心を持つ事によって人生観が変わり、生きる喜びも重なり、人を思いやる心も生まれるのである。

患者さんへの心も同じように考えると思いは一層深まる。永く生きてこられたその人生に、敬意と感謝を込めて我々は過ごしてあげねばと思う次第である。

(平成三年)



本人の
言葉より

職員に期待する

これからの病院経営の最大の柱は職員の充実と協力である。

これからの医療と福祉の大きな支えは人の力が大事であり、そのためには職員の処遇の改善と福利の充実につぎる。

また、働く人々も仕事を生き甲斐とし、仕事を通して社会に貢献し人間として大事な人間愛をもつことである。

(平成四年)

看護と介護の質が決め手

我が高岡病院は、平成三年から介護強化病院により経営が安定し医療の質も変化した。これからの医療はアメニティ(快適)の追求であり、サービスであり、医療よりも環境と看護が老人医療の最大のテーマとなった。(中略)

これから病院は大半が療養型病床群になり厚生省の管理をうけるが、選択していくのは患者であり最

後は看護と介護がクオリティーをきめる。諸君に期待するものは大であり、最後は患者さんへの愛だと思ふ。

(平成五年)

夢の実現

ここ数年、口を酸っぱくして療養型や老健の話をして来ましたが、法人や農振で振り回されて来ましたが、ここに来てやっと具体化して来ました。平成七年三月に農振がはずれ、四月には療養型病床群の移行のため第四病棟に着工する予定で、夏には老人保健施設、ケアハウス、在宅介護支援センター、及びデイケアサービスも一緒に建てようと決心して準備しております。小生として人生最大の転機ですが、現在までのところ事業は順調に成長して来、これまでやってきた実績を踏まえて建設するので迷いはありません。また、実現したあかつきには、宮崎いや日本中でもざらにあるというものでなくて、医療と福祉の融合で満足できるものが実現するものと確信しております。

思えば老人医療に踏み入れて二十年、初めは苦勞の連続でした。数年前から手ごたえ充分で、国がここまで老人医療や福祉に理解を示したことを感謝します。皆さんは、現在でも田舎にこつ然と当院や施設があることに驚かれるでしょうが、上記の施設が出来たとき、きつと自慢出来るものが高岡にできて誇りに思うと信じます。小生自身、設計をしていて実現の日を待つのが待ち遠しい思いで竣工の日を楽しみに生きています。

(平成六年)

複合施設オープン

一九九六年六月、永年の夢の複合施設が完成した。永い時間と努力が実り、お年寄りのあらゆる施設がオープン出来たことは、皆さんの協力があればこそ完成出来たのであり、改めてお礼を申し上げます。(中略)

入れ物が出来てもこれを満たし、生き生きと息を吹き込むのは、皆さんのソフト、つまり活躍であります。

複合施設の特徴は、おのおのが連携し適切に対応できるところにある。医療と福祉は両輪のごとく助け合いながら進んでいくのが理想である。我々はお年寄りの余生と疾病の不安を助けながら人生を終えなければならぬ。生は輝き死は沈む太陽のようなもので、誰でも訪れる死は、心温まる真心でなければならぬ。

(平成九年)



アジルな(素早い)経営

宮崎市内に診療所を開業して二十数年余りが経った。開業してすぐに感じた事は、開業の将来性はそのまま推移していくと、早晚、医師過剰に陥り、競争が激化して経営困難になるのではないかということだった。それから福祉を思い立ち、老人医療のエリアに勇気をもってチャレンジすることとなったが、

一カ所に集中できたのは、土地であり、経験であり、私のプランニングと皆さんの協力が生きて出来上がったのであり、偶然ではありません。九州にも数少ないものであり、皆さんの誇りにもなると確信する次第です。(中略)

お互いの関連と助け合いこそ複合施設のもつ最大の武器であります。これからの医療は福祉も国の財政難でサバイバルが厳しく、しのぎを削っていきま。その中で医療と福祉ががちりスクラムを組み、しかも集中し、より質の良いサービスを提供出来れば、他の追従を退けしかも最大のメリットを受けられることは自明の理です。

(平成八年)

お年寄りのために

我々は、毎日を医療費抑制と福祉の低迷の中懸命に働き、医療と福祉を支えなければなりません。なぜなら、高齢者達は今日という日も皆の手が必要だからだ。休むことなく、たとえ国が傾こうが汚職があろうが老人は厳しい冬と同じで暖かいマントが必要なのだ。

当時は、国や世間、医療も冷たく偏見を持ち、この道に入るドクターはあまりいなかった。泥田の中で泥まみれになるような条件の中でじつと報いられる日を持った。

今日、病院の増改築と施設の拡充のおかげで、老人の医療福祉保健の大合唱となっている時代を迎えている。大多数のドクターは人口の二〇%に満たない老人に熱い視線を送っている。今や老人医療費は三割を超え、福祉に多額の投資をして増大する一方である。わずか二十年余りでこんなにも医者や行政が変わるのかと驚くばかりである。はじめの十年位の間は、行政も他の医者も世間も老人医療をバッシングし続けた。いわく、金儲け主義、劣悪な処遇、落ちこぼれなどという見方をした。しかし、数年前から医師過剰と医療状況の悪化と行政の高齢化対策の変化により老人医療は日の目をみることとなった。

設備も一新され、高齢化の経営に医療関係者がほとんどシフトしてきた。規模の拡大が高齢化とからみ、医療のみでは不安で福祉との連携が始まった。小生はこの宮崎で早くこのような状況になると予想し、人よりも早く気付いて先手を打ったと自負して

いる。しかし、様々な妨害があり、想像を絶する期間に先途を空費させられた。医師会の反対、農振の十五年にわたる空費、周囲の非協力や妨害などもあったが、着々と前進してきた。

着想や実行力、そればかりではなく、運や天や時が味方した時、努力は報いられる。

ここまで来て未来を思う時、また、新たなアイデアが浮かんでくる。心をいつも新鮮に、そして柔軟にし、時には発想の転換をはかり思考を巡らして、経営に新しい息吹きをしなければならぬ。迫り来る二十一世紀を迎えられるよう、世の中は日々進んでいくが沈没せぬよう、トップは船を操る水先案内人でなければならぬ。人よりも早く人よりも着実に動かねば、経営は生き延びることはできない。

企業も人も生きていく限り刺激され、アジルに対応しなければ、経営は活性化しない。人間はマンネリを恐れ、変化を受け入れ、緊張・継続を保ち、未来に起こりうる事象を凡てに予測し、リーダーとしての信念を持って、多くの部下を育むべきであると信じる。

(平成十年)

迎春

思えば昭和五十年この地に立った時、今日の発展を思うことは砂漠に緑を求める様な感慨でした。努力と挫折は縄のように交わり幸運は執念の中で微笑みました。十年先二十年先という時間と空間を想像し、いつか社会がお年寄りを大事にする時代が来ると思い、また高齢化がこの仕事に関心と理解と力を貸してくれると思いつつと待ち続けておりましたら、まさに時代は予想以上の広がりを見せ、今日老後のこと、自分たちの両親のことを考えない人はいなくなりました。(中略)

施設はケアハウスの落成と二期工事への希望、グループホームの完成とまた増築への希望は消えることがありません。それで終わりが近づき、スペースの限界、資力の限界、体力の限界が見えて来ました。あと、残された時間を力の限り、これらを終生の最後の仕事と思えばラストスパートしたく皆様の力を頂けるよう祈ってやみません。

(平成十二年)

辰元グループの挑戦

施設の環境整備もしていきたいと思う。散歩コースを整備し、温室や絵画による情緒の心を養いたい。そして、清潔と建物の中の整頓や掃除は、病院施設の中で最も大事である。

癒しの療養病院をもつターミナルケアを中心としたシルバーゾーンとしての存在は、これから核家族の少子化の中でお年寄りの最も頼りになる心と体よりどころとして幸せな人生をおくるオアシスにしたいと思う。まだ、環境の整備は終わっていない。

これからの辰元グループはまだ挑戦中である。ここに来て良かったといえるグループになるためには、みんなが心を合わせ、惜しみなく努力をしなければならぬ。スケールの大きなグループは他にもあるが、辰元グループはスタッフの一人ひとりの力を発揮しやすく、また全員がまとまりやすい規模だと思ふ。他の施設の見本となるよう内容を充実させ、患者さんの幸せを願い、全力をあげて取り組まなければとてもエクセルントホスピタルにはなれないだろう。(平成十一年)

社会福祉法人信愛会

特別養護老人ホーム裕生園がオープンして二十四年が経った。その功績が認められ今年五月、園長が藍綬褒章を受けた。

社会福祉法人とは、社会奉仕であり、崇高な精神で行うものだが、未だに多くの人が曲解して偏見をもち、また設立した人の中にも不正をしたり、他の人に売り渡したりするケースも多い。社会福祉法人の設立の費用は補助金が四分の三、私費(寄付)が四分の一である。土地も寄付が多く、億以上の投資である。利益はなく施設長などの給料のみで、返済は毎年の寄付で行い、裕生園も二十年かかって終わったが、施設の増改築で同じ位また寄付をしている。：理事長とは創立者で寄付として投資はしても無収入である。むしろ経営の責任は大きい。(中略)

福祉とは、社会の弱者を助ける仕事であるべきで、もし利益がでるようにしたら、弱者を食いものにする人が出てくる。したがって、社会福祉法人の基本となる社会奉仕の精神は、世間から尊敬されてこそ当然であり、多くの人の理解を得ていくべきだと思

う。国にかわって個人が経営するためには、奉仕の精神、宗教心がなければできない。〔中略〕

社会福祉法人は闇夜に輝くタイマツのように社会を照らす弱者の一点にならなければならない。

（平成十二年）

経営について

経営のコツは頭で考えて出てくるような学問的なものではなく、実行であると思ふ。つまり、入るお金を測り、出るお金をコントロールすることである。分かりやすく言えば、収入がいくらで支出がいくらか、これをしつかり把握して無理のない運営をしていくことである。この事が皆分らないし、経営する上での「永遠のテーマ」ともいえる。経営は口で言うように自由になるものではないが、経営していく以上はその事に対して突き詰めて行かねばならない。〔中略〕

投資をすることは、同時に返すことを常に念頭に置くべきである。お金を借りることは決して悪いことではない。返せない借金をすることがいけないの

である。〔中略〕 また、いっぺんに借りずに半分ずつ借りる。そして、三分の一ずつ返していく。このように、大きく借りずに少しずつ返す。これが私の経営学である。このように考えると私の経営は実にシンプルだと思ふ。事業がいかに大きかろうが小さかろうが経営の基本は一緒である。無理のない投資をして確実に返す。この事がもっとも大事なことなのである。

成功とは、一挙になされるものではなく、山登りと一緒に一歩一歩確実に登っていくしかないのである。本当に地道にしかも、確実にまるでアリのが歩くようにやっていくのである。

私はこの理念のもとに無理をせずに返せる範囲の投資をしながら事業を拡大してきた。その結果、私は毎年のように新しい建物を造り、今日の辰元グループの事業基盤を築いてきた。そして、最初から大きく派手にやることはせずに、少しずつ確実に大きくしてきたのである。

私の経営には派手さはない。しかし、辛抱強い。従って、絶対に無理もしないが失敗もしない。私の経営は一口で言えば「手堅い」…である。〔平成十五年〕

第二部 自分のこと、社会のこと

人生の節目

平成元年六月の『クイーンエリザベスⅡ号』ハワイツアーは、十年來の夢のツアーで、結婚二十年と誕生日を記念して、忙しかった半生にくぎりとして、家内と参加した事は、家内への慰労と自分へのステップと考えると本当に実行してよかったと思ふ。

皆さんも日常性の脱却は色々あるでしょうが、てつとり早く旅に出るのが一番です。といつても旅は、お金や余暇と健康がないとまとまらないし、第一、子供がいるとまず難しいですが、子供が巣立ってしまつと、二人旅は本当に目の前にあり、あとは決断のみです。しかし、ともするとお金が優先しますが、これもお金がある人が必ずしも行くとは限らず、金はあるとまわしにしていく人も多いのが現実です。中にはお金を大事にして死ぬまで使わずとも行かず、楽しみも知らず死ぬ人もいますがほんとうに愚かな人です。〔中略〕

水平線まで海で何も見えず、ひたすら船は時速五十キロで滑るように走るのみで殆んど揺れず、無限の中に立ちつくす時、人は人間の小ささや、またいやな思いも失せて生まれ変わるような時間を感じるのには恐らく誰でも同じだろうと思ふながら、びっこひきひき船内をさまよひ歩きした。〔中略〕

日本人はハワイに来てせかせか歩き回り短い日数で買物をすませ、土地やマンションを買いあさり、ただアクセルを踏みつけるのを見ると、自分も同じ国民として恥ずかしいと思ふ。これからは、私達の人生に旅は思い出や教訓の糧となり豊かな人生を皆さんと共にわかち合ひ、皆さんと共に歩いて行くことと思ふこの頃の心境です。

（平成元年）

母の思い出

私は、実の母の思い出が殆どない。母は三歳の時、病気で亡くなったのである。

当時、新しい家への引越して無理して風邪から肺炎になり、薬石の効無く三十歳で急死したのである。

亡くなった日の事は、数十年後の今でもよく思い出す事ができる。

母は苦しい息の中から、名前と自分の思い出を吐きながら亡くなったのである。私は、人生の始まりの記憶が母の死であり、生と死の違いをわずか三つで知ったのである。

（中略）

母の死と、医者になろうとした事は、それ故無関係ではない。母の思い出は、母の姉妹（叔母）から聞いたので、かすかな記憶と重ねて想像できる。大変な綺麗好きで、朝から掃除をし、ほうきやはたきを手から離さなかったそうである。

（中略）

亡くなった直後から叔母（継母）が来てくれ、現在九十歳を越えて健在である。亡くなった母は、背も高く（一六〇センチ）美人でやさしい性格だったそうであるが、あくまでも想像と伝聞のみである。

（平成四年）

阪神大震災

平成七年一月十七日、地震直後テレビで映し出された画面を見て、多くの人はこの世のものとは思えない地獄絵をみてショックをうけ、知人や親戚のいる人は安否を気づつかい、また多くの死傷者のことを思い、多くの日本人がテレビにくぎ付けになった。私もその一人で、懐かしい阪神地方の様子が無残な姿をさらし、また多くの人々が傷つき、病人もいるかと思うとじっとしておれず、なにか出来ることはないか、「そうだ医療ボランティアで行こう」と家内に話したところ、「そんな危ない所、また混乱した所には入れない、またとても無茶だ」と言っておくし、くれず第一関門は不合格だったが、私は一生懸命、「僕は自由意志で行くと言ったら行く。やがてお前も行って良かったと見直してくれるだろう」と言っ行って行く事押し切った。（中略）

またにも神戸に入れないと思い、深夜に神戸の後背地から入った。着いたのは午前零時だった。夜の神戸は人も車も少なく、それこそ町はめちゃくちゃで道路も壊れてともに走れなかったが、それでも



一時間くらい車で走りながら、私と助手二人は破壊された神戸の町を見て、多くの死傷者や財産を失った人々のことを思い胸が痛んだ。（中略）

若いボランティアのナースが一生懸命診療をしていた。ボランティアに来たことを告げると喜んでくれ、診察にくる患者をみていると奈良医大の医療グループが応援に来て、彼らの真摯なやさしい診療ぶりをみて、私自身ホッとして被災直後の混乱とその必要性を聞くと、私自身一日でも早く来たらもつと役に立ったかもしれないと思うと、すべてにおいて災害は一分一秒を争うもので、時間が経ってからすることはそれこそタイミングのずれたものになることはやむを得ないと思った。二日間、車の中で寝たのだが寒さと疲労で眠れなかった。・・・夜の町は夜どおしサイレンと車の混雑であわただしく、町はまだ災害におびえ余震の予感で人々はまだ自然の恐怖でじっと我慢したのだ。ただ驚いたことは、関西人のしたたかさで、誰ひとり泣いたり沈んだり悲しんだ風に見えず、略奪もなく、それこそ世界の人を驚かした様に、私の目にも、誰一人として、生きた証しを取り戻した時、再起のために平常心を失わ

ない姿を見て、日本人は世界中で最もクールで豊かだと思い、必ず神戸は復興すると思い、ホッとした。
〔中略〕

宮崎に帰って、神戸に行ったことは内緒にしておくつもりだったが、知人が宮日新聞にTELし、取材を受け新聞に載ったら色々な反響があった。多くの人は好意的だったが、一部では多少の詮索を受けた。私は自分自身、正直言って、したい事思った事を実行するだけで気が済む性格で、打算は一切ない。神戸に行ったことは助手の二人も人生観が変わっただろうし、私も世の中を見る人生観が少し変わった。人生はなんと運に左右され、また一夜にして敗者になるのか、また人間が造ったものはこんなにもろいのか、人の運命はなんとほかないのか、心の準備がない人は一夜にして心を病み、体もまいってしまうと思う。人生は一度しかないのだ。その人生計画が狂いこれからの人生が灰色だとすれば、人は何の楽しみもなく生きていくのだろうと思うと、日々私達はもっと人生を大事にし、心にいつも災害やアクシデントを思い備えなければならぬと思った。

(平成七年)

なものを造り、百年を耐えるものを造るだろう。ホテルは五百部屋ぐらいでよいだろう。サミットはいらない。オーシャンドームの代わりにプールを色とりどり造るだろう。車社会だからオートキャンプ一千台スペースで造りたい。グルメと子供用のゴルフと屋外コンサート、バンジージャンプ、スポーツのスペースなど、金額は数分の一である。屋外で太陽を浴びて、ホテルも安く、食べ物も安く、マリンスポーツを主にする。大衆を味方につけなければリゾートとはいえない。

(平成十年)

税制改革

日本における税制は江戸時代より悪く、ついこの前まで高額所得者は懲罰的に課税され、九〇%もとられていた。数年前、多少は改善されて六五%まで減った。つまり高額所得者は所得の三分の一とられ、残りの三分の一しか所得は残らない。江戸時代の税率は六対四か、五対五で所得の半分以上は残る。また、外国も平均して五〇〜七〇%以上残るのである。

フェニックスリゾートの悲劇

宮崎のリゾートフェニックスはバブルの最高潮の時にできた。現在、経営が赤字で苦しんでいる。…要するに県や市を巻き込んで宮崎の将来の浮沈をかけている全国一の借金のスケールである。借金が累積し、一千億円に近づいている。県民は他人事みたいに呑気である。…海があるのに海に入らず、真水で泳ぐという考えはリゾートではない。自然の中で低廉なバラエティーのリゾートでなければ、大衆に飽きられるし、コストがかかってキープできない。経営者は経営についてのビジョンを持ち、失敗を恐れるべきである。

全国の中で自然環境が最高に温暖な宮崎は、リゾートの資格充分な観光地であるが、問題はアイデアであり自然との共生であり、平均的な日本の消費力である。巨大ホテルは東京にあるべきで、宮崎にはいない。外国でもホテルは『45(フォーティファイブ)程、巨大なホテルはほとんどない。〕〔中略〕

もし、自分がリゾートを造れといわれたらどんなものがいいだろう。奇をてらわずにオーソドックス

一方、日本の最低所得税額は五百万円近くであり、英米は百〜二百万円位である。よって、日本はたった三分の一の国民が税金を納め、大半は無税といひびつさである。そしてあらゆる国のサービスは平等であり税金を納めない人が権利を声高に叫ぶ。グローバルスタンダード、つまり世の中で日本ほど金持ちはできにくく、また、重税にあえぐ国はない。これでは共産国家や社会主義の行き過ぎである。取りやすいところから取るということは、国の活力をそぎ、国家財政の破綻を来たすことにつながっていく。

税金をたくさん納める金持ちは税率の低い国外に出してしまい、税金を納めない国民ばかりが残ると税収は減ってくる。そうならないようにみんなが負担し、活力を生み出さなければ福祉も出来ない。

税収を広く納めるには、消費税を一〇%に上げる。日本の消費税は世界一安い。世界の消費税は一〇〜二五%である。韓国の消費税は一〇%で内税であり、税金を取られたという感じはしない。声高に消費税を悪く言う人もいるが、サービスは有料にすべきである。国や県のサービス、そして救急車なども有料

にすべきである。政治家や官僚も早くシンブルで外国並の税制にしなければ金持ちも国外に逃げて、声高に税金を納めない低所得者のみいたところで意味がない。〔中略〕

税金を一方的に取られるのでなく、国民のため、国家のために正しく使うのであれば仕方ないと思う。だが、今のような税金の無駄遣いは絶対に許されない。無駄遣いや不正がわかれば、責任を明確にし当事者から罰金をとるべきである。

(平成十年)

二十一世紀

二十年程前、僕は二〇〇〇年まで生きられたら仕事を辞めようと思いい、がむしゃらに頑張ってきた。何故、そう思ったか？ 実父と義父が同じ位の年齢で逝った。だからその年齢よりも生きていけたら「おまけ人生」だから、人生をゆつくり歩こう、第一線から退いてのんびりしようと考えたからだ。そして今、ほぼ計算通りに成ってきたように思う。二十年前こんなうまくいくとは思わなかったが、目標を

した。私は入社してすぐに大阪の本社へ赴任し、その後京都に半年、姫路に一年半、宮崎に二年間勤務した。初任給は十五万円で、当時としては良い方だった。私はこの期間、会社から頼まれればどこへでも審査に飛んで行った。それで、百五十名の社医の中では常に審査件数はトップクラスだった。

医者はえてして自分の専門分野のみの知識に偏って視野が狭くなりがちであるが、私はその点この五年間の社医体験で世の中をよく知ることが出来た。そして、医者 of 厳しさやサラリーマンの厳しさを理解できた。これらの体験を、私は開業医になってからも活かしたが故に、今日の事業基盤を築いてこれたのだと思う。保険会社の審査の仕事は私にとって、きつくもなかったが、今一つ面白みがなかった。私は宮崎に勤務していた時、上司の理解不足とレベルの低さに幻滅し、思い切って退社した。今、思い返せばその時辞めたのは正解だった。私はその後、宮崎市内に医院を開業し、数年後に特老を高岡に設置しながら事業を拡大してきた。そして、一心不乱に働き、今日の辰元グループが完成したのである(職員総数四百名)。

持ち、努力をできてきて自分の予想以上に成果を上げることができた。予想通り医療界は厳しくなり、高齢化社会になり、高福祉社会になった。だが、これからの二十年先はどうなるのか！正直いってわからない。予想されることはまず少子化による人口の減少、労働力不足による外国人の増加、環境汚染による癌化と奇形化、短命化、弱体化等、年金のショート、教育の荒廃、道徳の退廃と戦争の偶発化、温暖化と食料不足など、多くの不安材料を抱え、地球の危機である。〔中略〕

(平成十一年)

社医と妻

昭和四十二年に私たちは結婚した。私は家族を養うためには厳しい開業医よりも勤務医の方がよいと思いい、日本生命の社医として新しい第一歩を踏み出

私はよく自分達夫婦のことを「熊の魚取り」に例える。とにかく私は魚取りの名人であるので、今まで何百匹という魚を捕っては後ろに放り投げしてきた。それを妻がせっせと拾い集めてきたのである。私もよく釣ったが妻もよく拾ってきた。そして、私がふと振り返ってみると、妻は私が期待していた数よりもずーっと多くの魚を集めていたのである。そして、それが今の私達の事業基盤になったのである。

私が築いてきた事業基盤がここまで大きくなったのは妻がいたからだと思う。私は妻の偉大さを素直に認める。そして、苦労も多かったが、私と妻とのコンビネーションも良かったのだと思う。

妻はA B型で個性的である。そして、私のやることには何でも反対し、批判してきた。でも、私がかえってそれをバネに頑張ってこれたし、最初は彼女を突っぱねているが、結果的には彼女の希望を最大限に取り入れてきた。何故なら、私は心の中では常に、妻のおかげで今日があるんだと思っているからである。

〔中略〕

男と女は運命共同体である。一人で出来ないことも、二人でやれば出来る事がある。私達の事業も個

性の違う二人が共に頑張ってきたからこそ成功したのだと思う。

(平成十五年)

設計について

私は三十八歳の時に医院を開業した。その時、三階建ての建物を設計し、業者に依頼した。出来上がった設計図を専門の設計士に見せると、それがあまりにも法律の定める基準にびったり合っているし、全く無駄のない造りになっていたので彼らは驚嘆した。

開業してから五年がたった頃、私は将来のことをふと考えた。医院の仕事も悪くはないが、将来病院も増え、競争が激しくなると大変になる。それなら、いつそのこと、以前からやってみたかった福祉事業を、儲からなくてもいいのでやってみようと思った。当時は、ほとんどの医者が福祉に対して理解がなかった。私は鹿児島へ行き、特別養護老人ホームなどの施設を見学に行った。そして、高岡が便利だったのでそこに特老を開設した。〔中略〕

私は、今までに合計すると四十回以上の設計をし

てきたが、どの建物を見ても一寸の狂いもなく、超合理的にできている。他のどの設計士が書いたものよりも確実に安く建てられ、目的に合って無駄がないと自負している。

これは私の推定であるが、今までに私が手がけた建築は、補助金を含めて総額約三十億円規模にはなるであろうが、この建築を一般のゼネコンに頼めば四十億円は軽くかかっていたと思う。つまり十億円は無駄をなくした事になる。十億円を儲かる為には百億円の売り上げがないといけない。そう考えると少しでも無駄をなくし、コストを下げるこの大切さを感じる。〔中略〕

私の設計も徹底した合理主義が基本である。それ故、家内はもう少し私の設計にゆとりがあった方が良いと言うが、私はできるだけ無駄をなくしてコストを低く抑え、元の取れる事を一番に考える。〔中略〕

人間は誰でもいつかは死ぬ。そして、死んだら何も残らない。しかし、生きている間に建てた建物はいつまでも残る。私はこれが私の銅像だと思っている。最後に私の考えとしては、建物には装飾に飾ら

れた芸術としての豪華な建物も世の中にはあると思う。しかし、私にとっての理想の建物とは、シンプルであり、無駄がなく、飽きが来ず、建築基準にしっかり合致したものが良い建物である。私自身その理想に沿って設計してきた。

(平成十五年)



ひつとべ



「ひつとべー」は薩摩の言葉である。薩摩では、「泣こかい、とほかい。泣くよりひつとべー!」と言う。つまり、窮地に立ったときは恐れずに思い切って決断し、やってみろということである。

鹿児島人は、関ヶ原の時代から歴史を左右する重大な場面で決断してきた。そして、恐れずにいったん跳ぶ決心をしたら絶対に後悔しない。これが鹿児島人の気性であり、しっかり定着している。私も今まで何回もひつとんだ。そして、勝利してきた。

(平成十五年)

いっちゃん

宮崎弁で「いっちゃん」という言葉は、きちんとせず、曖昧でいい、という意味であり、ちっとも前向きでなく縮まりがない。しかし、この言葉は宮崎の風土にはぴったりの言葉である。前作で私が書いた鹿兒島弁の「ひっとべ」は、私の生き方そのものであるが、「いっちゃん」とは対照的な言葉だ。「ひっとべ」は、決断して大きく跳ぶ、という意味で、非常にせかせかせした印象を受ける。若いうちは大いに跳ぶべきであり、跳ぶことで成長する。

〔中略〕

私が宮崎に住んで間もない頃、「何故、宮崎の人はこんなにのんびりしているのだろう？」と思っていた。ほとんどの人が慌てないし、急がないという印象を受けたのである。若い頃は宮崎の「いっちゃん」という考え方を、発展性がなく良くない考え方だと思っていた。しかし、私も年を取ってくると、「いっちゃん」という言葉が実に心地よくなってきた。今の私にぴったりなのである。

ある程度の年齢を重ねてからの人生は、「ひっとべ」

だけではだめである。「いっちゃんライフ」つまり、ゆっくり、のんびり「スローライフ」でいいと思う。これまでの「ひっとべライフ」は、積極的だがあまりにも全ての事に急ぎすぎてしまう。人生の後半は、この「いっちゃん」が実にいい。本当にいい言葉だ。宮崎の人は、本当に心が優しくのんびりしている。人生の後半に、宮崎のような住みやすい土地で生活できるのは幸せである。私はこの土地に老人施設をたくさん造って、多くの人に幸せになっていただきたいと思つて事業をやつてきた。老人施設は、ゆつくりのんびり時間が過ぎる場所であつてほしい。

(平成十八年)



故 辰元忠 享年七十四歳 戒名 裕徳院釋忠信

早いもので、主人が亡くなって一年も経ってしまいました。お通夜の時に、大塚町に開業した時から職員をはじめ、多くの人が駆けつけて下さいました。個性の強い主人でしたので、色々と思ひ出話が盛り上がり、追悼文集をつくらうと職員が計画をいたしました。皆様からの思い出文も集まりまして、ここに完成する事が出来まして、真に感謝に堪えません。思えば長いようで短い主人との生活であったようで、毎日が気ぜわしくアツという間の生活でした。

主人は三歳で実母を亡くしておりましたので、三つ子のまま大きくなったような性格で、色々注意し

たりすると、「性格は死なないと直らない。あきらめよ！」といつも言われており、「あーそうなんだ！」夫婦は足りない所を補って一人前になるんだ、と思いなおし、二十代の時に私は「川の流れば逆らえないから、川の流れるように生きよう！」と決心しました。のちに美空ひばりの歌『川の流れるように』が大ヒットしました。

開業して以来、二人三脚で事業をしていく間に意見のくい違い等多々ありました。「いつも職員の生活を守らないといけない」と言って、反対したりあきらめたりしてきましたが、今日、四百四十三人の大所帯になったのは、主人の強い信念と何事にも挑戦したいという気持ちがあったからと思います。それにもまして、職員が辛抱強く付いて来てくれたことに、本当に感謝に堪えません。

主人の一生は

*犬好き

結婚してすぐ犬を買って以来、犬のいない日は今だに一日もありません。毎日の散歩のお供、通勤のお供、アニマルセラピー犬として各施設で犬を飼ったりして、我が家では犬が家族の中和剤でした。

*車の運転が好き

地図を片手に車の運転。運転することが好きなので、宮崎から北海道札幌まで三人で運転を交替しながらノンストップで走り続け、当時は高速道路も全開通していないのに日本縦断の記録に挑戦。国内旅行は自分の運転で走り回ることが多かった。ドイツのアウトバーンはバスで走り、アメリカ横断は夢で終わった。

*設計が好き

中学生の時、実家の旅館の増築の設計をして父親に渡したら、その通りに家が出来上がった事で、設計に興味を持ち、今までの病院等の平面図はほとんど自分の考え通り。八角形を作ったり、ある時は、

イタリア旅行に行つて建築を見て、帰つてすぐ壁の色とかの変更をしたりして、頑固に自分の考えを入れるので、設計事務所や建築業者泣かせの施主でした。

*旅行好き（歴史好き）

世界地図に旅行した場所を記入して、世界遺産等の旅に挑戦していました。

船旅は神戸港一〇〇周年事業の時。クイーンエリザベス二世号でのハワイまでの広い太平洋の船上は退屈する暇もなく、広い船内を歩きまわりました。

中国山峡ダムの完成前に、黄河のクルージングで、『大地の子』の映画のラストシーンのロケの地を体験し、広大な黄河と山峡ダムの大きさに驚きました。

北京からウルムチまでチャイナオリエントエクスプレスでのシルクロードの汽車の旅は、広い中国を横断する旅で、ゴビ砂漠、タクラマカン砂漠、西安（長安）の歴史、莫高窟の敦煌、トルファン、ウルムチと、中国の広さを満喫しました。

メキシコは、ラ・サール世界大会に参加し、カリブ海のカンクン、マヤ文明の遺跡、ピラミッド等、



理事長が亡くなった2ヶ月後に3人目の孫の明香ちゃんが誕生。
元気で仲良しの3姉妹。



2番目の孫の美友ちゃんが誕生。
信さんに抱っこされているのが真彩ちゃん
(平成19年、72歳)



理事長が亡くなった7ヶ月後に
4人目の孫の孝図君が誕生。
理事長の赤ちゃん時代に似てませんか？



忽然と消えてしまった文明の遺跡、天文台等。
アルゼンチンのパンパは高校時代からの夢の土地。
マチュピチュ、イグアスの滝、アルゼンチン山脈の上空を飛行機の上から眺める景色は何とも壮大でした。
イスラエル・エルサレム：三大宗教のメッカ 等々

★老人ホームの夢

鹿兒島の温泉研究所へ勤務している時（二十歳代）、お年寄りと温泉に入っている時、老人ホームを作る夢を語った事から、昭和五十二年裕生園建設に始まり、それ以来、国の施策に乗り、病院を中心に介護保険事業を全て運営する事になり、いつも先へ先へ走り続ける性格でしたので、次々と事業を取り入れて今日に至りました。

『光辰』は人助けのために始めましたが、その後はグループ内事業としてやっています。

私も長年の仕事の経験から、「死に様は生き様だ」と思ったり、「明日の事はわからないから一日一日を大切に過ごすこと」と職員に言っておりましたが、

本当にこうして思い出すと、主人の人生は自分の夢を追いかけて行ったようで、常々、「太く短く生きる」「寝込む時は死ぬ時だ！」「銀婚式を行った時には、「金婚式は出来ないだろう」「2000年まで生きたら良い！」等と、今思えば自分の死を考えて、思い残す事のない人生でいつまでも自分の夢を追い続けて、思い通りの人生であったと思います。

自分の夢をかなえる事が出来たのも多くの人との出会い、縁、職員の頑張りに支えられて来たと思います。

主人亡きあと、三人目、四人目の孫が生まれて、家族が増えて賑やかになりました。

そして一年忌を迎え、アットという間の一年間でした。

ここに追悼文集に寄せて下さった皆様や多くの職員、長年交流のあった方々に感謝しお礼を申し上げます。



生前から数知れないほどのエピソードや「伝説」を持っていた故辰元忠前理事長の追悼誌をぜひ作ろう、という話が、理事長が亡くなってすぐ持ち上がりました。ご家族、ご親戚、ゆかりのある方々、職員、OBといった多くの方達の賛同を得まして、今日、このような冊子が出来上がりました。ご協力いただきました本当にたくさんの方々に対しまして、心から感謝申し上げます。

続々と集まって来る追悼文を読み進むにつれて、まるで霧が晴れるように辰元忠前理事長の全体像が浮かび上がって来ました。私達は、辰元忠という「山」を、「森」を、その全体的な姿としては、実は知らなかったのではないか、という思いに今、駆られています。とても大きく、そして純粹… それ故に、通常のスケールでは計れない、といった感じですよ。

この冊子は、故辰元忠前理事長を偲び、その功績を顕彰するものですが、現在の辰元グループの発展の歴史を振り返る証言集でもあります。故理事長の御遺志、創立の原点を確認するためにも、繰り返しここに帰って来たいと思います。

最後に、本来でしたら故理事長への追悼文をお願いすべき方々がもつとたくさんいらっしゃったかと存じますが、今回はこの文集になりましたことをお詫び申し上げます、ご理解を賜りたいと存じます。

辰元 忠先生 追悼誌
泣くよかひとつべ

発行日 平成22年6月26日

発行者 辰元忠先生追悼誌編集委員会
(編集長 川越淳)

〒880-2221 宮崎市高岡町内山2407番地3

電話番号 0985-82-0196

F A X 0985-82-0326

ホームページ <http://www.sin-ai.or.jp>

メールアドレス yuseien@qtnet.ne.jp

印 刷 小柳印刷株式会社

〒880-0803 宮崎市旭1丁目6-25

電話番号 0985-24-4155
